

無憂樹

泉鏡花作

目次

花鳥たがね	六一二
玉の臺	六一八
田原平兵衛	六二六
鬼門	六三三
扇屋、ひな唄	六三七
辻占	六四七
扇折	六四九
矢羽の簪、むし眼鏡	六五六
花一輪	六六四
惑星	六七七
花園、宮殿	六八二
ひとり寐	六八七
投松明	六九四

刑事部屋

七〇七

まぼろし

七〇九

東條判官

七二一

しるしの松

七二七

白き炎、月裏法廷

七三七

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

其樹安住。上下正等。枝葉垂布。半綠半青。翠紫相暉。如

孔雀頂。又甚柔額。如迦鄰提衣。其花香妙。聞者歡喜。

摩耶夫人。安庠漸次。至彼樹下。是時彼樹。以於菩薩威德

力故。枝自然曲。桑頓低垂。摩耶夫人。印舉右手。猶如空

中出妙色虹。

花鳥たがね

—

砧打つや、孫六屋敷、志津屋敷、美濃路にかゝり
て、と前書した、それは昔の刀鍛冶、これは伊勢な
る打金匠。

御縁頭目貫など、武家の注文引きも切らず。門に
鳥毛をたてさせて、一頃きこえた細工の上手。白銀
師兼長、と軒に草書の金看板、名は古市に榮えたが、
今の時世のかはりやう、宇治橋の袂で賣る、小兒衆
の土産にする、弓も劍もなくなつて、鐵砲に彫る蝶
もなく、喇叭に飾る牡丹もなければ、毛彫、深彫、
象嵌、魚子、花の朧の石目の數より、手練の鑿は多
けれど、刃先に霜の冴ゆるのみ。兎の毛の尖の露を
認る、老の瞳は曇らぬが、顰がちの眉白き兼長は年
紀五十一。

七十路ばかりの母者人と、二十になる總領と、間
置いて、十三の、法性寺のいがぐり入道、今の腕白

太政大臣、次郎助と名も稻荷のやうな、初午の午の
年、ひん／＼飛んだ悪戯小僧と、三人口を一たがね、
細工盤の根太ゆがめば脂柱 太しく立てゝも、眞鍮
の迷子札、いたづらな小判では、支へかねたる氣の
おとろへ、あはれ鐵槌の腕は鳴つても、中りやんし
た、媚かしい楊弓程は世に聞えず、鞆の煤に燻ぶつ
た、店の格子の薄暗い、霜月の二十五日、日暮前の
事である。表は内宮に一筋道、旅帽子の鷗が浮いて、
赤毛布も、もみぢの錦、一年三百六十日、流るゝ水
かと絶間のない、名所の川とあやまたれて、いつも
諸國のを通。

球ころがしの門店から、折曲つた此の横町。行き
抜けに田圃を見て、遠方の森の中に、中學校の屋根
の夕日、薨に霜は未だ置かぬが、枯枝の中の硝子窓、
烏の翼に隠れつべう、三日月寒き風情あり。仕舞家
續きの片側町、曲つたばかりで静として、遠くから
散つて来た、餘波の落葉ちよろ／＼と、古市の其の
街道へ、黽のやうな顔を出して、賑かさに慌てゝ引
込み、がさ／＼と小戻りして、小溝のふちの薄暗が
りへ、搔縮むだ物寂しさ。

店^{みせ}格^{かう}子^しへ横^{よこ}づけの、椶^けの角^{かく}の細^{さい}工^{いく}盤^{ばん}と、長^{なが}火^ひ鉢^{ばち}で、
縦^{たて}に長^{なが}く、八^{はち}疊^{でぶ}の片^{かた}隅^{すみ}を座^ざに仕^し切^きつたは仕^し事^{ごと}場^ばで、
薄^{うす}汚^{よご}れた蒲^{ふとん}團^{だん}の上^{うへ}に、繼^{つぎ}はぎの膝^{ひざ}か^かけの、こはばつ
たのを疊^{たぐ}んだまゝ、細^{さい}工^{いく}人^{にん}の姿^{すがた}は見^みえぬ。

背後うしろに積つんだ道具だうぐ篋たんす、鐵くろがねの壁かべの如ごとく、城しろの石垣いしがきにも較くらぶべく、犇ひし／＼々と小口こくちの揃そろつた上うへに、御神酒徳おみきどく利りの口くちしろ白しろう、燈明とうみやうの火ひの新あたしく、點ついたばかりの神かみ棚だは、學問がくもんする忤せがれの爲ためにも、父爺おやぢが信心しんじんの天神様てんじんさまなるほど今日けふは二十五日にじふごにち。

然さういへば祭まつりか知らん、火鉢ひばちの板いたに銚子てうしが一本いっぽん、八疊はちでふの中なかほどに皿さら小鉢こばちの體ていが見みえ、丸盆まるぼんが据すゑてあり。鐵瓶てつびんはチンノ、いつて、臺所だいどころにカタコトと立働たちばたらく人氣勢ひとけはひ、店みせには誰たれの姿すがたもなし。

未まだ暮くれ果はてねば燈明とうみやうも四邊あたりを照てらさず、四隅暗よすみくらき折をりからなり、明あかるい所ところを急いそいで來きて、急きふに戸外そとから見る所み爲せか、と猶身なほみを寄よせて透すかして見たみた、美人たをやめの此この姿すがた。街道かいだう通とほる旅人たびびとには、宿やどの名なの藤ふぢとや見えむ、小笠片手をかしかたてに、荷にを振分けふりわけに、笠かさの廂ひさしを仰あをむ向けなどして、出女でんなならばと思おもふやう、此この横町よこちやうを見込みこんでは、立淀たちよどみつゝとつかはと脚絆きやはんの黒くろい夕鳥ゆふからす、相あひの山やまへや急いそぐらし。

格子かうしに軽く手てを當あてゝ、

「をぢさん、」

と呼よびかけたが、白しろやかな指ゆびで又また其その格かうし子を弾はじきながら、

「お留守るすですか。」

すらりと立たち直なほつて、やゝ調てうし子だか高たかに、

「今日こんにちは、今日こんにちは、」

どしん、天井てんじやうを打ぶ抜ちゆくばかり、あわたゞしい物音ものおとして、戸棚とだなの上うへから眞黒まつくろに疊たみへ飛とんだものがある。

「あれ、」
と吃驚びつくり。

知らずや、次郎助じろすけ。

取附とつき正面しやうめんの襖ふすま一いつ間げん、一いつ杯ぱいに、古ふるい晝割かきわりのやうになつて、柱はしらとゝもに動うごかしたことの無い、置戸棚おきとだなの上うへにちよこなんと、達磨だるまを極きめてござつたわ。

父おやぢ爺ぢは留る守すなり、祖おはあ母あさんは臺所だいどころで肴さかなごしらへ、暗くらまざれに、豫かねて在あり所かを狙ねらつて置おく。其その戸棚とだなの物もの蔭かげから、きよろ／＼眼まなこで搜さがし出だした、黄こが金ねくりく造ちうもんを註文

の、主は維新で退轉して、届けさきも分らぬのを、
主人が律義に藏つてある、蠟鞘鮫づかの無銘の一刀。
兵兒帯にぐいと極めて、人なき店を一人天下。足を
ぶらりと引跨いだ、件の棚に乗り上り、床凡にかゝ
つた氣がまへで、八方を睨めながら、肩肱を張つて
構へた折から。

従姉と知つても年紀が違つて、遊び相手にはなら
ない女。這奴？ 化粧のものがざんなれ、本多平八
郎忠勝これにあり、退治してくれう、眼の配り。棚か
ら唐突の大達磨に、舞ひやまぬ埃の中を、構はず目
を圓くして熟と見ながら、まくり手の居合腰、件の
無銘に反を打つて、ふき出しさうな笑を耐へ、苦り
切つた、澁い面、ぢり／＼と詰めて来て、細工盤に
肩擦るばかり、體を伸ばして踏張つた、仰山な身の
構へ。

丸顔の顫をしゃくつて、

「もゝんがあ！」

と一つ怒鳴る。

格子の外で身を躲した此方は半面の笑美しく、

「否ねえ、次郎さん、まあ、」

「や、驚いてら、妖物。」

「あら、誰だつて吃驚するわ。だしぬけに天井から飛下りるんだもの、次郎さんの方が、餘程おばけよ。」

「うゝん、天井ぢやない。山の中に行暮れて、辻堂に居た所だ、僕は武者修行の劍術つかひだ！」

といつて、小さく突立ち、「夜が深々と更けて

来て、風が颯と鳴り出して、谷川の流がざあ／＼。

物凄くなつた所へ、カラコロカラコロ、遠くから登

音だ。そら、來やがつたと待つてると、眞紅な襦袢

をちら／＼と見せやがつて、格子から雪のやうな眞

白な顔を出して、可愛らしい造り聲で、伯父さんも

ないもんだ。やい、兄さんを見に來た癖に、」

と眞向から斬てかかる。

爾時はらりと紅一葉、瞼を竊と格子の蔭に、
伏目ながら瞳を流して、美人は莞爾と、
「知りませんよ、一寸、何處でそんなことを聞いて来たの。」

「誰に、」
とづつと身を寄せて、

「誰に聞いたつて？ 丁と、学校のボオルドに書いてあるんだ。」

「中學校の？」
「うゝむ、僕のさ。兄さんは最う此の秋から、學校へは行きやしない。」
聞く物思ふ間が一寸途切れた。

「何うして、行かないの。」
「だつて卒業しちまつたぢやないか。」
「まあ、」
嬉しさうな面色しつゝ、

「然う。私は些とも知らなかつた。」
と、もの足りなさうな風情である。

次郎助は高慢に、

「知れた事でございます。誰が、卒業證書を持つて、藝妓屋へなんか届けに行くもんか。えゝ、」
と斜めに臂を張る。

女は絶るやうに手を格子の、玉を刻んだ拳の下に前髪を俯向けた。

おくれ毛に風が添ひ、薄ら寒さうに肩を細うして黙つたが、顔を上げて田圃の空、星や迎ふる、目を外らして、

「澤山、そんな、邪険なことを然うお言ひなさいよ。どうせ藝者屋の妖物だから、私は最う歸るわ。」
と袖をあはせて對方を向く。帯の結び目斜つかけに、風に殺がれた柳腰。半纏の胸狭く、寂しさうな後姿。

尾花の中にあらねども、あねめ／＼、歸るなぞと

人を威して、今に尻尾を出さうまでよ、と片頬笑して足許を狙つて居たが、眞個に行きさうな棲はづれ、吾妻下駄が、からりと返る。

次郎助敗北、格子戸で額を叩いて、

「あゝ、不可いよ／＼。歸つちや不可いよ、姉さん。」 とあはれな聲なり。

聞かないふりで曲つて立つ、末黒野の女郎花。

「遊んでおいでな、可い所へ来たんぢやないか。

よう、おい、姉さんてば、」 と勇士が柄にかくる手を、格子の外へ二の腕まで、木登りしさうな引留め方。

引戻されて振向いた、女は、次郎助の其の體を、思はず熟と瞻つたが、鼻筋の通つた眉の長い、清しい目にほろりとして、

「あれ、およしなさいよ、縁起でもない、男だつて、そんな形を、爲るものではありません。

藝者屋だと言はれたつて、ばけものだと言はれた

つて、あの、恚うやつてね、隙を見て抜け出して来たんですもの。歸らなければならぬ時の来るまでは、突出されたつて歸りやしませんわ。」

「占たな。へへ、」

とずり下つて、しかつめらしく頭を掻き、

「だつて、歸らうとするんだもの、腹立ち姉えつちやありやしない。」

「否、向うの森に、お月様が見えたから、吃驚して、私、見たんだよ。どうして急に夜になつたらうと思つてね、まだ、あれ、田圃が薄赤い、夕映ね。」

と向直り、

「厭だ、御覽なさいな、通りの方にはちら／＼燈が点いてよ。まあ、まだ森の學校も、はつきりに見えるのに、今日は夜も晝も一緒かねえ。」

「あんなことを言つて居ら。内にはばかり引込んで居るから分らないんだ。此頃はね、いつでも晝間つから月が出て居ます。當然な事を言つて居ら。」

「恠う、だつて、きら／＼していらつしやるのよ、
見えて、次郎さん。」

「此處からぢや見えやしないや。」

「御覽、見えないでせう。内にはつきり引込んで
おいでだからだわ。」

謂ひ得て嬉しさうに莞爾した。中脊なのが、あと
けない。

玉の臺たまうてな

四

次郎助は負けん氣の、躍起となつて、

「當然だ、當然だ、だつて當然ぢやないか。」

と獨りで疊みかけて忙しくいふのを、聞流して、

わざと落着いたものゝ言ひやう、

「でも、兄さんの許からは見えませうねえ。」

うしろ様に一足すさつて、再び目を遣る棟の夕月。

表は廂に掛けた菜の、青かつしさまも見えず、太
くからびて黄みながら、暗く片時雨する風情。二階
家わびしく古びたる、君が住居は裏の窓。月影も嘸
ぞ文机に、と玉の臺を屋根越に、雲を隔つる心かな。
次郎助笑つて、

「はゝゝい、お月様を見るなんて、兄さんが見た
いんだい、やあい
其處からぢや見えない

や。
」

「内にばつかり居るからでせう、
と胸を据え、笑を含んで打領く。」

此の洒落、腕白には少しも分らず。

「内に居るから見えないのは、そりやお月様よ。
兄さんが見たくば内へ入んなーよう、姉さん。」

「然うもしちや居られないの。伯父さんは、次郎さん、
とあらためて用ありさう。」

「父上？ 父上はね、何處か呼びに来て一寸出かけたよ。直ぐに歸つて来る。歸つて来ると、御馳走があるんだぜ。ぞつとして居ちや待遠くつてならぬいから、僕は飛んだり跳ねたりして、ごまかして居るんです。」

今日はね、二十五日で、天神様のお祭でね、赤の飯が出来てるんだ。

こんな時に姉やが来れば可いつて、祖母さんと、父上が然ういつて居たんだからね、丁ど可いんだ、

お入りよ。」

「だつて恐いんですもの。」

「薄暗いたつて大丈夫だ、妖物なんぞ居るものか、僕が刀をさして居ら、」

と又意氣組む。

「次郎さん、お前さんが恐いんぢやありませんか。切られるもの。」

と言ひかけて、鬢のおくれ毛搔いたるが、却つて覺悟の風情であつた。

次郎助は横へた刀の柄を、下から持つて見て、頭をがツくり。

「嘘だ。ありや演劇ごとだ。切りやしないから遊んでおいでよ、よう。」

而してね、姉さん、

と甘えるやうに傾いて、手首を上げた、袖口を覗いて見て、

「此奴を一ツ縫つておくれな。そら、こんなにし

了しまつた。

と其その見みせ方かたの手柄てがららしさ。犬いぬころ威おどしの鎧よろひの袖そで、草摺くさずりながら綻ほころびたり。

「よう、遣やつとくんな、内證ないしょうでさ。今朝けさね、夜着よぎを被かぶつてる内うちに、祖母おばあさんが縫ぬつて呉くれたばかりなんだから、叱しかられる。なあに、叱しかりやしないけれど、年取としとつてる人ひとに世話せわをやかすなツて、餘處よその人ひとが皆みんな然なさういふからね、不可いけないぢやないか。うむ、だから僕ぼくは困こまつちやふんだ、だから困こまるんだから、姉ねえさん。」

女をんなは瞬またきして打額うちかぶたき、

「あゝ、ぢや、一寸ちよいと其處そこへ行いつて、」

と島田しまだへ觸さはる指ゆびの先さき、鬚まげの根ねの鳥羽うば玉たまなるに、環まきは纏もつれながら、其その媚なまめかしい風俗ふうぞくにも心こころは染そまらぬ太白たいはくの絲いと一條ひとすぢ、針はりに透とほして居あたのである。

なほ片袖かたそでを胸むねにしつゝ、

「綻ほころびぐらみならごまかせませう。」

どたんばたんと駈け出して、あがり上が框まに莞爾に々々、
顔が、然しも默然だんまりで待迎まちむかへる次郎助じろすけに、手てを引張ひっぱられぬ
ばかりにして、女をんなの姿すがたは宵月よひづきと、内うちに外そとに入れいかは
つた。

横町よこぢやう 薄うすき月つきとなる。

「姉ねえさん、暗くらくツても見みえるかい。」
火鉢ひばちの前まへに膝ひざを支ついて、針はりをすかす目めの尖さきへ蜉蝣かげろふ
淡あはき影幽かげかすかに、絲いとの幻まぼろしたより無なさう。うつとりと縁えん
を結むすんで、物ものを思おもへば答こたへなかつたが、しばらく
して、フトした返事へんじ。

「見みえますとも、恚かうして傍そばに居ゐるんだもの。」

五

「でもこんな處ところで仕事しごとをして、近視眼ちかめになると不いけ可ないな。」

と次郎助じろすけおとなびた世辭せじをいふ。

「何なにね、恚いかうやつて居ゐるんなら、姉ねえさんは、盲目めくらに成なつたつてかまひはしないよ。」

「盲目めくらに、」

と驚おどろいた目めつきをして、

「盲目めくらになつてどうするんだな。」

「恚いかうすりや、可いいわ。次郎じろさんに手てを引ひかれて歩あ行くから、」

「僕ぼくは厭いやだぜ、をかしいや。」

「あれさ、そんなに揺ゆつちや不いけ可ないわね、そして突立つくだつてちや工合ぐあひが悪わるい、おすわんなさいなね。」

「はい。」

「手てを其方そつちへ遣やつて、」

「はい、」

「そんな刀かたななんか、いぢらないでさ。」
「はい。」

「ほゝゝ、大層たいそう柔順おとなしいのね。」
と人身いりみに褌つまを袖そでの下した、次郎助じろすけの膝ひざに乗りかゝるやうに、ひつたり寄よつて、つゝと引ひくと、手織ており布子ぬのこは、美人たをやめの手に素袍すはうの片袖かたそで。

「さあ、ちつとして、」

次郎助じろすけは横よこを向むいて、額ひたひで天井てんじやうを睨ねめながら、唐だし突ぬけに、大おほきな聲こゑで、
「右みぎ向けい？ 右みぎ。」

「あら、厭いやよ、驚おどかしちや、」
「だつて、あゝだあ恚かうだつて、一々いち／＼號令がうれいを掛かけるんだもの。」

「こんな時ときでなくツては、また、お前まへさんが、人ひとの言いふ事ことを、はい、はいツてお肯ききぢやないからさ。憎にくらしいからさ。だから、姉ねえさん、いろんな事ことをい

つて遣るの。あれ、動いちや悪いといふのに、針が
はずむわねえ、お前さん。」

「それだつて、それだつて、姉さんが膝を入れる
から、僕は、僕あ何だか、白粉の上へ乗つかつてる
やうで、他愛がなくて、ふら／＼するんだ。」

「あら、可哀相なことばつかし、其んなに塗つち
や居ませんよ。」

「でも芬々匂ふよ。」

「お妖くさいでせう。えゝ？」

「最う可いよ、あれは演劇ごとだと言ふのに、演
劇ごとの時は、兄さんをつかまへて、親の髻ツて、
斬り附けら、」

「一寸、糸が引張るわ。」

此處へ、十能に燠を装つて、臺所から祖母さん。

結ぶは煩き老の髪も、男の兒では埒あかぬ、世帯

むきの使ひはざま、御隠居じみて外聞なと、切らずに霜を翁草の、腰は伸びても脊が縮むで、次郎助よりは高からず。

低い處をちら／＼と板の間の暗きに影あり。パチ／＼と火花が飛んだが、鐵を溶かした鞆の炎の餘波に似ず、八杯どうふの鍋の下、火氣は自然に違ふのである。

次郎助見るより、

「祖母さん、扇屋の、」と呼びかける。持つて

た奴の袖を曳いて、

「黙つて、」

と遊ぶ氣で、女は忍ぼうと思つたらしいが、甲斐々々しい襷掛け、前垂に手拭を挟んだ膝を、長火鉢の前に支くと、逸疾く見た目の明さ。こんな時の針仕事は、比の娘より確であらう。

「おほ、襟坊か、ござつたの。」

「はい、祖母さん、しばらくでございました。」

あとを低聲で、

「最^もう些^{ちつ}とよ。」

次^じ郎^ろ助^{すけ}もぢ／＼。

「又^{また}、お前^{まへ}、綻^{ほころ}ぢやの。」

と五^ご徳^{とく}へ十^{じふ}能^{のう}を斜^{はす}つかひ、一^{いち}團^{だん}の紅^{くれな}崩^{なめく}るゝ、其^その

あかりは借^からないでも、天^{てん}神^{じん}様^{さま}の燈^{とう}明^{みやう}で祖^お母^ばさん

丁^{ちやん}と見^み通^{とほし}。

「でもね、祖^お母^ばさん、こりや何^{なん}ですよ、其^そのあれ

なんですよ。」

と目^めを圓^{まる}くして、言^い譯^{ひわけ}らしい。

六

「何なんですはも、あれですよもあるものか。お前まへ、どつちにしる、いたづらから起おこるのぢやよ。喃なう、襟えい

坊ぼう。」

「ですがね、祖母おばあさん、今度こんどのは内證ないじようの綻ほころびですとさ。」

執成とりなすやうに聞きえたけれども、だけれども笑わらつて居あるから、頼母たのもしくはなかつたので、次郎助じろすけはくすぐつたい顔かほ。

「おいの、また綻ほころびに表おもてむき大おほぴらと言いふがあるものか。偶たまに遊あそびに來きた姉ねえさんに直すぐ然さうやつて世話せわを焼やかすわ。襟坊えいぼう難ありがた有たうよ。よくござつたの、眞個ほんとによく出でられたよ。何かなにい、今日けふは遊あそびかい。」

「否いへ、一寸間ちよいとまを見て抜ぬけ出しただんです。伯父おぢさんに、いつかの、あの簪かんざしのね、催促さいそくをしようと思おもつて。あれ、お待まちちなさいよ、まだ絲いとどめをしないんだわねえ。」

次郎助は些とも疾く祖母さんを遁げようと、氣疾に振り切らうとした袂を、絲で曳かれて、又ぐんにやり、頭をふつて投首也。

「見さつしやい、まるで操りの木偶人ぢや。而して何ぢや、大胡坐をかいて、内懐から手を突出した風わいの、憎體な、折助が酔つたやうぢや。世話はないぞ、それで何か、小遣を／＼といふ處は、頓と猿芝居の強請ぢやがの。」

「祖母さん、」

と次郎助は冴えた高聲、

「祖母さん、矢敬ですが、はい、折助は刀をさし

ませんでございませす、でございませす。」

「呀、主、刀を持出したか。」

「了つた、どツこい。」

と大敗亡、柄を片袖で大いに間誤つく。

「ほゝゝ、次郎さん、藪蛇ねえ。」

「まあ、」

と祖母さんは坐り直つて、

「あんなに藏つて置いたのを、お前、何處から捜し出したぞ。眞個に／＼油斷も隙もなりはせん。」

聞いておくれ、襟坊や。

兄さんどのも兄さんどのよ。あれ見やれ、あんなに指を結へて居るわ。このあひだ二階での、劍術とやら、先日とやら言うて、お前二人で、鞘と、拔身での、チャン／＼遣り合つたと思はつしやい。兄さんどのが白刃の方でよ、此奴が鞘を持つたとかで、危いではないか、はずみで指を切つたその、餘程深いよ。」

「危いはねえ、まあ、そして兄さんが白刃を持つたの。」

「うむ、弱蟲だからね、刃の方なんだ。僕は鞘のあしらひよ、だから、だから、怪我をしたつて名譽の負傷だ、軍人だせ。」

「然うよ、またお前が刃の方を持つた日にや、兄さんは何處を斬られたか知れはしない。無面目にふ

りまはずぢやもの。軍人や侍なら、いざといふ時のほか、滅多に抜く筈のものではないに、齒抜醫師のやうに素破抜くぢやよ。」

斜めに絲を含んだ時、口紅の色、夕間暮、白齒幽な音がした。

「お待遠さま。堪忍なさいよ、姉さんがへたで手がのろいものだから、すつかり首の座になほらせたね。アイ、もう可くつてよ。」

「占めた、」

「これ？ 蜻蛉のやうに、すつ飛んで行くではない、大目玉め。丁と姉さんにお禮をいふ

のぢや、」

と袂を取つて引く端に、針の運びに目を辿らせ、「感心に出来る喃。羽子と手毬ばかり上手ぢや、と主がおふくろも心配してござつたに、あゝいふ中に居て、よく仕事を覺えたよ。おほこれならば、堅氣になつても不自由な事はないぞ。」

「飛んだことをおつしやいよ？ 祖母さん、極が
悪いんですわ。」

「なんの／＼、確なものよ。立派にお嫁に行かれ
るわ。」

次郎助は、けろりとして、

「へい？ 姉さんは餘處へ行くの、」

「何故さ、お前、」

「だつて、内へお嫁に来るんぢやないの。」

「知りませんよ。」

と身じろぎに、羽織の裏のねずみ鳴。

「父上、お歸り。」

と井の子がすりの色の褪せた、黒の久留米の書生羽織、茶の毛絲の紐を爪さぐりながら、手を支くてもなく、腕組をするでもなく、どつちつかずに呼びかけて、御馳走の膳の前に、手織の布子勝色裏。ずぼん下の割膝で、あやふやに畏った。母親肖で眉目俊秀、細面なる青年は總領の兼次である。

田原（作品の銘は依に造る。）平兵衛兼長。

無言で力無げに入つて、長火鉢と鞆の隔ての障子の、狭い間を入つて、細工場に背後向き、出がけに老母に剃つて貰つた、そり立ての髯のあと寒げに、痩せたる頬と、頭の霜を、神棚の宵の燈に照されながら、伸上つて燈心を搔立てると、其まゝ跪いて、紋羽の襟巻をかなぐり取つた。

老母は、火鉢の前に待ちうけて、直ぐに備前焼の

一 銚子、鐵瓶の底へ軽くコトンと當る。

兼長は拜み果てると、向直つて、座に、これだけは新しい、紙の笠眞白に、洋燈の凄じく化粧した、ふさはしからず初々しい光の下に、人待顔な皿小鉢を、火鉢越に一目見ると、仔細は知らず深い溜息。

久しぶりの外出なり、四五日以来かぜ氣とて、葛籠の底から襟巻を捜し出して、かけて遣つた程であるから、

「お前、寒かつたらうの、」

と老母は、主人の顔の色の悪いのを、陽氣のせめと怪まなかつた。

兼次も膝頭で擦り寄つて、

「大分手間が取れたんですね、」

「何か仕事の事ぢやつたか。」

と右左、火鉢を中の三ツ鼎、おのづと燈火に背いたの、も、何となく陰氣であつた。

「おう、何の、」

と俯向うつむいて、伏目ふしめになつたが、やがてみひらニき、温厚をんこう
柔和にゅうわの面相めんさうに、唯此たゞこの冴さえの尋常たゞならぬ、清き瞳ひとみを遠とほ
くに放はなつて家中うちうちニしつゝ、

「奴やつこは？ 阿母おつかさん。」

と父上おとうさん、五十ごじふを越こしても忤せがれである。

「おいの、次郎じろどのは、今いましがた、何なによ、それ、

あの、扇屋あふぎやの襟坊えいぼうが來きての、久振ひさしがりで、

「襟坊えいぼうが、」

また向むかうを見遣みやつて、

「よう見みえたが、最もう歸かへりましたかい。」

「急いそいで今いましがた歸かへつたよ。」

兼次かねつぐが傍かたはらから、

「父上おとうさんに逢あひたいつて、然さういつて、もうお歸かへり

たらうと待まつて居ゐましたがね。」

「お前まへ、引留ひきとめて遣やれば可いい。」

と殘惜のこりしさうに顔かほを見みられて、兼次かねつぐはフト差俯向さしうつむ
く。

「あの娘こもしばらくの事ことではあり、遊あそんで行ゆきた

い事は山々ぢやあつたらうけれど、主人持ぢや。随意になる身體でない、と其處を能う合點してなう、思ひ切つたやうぢやつた。

いぢらしいにはいぢらしいけれど、あれでまた舊のやうに、主人の内へ歸るのは厭ぢやなぞと、駄々を捏ねられて見さつしやい。だましたり、すかしたり、おんぶをして連れて行かうといふ、これの、

と袖口の老の指、ものゝ影で兼次を指して、

「母様もなくなつたし、どうで泣かねばならぬ處。

年齢は藥ぢや。最う二十にもなつたせゐか、おとなしい佳い娘になつての。感心な事には、お前、針仕事を覺えたぞ。

聞かつしやれ、次郎どのがの、又いたづらの綻を、私に遠慮をして、いゝ處でつかまへて襟坊に縫つて貰うたわ、何處で、どう苦勞をしたか、針の運びも確なものよ。」

「いや、舊から氣立てのいゝ優しい娘ぢや、何は

なうても、今日けふの祭まつり、
と言いひかけて兼かね長ながは、
又またしても澄すまぬ顔かほ。

「否、父上、」

と兼次は力ある聲で、

「祖母さんが、赤飯を御馳走してお遣りでした。」

「何の、お前が歸つてから、と遠慮をしてござつたけれど、些と歸るには間がありさうなり、あの娘も然うして居られぬで、其處らのものを取り分けての。」

一人では厭ぢや、と言ふし、兄やは又、父上と一緒、といふのぢやで、次郎公は丁ど願つたり叶つたりのお相伴ぢや。二人がお取膳で赤飯をの。あんな場所に居るぢやもの、はんぺんのお汁に鮎の煮つけ、何の口には合ふまいに、快う甘がつて食べてくれたは、優しいではないか。

お前は、それでも歸らしやらぬ。

食べ立ちぢやけれど、というての。それでも、さ

あとなるとまた煙草を呑んで、やう／＼今の先歸ら
しやつたよ。次郎公はの、一緒にお肴を突つきなが
ら、何かひそ／＼いうてござつた。手帳とやら何と
やら學校のおもちやをねだつたと見えて、襟坊が歸
るのに連立つて出て行つた。比の頃出来た勸工場へ
引張つたものと見えるよ。」

「氣の毒な、小遣も無からうに、」

「父上、些と何でも景氣がいゝと見えましてね、
僕に、本でもお買ひなさいなんて謂ひますからね。
馬鹿をいひたまへ、襟ちゃんに買つて貰つて讀むや
うな本が何になるものか。五行本の淨瑠璃なんぞ、
勉強はしないんだ、とからかつて遣りました。口惜
がつて居りましたつけ。工面がいゝと見えるんです、
生意氣ですね。」
と火鉢に手をかけ、やゝ兩の肩を張つて壯也。

「何、工面がよくつて、生意氣といふ事があるか。
しらふで居て、お前、己が酔つぱらつたやうなこと
をいふ、」

と父上は澁面して、

「いや、しかし次郎助を對手ぐらゐな巾着ぢやる。兼の小遣ぢや、おれだつて時々悩むぞ。」

「それでもお前、餘程お小遣が出来たと見えての、いつかの簪も黄金をもつと發奮むとの。」

今日も、寶は其の用で、内を駈出して来たとの事ぢやが、先に胡蝶を透ぼりに、と言つて逃へた銀の平打ぢや、彼をの。」

「阿母、」

と思ひがけず、平兵衛、調子が迫り、

「當分もう仕事はしません、」と投げるやうに言つた。が、先刻から煙草をつめたまゝ、吸ひつける事もしないで、五徳の上に焙つて居た、煙管持つ手が震へたのである。

老母は差當り、然まで深い事とも認めず、

「何か、今日のこと、いそぎの仕事でも頼まれさしつたかの。」

「仕事を頼む、頼まれる段ぢやらうか、阿母、早
や何とも話になるのではござりませぬが。」

と口へ出すと一齊に、平兵衛は其のふさ／＼とあ
る眉を擡めて、一際激しく戦いたと思ふと、顔の色
が颯と變る。

「父上、」

「お主は、」

「阿母、貴母にも面目ない、何とも申譯がござり
ませぬ。」

と口惜しさうな拳に、緊乎握りつめた煙管を其
まゝ、兩の手を膝にかためて、眼を閉ぢ、吐息と
もに額に深き皺をぞ刻める。

さては慰むるに言もあるまい？ 一方ならず、と
様子を見たが、そこは老功、むざと騒がす。銚子を
あげて、勿體ない、老の手で爛を見たが、つきすぎ
るばかり間があつたに、果敢なくぬるいは氣の所
爲か。

「言も迫らず、聲も靜に、」

「お爛かんがよいぞ。主ぬし、まあ一つ参まゐれ、よ、寒さむから
う。」

兼次かねつぐは尋常たゞならぬ父ちちの状さまに、齊ひとしく手てさきをふる
はしながら、そと打守うちまもる祖母そぼの顔かほ。杖つゑになるべき若わか
竹たけが、却かへつて絶すがつた老おいの膝ひざ。

「兼、お前にも、さあ杯、」

「まあ一つお飲み、杯だけの。父上が、あゝ言ふのぢやから、」

と祖母さんは此の場合、目くぼせに心得させたは、兼次が親子の間に輕薄なく、正直に利かぬ左を引込めて居たからだつた。

「はい、頂戴をいたします。」

「さあ、兄や、酌をしよう、」

と脊屈みに銚子を向うへ、左に平兵衛を見返つて、

「お爛は何うぢやの。」

「結構にござります。貴母もまづ、一つあがつて頂きたい。兼や、お酌をして上げい。」

いや、阿母には元より早や、何とも申譯はござりませぬ。兼、お前も恚うやつて、せつかく快う己と一緒に晩飯を食べるといって樂しみにしてござつたに、歸り勿々厭な顔をして氣の毒ぢや。阿母どうぞ堪忍してお呉なせえ。兼、お前も辛抱せいよ。」

と生命から二番の酒さへ、猪口を、わなゝきの未だ留まぬ、唇につけたばかり。平兵衛腕を扼れば、思はず目と目を見合はせて、祖母は堪へずしばたゝき、兼次は最う涙ぐむで、

「
「

兎角ういふべき言もなし。時に神棚の燈明に、ぢり／＼と油が煮えた。

しばらくして、平兵衛は力なげに猪口を取つたが、
「年に一度の、他ならぬ今日の祭ぢや。堪へよう／＼、と思つたなれども、如何にも我慢が仕きれんで、
「
といふ聲もかするゝまで也。然ればこそ、湯歸りにも町の角の例の咳、底力なく聞き取られたのを、寒さに呼吸がはずむと思つた。

「兼長や、」

老母はあらためて、

「何か知らぬがの、膝とも談合と言ふは、他人でない、こゝに居る孫と親に、わけを話して聞かさつしやいよ。朋友は楽しみを倍にして、悲しい事は半分にするものぢや、と兄やもいはつしやる。親子同志ぢや、楽しみは等分にして悲しい事も少しづつ分けようよ。」

としんみりと言ひければ、兼次も引込まれて、

「父上、」

とばかりであつた。が、たとひ一緒に死ぬことも、身體で聞かうと身を据ゑる。

雲を掻分けようとする如く、鬱し沈んで顔を上げて、

「いやはや、何とも沙汰の限。」

――

阿母、先刻、あゝやつて、妙見町の――津田屋――から仕事の事で用がある。

親仁、内なら、すぐに一寸来るやうに、と使の男が見えたでござります。」

「然ればよ。」

「近頃は、簪の脚が折れたの、雁首がひしやげたの、と羅宇屋煙管、焼繼屋の名代見るやうな仕事ばかり。形のあるものと言つても、虎に似た猫もなしぢや。然うかというて、地金を此方から持出して、手間隙をかけて見た處で、大道店へ莫蔭を擴げて、一錢がお土産、と通りがりの女房に賣りつけられる品ではなし、じめ／＼雨なり、

陰氣なり、口についた謠も出で、氣を腐らして居た處。今朝から、からりと張れ上つて、北向きの格子にも、未刻頃から日が當つて、神棚に鳥の影。正直の頭に宿る、天神様の二十五日、

住い辻占でもあらうかと、白銀師が燻つた鍛冶屋のやうな顔を出して、久しぶりで仕事場から、きよとんと戸外を覗く處へ、尻からげの若いもの、紺の股引雪駄穿で、手拭を掴んだのが、ぞめきの體に格子の外。

其の、親仁内か、津田屋から來たでやす、一寸來て貰はうの、切口上を聞いた時。

十

言葉づかひの横柄で、癩なにも氣にも留まらず。
 (はい、はい、はい、) と続けざま、つひぞ追
 従した覺えのないのが、嬉しさうな笑顔をした。

津田屋といへば、伊勢切つて、ぶらりと下つた昔
 の藤屋、鼓の音もポンと鳴つて、今に聞えた油屋と、
 一二を争ふ老舗の旅籠屋。先の主人金藏は、町内に
 も組合にも、頭の壓へ手がなかつたので、無理は言
 はぬが我まゝもの。がみ／＼と仕事をせつゝき、氣
 短ではあつたけれども、懐中のづつしり廣い、小男
 ながら大腹中。

兼長が大の鼻屑で、先祖の佛事、當座の祝儀、五
 節句のより／＼ごとに、桃の象嵌、鍾馗の高彫、黄
 菊白菊金銀細工、証文しては拵へさせた。杯の數ば
 かりも、雑と積つて六十一、本卦がへりの祝として、
 禿天窓を軍配でびたりとあての、いや恐れ入つたと

いふ體の、布袋の根つけを拵へよう、と串戲のやうに誂へたが、黒棧留の兩つ提に金々具の時鳥、ちらりと裏座の宵月に、生肌鮪のぶつ切りで浮世を酒にした擧句、銀鎖の玉の緒ふつゝり、手枕の大往生。

長年の大旦那、扶持に離れて落膽したが、せめてもの恩がへし。三日寐ないで通夜をして、陽氣が好きな佛様お口には合ひますまいが、と（福神）と銘のある角樽一提。布袋の根つけの名に因んだ貧しい中の一燈も、一金百圓也、五十圓、三十圓と、佛が地藏堂の勸化するやう、親類縁者おつきあひが、鼻つき合はせた香典の包の中には光らぬばかりか。

近頃はやる神葬に、白丁烏帽子に取巻かせて、擔ぎ上げる御輿に、樽の縁はうれしいが、己をば乃多満玖命にする、と佛が苦い顔をせう。絹帽子を新調して、燕尾服で喪主に立つた、若主人の氣象では、此の香典は氣に入らない。

飾屋さん、こりやお門が違つたらう、内は婚禮ではないのである、と選舉權を持つたがやまひの、演

説口調で刎ねつけて、直ぐに臺所へおろされたので、
心盡しも水の泡。平兵衛冷汗を流して居た、まらず、
満座の中をきよと／＼と、嘉平治平のまちなし袴、
見すばらしげに戻つたが、若旦那は若旦那、大旦那
は大旦那。

飼犬のあとへなりと、見送りを爲いでならうか。
催促にござるたびに、兼坊々々とおつしやつた、
汝も御恩を忘れるな、と高等科に居た時分の兼次従
へて、空車の行くあとから、肩身狭げに野邊のとも。

俵の昨日の羽織を見たか。青奉書の皺だらけ、頬
べたほどの三つ紋つき、舊弊親仁の古であらう、恰
も凍どけの天水桶よ。親類でなし、懇意でなし、名
札をつけた名代ぐるま、道ふさげの見得のあとへ、
親兒で繫つて何の状だ。それまでにしても配りもの、
饅頭が欲しいのなら、そら唾をかけた食麵鮑を喰ひ
をれ。今日の辨當をあけて見せる、蒸返した赤飯だ
らうと學校で囃されて、泣いて戻つた仔細を聞いて、
木綿もの、石餅でも、當世のを縫はうもの、老の手
の行届かず、母のない兒は不便ぞ、と祖母が、脊を

掻い撫づれば、父の兒なれば耐へよとて、平兵衛は
手を取つた。

由來、津田屋は鬼門に當つて、平兵衛が言には、
何一つ背かない、柔順な兼次が、年に一度の新年の
御慶の代理、彼處だけはと拒むのを、いふことを肯
かぬか、と遣つゝ返しつ此の家に、必ず年々波の
たつのも、あはれ浮世のさがならずや。

其の津田屋から一寸來い？

良い相談で

ないことは、はじめから知れて居たに、不念なりし

手兵衛。兼長は口惜しさうに、

「貧すれば鈍になるわい。」

親子喧嘩をしてまでも寒暑の禮は缺かさず續けた、眞心が顯はれたか。先代没して約五年、今日の使は六年ぶり、長しといへども鶴の脚、蠟燭立ての繕ひせい、とばかりではよもあるまい。些とは纏つた注文ならむ。赤飯を炊いたも前祝で、是おのづからの吉兆と、祭の贄を懷中で勘定した段勿體なし。さもしい心も不工面から。

出ぎらひで不性なのが、氣軽く兎の手の刷毛で、膝かけの鑿屑を拂つて立つたが、久しぶりの事といひ、先は客寄せの縁起商賣。むさくろしく髯が伸びて病人らしい、と遠慮して銅盥にぬるま湯、毛うけに箒の扇形、老母が器用から、間に合せの下剃したのを、不思議さうな次郎助に、父上は嫁取ぢやと、祖母さんが戯るれば、お土産、といふのを連れて歸つて母親にして遣らう、といそ／＼家を出たのであつたに――

「阿母、ひつくりかへつた大違ひ。あたまからあ

の店さきが、女郎屋と區役所ほどに變つて居ります。

大旦那が亡くならつしやる、三年前に、半纏着ぢやが品の可い、質寶でも何時も若かつた、御新姐さんが死なれたあとは、いつも帳場に坐つてござつた、あの、無口で、深切な、己なんぞは知己のやうな、知己でないやうで居ながら、時々何處からともなしにフイと出ては、何か心づけをしてお呉んなさつた、番頭の小平さん、第一あの人の姿が見えんで。土間から見つけの、廣い板の間の取つきに、チヤン塗で硝子窓のものが出来て、あれが、帳場なのでございませう。とんと郵便局の受つけと言ふもので。陽氣によつちや比の町から野末に見える、學校の片端のやうでござります。はて、入相の頃なり、こりや、魅まれて、廣見の田圃へ出はしまいか、とうろつく次第、

人通りの中を兩三度、咳さへ遠慮して口許へ手をあてながら、津田屋の前を行つたり來たり。枝ぶ

りは違つたけれども、店前に覚えのある、松の樹が見えたので、氣兼ねしう土間へ入ると、廊下を傳はつて、どたん／＼、鬢髻をあべこべに、前髪を五寸ばかり、頤を突出した、眞白に塗つた肥つたのが、（何ですか。）と鬢を掻きながら煩さうな急の調子。突込むやうに謂はれたので、（へい、）と平兵衛行詰つて、口へ手をあて、お辭儀をした。

二三人氣勢のする帳場の硝子戸の中から、（飾屋だ、飾屋だ。）（然う、）と高慢、廂髪の女中は、二つばかり、上草履を引張つて、帳場の窓板へ肱をついて、斜めに凭れたまゝで居る。

（奥へ連れて行つて遣れ、旦那が用があるんだ、）
と言つたのは、使に來た若いもの。

最う一人、手巾を首へ巻いたのが、きちんと分けた頭を出して、

(飾屋、あがれ、) といった。

「然うよ、飾屋に違ひはない、」

と平兵衛はぐいと呑んで、

「それからな、兼、其の女中に連れられて、何となく足場の違つた、廊下をとぼ／＼と行く奴ぢや。

途中で、二三人も女衆に行逢つたが、いや、變れば變る 見覚えのあるのは一人もない、

阿母、あの、娘さんの乳母どのも、何うしたでござりませう。」

「あの人も見えなんだか。」

「見懸けませんとも。其處で奥へ行つて、――高作さんに、」

「若旦那ぢやの。そして其の用といふのは、」
と案じ切つた祖母さんは待兼ねて聞くのであつた。

「父上、どんなゝんです。」

「話すも口惜しい！ 若旦那の傍に、庄九郎の奴
が居たのよ。阿母、庄九郎が居りましたわ。兼、も
ひとつ呑め。肴せう、」

と目を眠つて、

「 兎にも角にも宗近が、兎にも角にも
宗近が、進退こゝに極りて、御劍の刃の亂るゝ心、

と自慢の小鍛冶を謠ひさして、はら／＼と落涙し
た。

扇屋、ひな唄

十二

國は宵月、廓は灯。紅にも紛ふ蠟の灯の、白粉籠
る霧の軒。廻縁なる障子に透きて、ぞめきの袖にこ
ぼるゝ状、花の堤の花あかりに人のみ暮るゝ眺かな。

二見が浦に沈む日を、ちよいと招いて扇屋は、此
の古市の花の宿。小袖幕の七重八重、櫻明き
銀屏風に、あだ光する四十面の、庄九郎は上機嫌。

「若旦那、庄九郎はこれ、こんなに頂いたからと
いうて、頂いたからというて、酔つていふのぢやご
わへんせ。若旦那、酔つていふのぢやごわへんが、
若旦那可うごすか、酔つていふのぢやごわせんえ、
若旦那、」

「庄、何をいふの知らないが、おい、其の若旦那
那々々／＼は措いて貰はう、厭に小僧じみる。苟も
國家のため、」

と胸を反らして脊高い男の、大きな手巾で口のあたりを蔽うたが、横顔の痣は隠れず、掌でおしたやうなのが左の頬に著しい、高作は、一座に侍る年増の藝妓に、

「なあ、おゝ然うぢやないか、小僧のやうに聞えるぢやないか。」

婦は松吉といふのである。

「然うですね、何も若旦那といったつて、小僧の様に聞えるつてこともありませんが、貴下にはそくはない様ですのね。」

「姉さん、閣下がいゝぢやありませんか。一寸、いろ／＼、縣のため、市のため、人のため、
と丸顔で目のぱつちりした若代といふのが口を入ると、松吉が引取つて、

「藝妓のためにもかい、」

「あら、多謝だわねえ。」

「呉服屋は居やしないよ、」
と姉さん、はぐらかして笑ひながら、

「閣下ぢや、また行過ぎたやうでをかしい。第一お前、かくか、お一つといつて御覽な、お茶漬を食べるやうだ、かくやのお香のものでさ。」

「馬鹿にするな、」

高作は高い鼻に、瞳を寄せて睨む眞似。

「あら、御免なさいよ、ほゝ、ほゝ、だつて、をかしいんですもの。」
と自若として居る。

泰悠に座を構へて、膝に丁と手をついて、唯莞爾として居た、女中のお時といふのが、此に於て、口を入れる。

「姉さん、先生が然るべきではありませんか。御様子といひ、御人品といひ、何うも何時お見上げ申しても津田さんの若旦那のやうぢやなくつて、津田先生といひたいんですものね、それが可うございませよ。」

庄九郎、横手を拍ち、

「豪い、さすがは扇屋のお時で分かる、お見立

て寸分隙なしぢや。――

「はい、先生。」

と姉さんが透さず切込むで杯を獻す、と高作鷹揚に引受けて、若いのゝ酌でぐいと呷つてお時にさす。

「先生、頂戴。」

とお時が、威勢よく掌をかへしてひよいと出せば、

「先生もをかしいが、」

なぞと高作は例の手巾。

「先生、先生の方はそれで可うごすか、若旦那

ぢやない先生、貴下其の私の事を、庄々つ

てお呼びなされるのは、些と厳しいぢやごわへんか、

ねえ、もし先生。」

「なぜさ。」

「だつて、先生、」

と妙な顔する。

「成程ねえ。」

と姐ねえさんは語呂ごろを知しつて片類かたほ笑ゑむ。横顔よこがほを覗のぞきな
がら若代わかよが、

「どうして、姐ねえさん。」

「一寸ちよいと、」

と雛妓おしやくまであなぐりかける。

松吉まつきちは氣きの毒どくさうに、

「分わからなきや煤拂すすはきまでお待ちまなね、ねえ、お時ときど

ん、

と顧かへりみて、おほゝほゝ、お時ときどんは嬌然えんぜんたる而の已み。

「何だ／＼、何がをかしいか。」

と高作も解しかねる。

「何だ／＼とネー　でせう、さあ、お遣

んなさいよ。」と松吉は三味を取つて、轉軫に襦

袷の袖口、すつと扱いてチンと當てる。

「厭に庇ふな、怪しいぜ。」

と高作は右左、じろ／＼と見較べて、

「それから先へ白状しろい。」

「あら、先生、庄さんと松吉姐さんは、今はじま

つたんぢやありませんわ。」

松吉は落着き濟まして、

「ねえ、貴下、京都以來だわねえ、」

と心得たやうに悪く莞爾つく。

庄九郎苦い顔して、

「厭にいふわ、畜生めらが、何も更つて聞きたがることもなし、異う又庇ひだてをして隠して呉れる

に當らんぢやに、なほ悪いわい。

これ、若旦那、何、先生。

貴下が庄、庄ッておつしやるのが、京都方で肥料
買はう 聞えると言ふのでござすよ。それ、

シヨ一な。」

「何だ、其の事か、如何にもシヨ一ぢや。」

と情ないことをいつて、言ひ得て、呵々と笑ひ出
せば、哄と一度に笑ふ中に、雛妓の聲の冴えたのが、
戸外の霜に響いて聞えた。

庄九郎四邊を睨め、紺の細出な前垂の下へ突
き、にらした手を、股へ取つて、

「此奴等！ いや、先生、酔つていふのぢやごわ
へんぜ。」

「可いよ、分つたよ、以来色男といはうよな
あ、お前も恚ういつて遣れ。」

此時高作、其の傍に引つけ置く、顔を背向けた別

ひとり美人を顧みだが、黙つて何にもいはなかつた。

其の素振に、高作は、頤が暗くなつて、

「どうした。」

若代が心得、紅の裳を揺つて、ふくらかな膝づつと出で、

「貴下や、其の姐さんに、庄さんを色男といへとおつしやるのは御無理ぢやありませんか。姐さんの色男は、他にあるんですものね、一寸。」

と目を運ぶ。時に松吉が三味を斜めに、澄まし切つた容體は、野暮なと投げたやうに見えたので、高作は氣がさしたか、

「何、他にある、誰かい、はゝは、」

とつけたらしい高笑ひをキツカケに、ぐつと砕けて上げ胡坐、其の足袋の新しさ、表も裏も眞白であつた。

「一つ 承りたいもんだね。」

「承りました、」

テントンシャン ー

唄うたの上うへり下くだりのおつゞら馬うまよ、さても見みごとな手たう
網な染ぞめかいな、チリンチ、テーンテ、トツツンテンレ
ン、トツンテン、馬ま士ご衆しゆの癖くせか高たか聲こゑで、鈴すずを便たより
に小こ室むろ節ぶし、

と藪やぶから棒ぼう、色いろ男をとこを詮せん議ぎといふに、座ざ敷しきへ馬うまを曳ひ
き出だした、唄うたまでもはぐらかされ、畠はたけ山やま 庄しやう司じ、岩いは
永なが左さ衛ゑ門もん、相あひ並ならんで、愕がく然ぜんたり。若わか代よもお時ときも顔かほを
見みると、松まつ吉きちは愈いよ々く澄すまして、

吉よし田だ通とほれば二にかい階かいから招まねく、然しかも鹿かの子この振ふり袖そでで。

と音ね々じめころ／＼軒のきを渡わたつて、五い十す鈴る川がはの流ながれ遠とほく、
驛えき路ろの鈴すずの響ひびく時とき、うろ／＼して居あた足あしを留とどめて、
此この扇あふぎ屋やの格か子うしにならんだ、藏くらの前まへの、天てん水すい桶をけを小こ
楯てにして、絣かすりの羽は織ありの腕うで組くみしつゝ、氣きを置あく状さまに、
四あ邊たりを見みながら、打うち仰あふいで、二にかい階かいを望のぞむだものがあ
る。

格子のぞめきは灯に赤く、こゝに一人の月の影、
花やかなると、寂しきと、おなじ墨繪も松、櫻。暗
夜ならばと思ふであらう。

十四

シャン、――松吉が弾き済ますと、若代が、

然も感心な風をして、

「心意氣だわね。」

とあてぞつばう。

あつけに取られて聞いて居た高作は、氣の無さうに、

「何が心意氣なんだ。」

「庄さんと二人で道行の處ぢやありませんかね。」
と、お時がそらさず楔を打つ。

「道行なら道行のやうな合方がある筈ぢやに、相手が馬士で、此方が庄と來た日にや、蜷川とは行きやせん、天王寺の出はづれを、菜種に頬被ぢや、嬉しくない。ねえ、先生、酔つていふのぢやごわへんせ、庄九郎、酔つていふのぢやごわへんが、」

「また、（はとにとをほへとさつさ） だら

う、

と高作は怪しい節なり。

「何よ、貴下、いつでも其の（はとにとをほへとさつさ）つてお囃しなさいますのは、」

若代が傾いて眞面目に聞く。

「これが、こりやお國の節よ。此の色男は恚う見えて越中の産だからな、雀百まで踊を忘れずさ、幾つになつても（ほへとさつさ）だ。」

庄九は姓を小出といつて、越中富山は反魂丹、眞鍮の煙管の産地、高岡のものであつた。

二十歳の時、莊河の洪水とゝもに飛騨越で流れて出て、岐阜、名古屋、四日市から、阿漕をかけた渡りもの。當人の望といひ、世話をするものがあつて、俵の家に弟子となつたが、足かけ五年。仕事は固より、食ふこと、着ること、内證で一合の恩も忘れて、去ぬる年世を去つた兼長が戀女房、兼次、次郎助兄弟には、世に代へて懐しく慕しい亡き母の、千鳥と

いつた美人に、煩惱の犬となつて、這ひまつはつたが肯かれぬうへ、くらやみ坂へ棄てられたが、此奴辨舌爽やかに、うまれつきの追従輕薄、小才の利く處から、宇治橋の際で小錢を賣つて、内懷へ溜め込んだ、母娘二人の寡婦が許へ、勝手口からひよこりと入婿。さても庄九郎の天下になつて、間口四間を總硝子の飾屋の主人となり、鍍金の指環からはぎの煙管、簪、金銀眩く道者の目を射て、神都の美術家、此の鼻に極つたりと、四五人抱へた野郎どもを、弟子職人と言はせはせず、書生がノ、と大見識。持つたが病が色好みと、生れつきの性は失せず、額を叩いて取入つて高作のお取巻、末社にもない、かみなのである。

「先生、胞を洗ふのは酷うごす。高岡には、眞個の洒落に生れたばかり。何、越中ぢやからというて、反魂丹ばかり賣つて歩行きやしませんぜ。恚う見えても江戸長崎や國々で、づつと磨きあげた男さね、」
と松吉をじろりと流眇。氣障たといふ顔色で、取合はず横を向く。一座しらけたりと見てお時が、

「其の何でしたね、（はとにとをほへとさつさ）」

あの、それを一寸何かちよいとなにに附着くつゝけて唄うたつて御覽ごらんなさいな、えゝ、姉ねえさん、

取とりなしぶりに恚かう言いへば。

「厭いやさ、そんな、（はとにと）なんざ、私わたしが遣やれば恚かう離はやすよ。」

「へい、何なんと、」

と故わざと身みを入れて、お時ときが向むき直なほると、松吉まつきちは悠々いうゝとして、

「可いいかい、（かね欲ほしい）さつさ、」

「へい、かねを、」

と言いひかけて、向むうから叩たたく眞ま似ねして、

「馬鹿ばかにしないねえ。」

高作かうさくは耳みみを横よこへ、

「何なんだ、かねとを、かとね、うゝむ、」

發明はつめいをしたらしく、

「金かねを欲ほしいか、こりや可いい、」

松吉まつきちが、

「ねえ、先生せんせい、」

「ど、うだ、圧あつ的てき、圖星ずぼしだらう、はゝはゝ。」

「へ、へ、へ、へ、」

と一つ首を前へ揺つて笑ひ、

「圖星とは怪しからんでえ、何のこつちやい、先

生、庄九郎酔つて言ふのぢやごわへんせ、酔つてい

ふのぢやごわへんが、」

「金子が欲しいか。」

と高作はかさにかゝる。

「どもならん、えゝ、」

と手をついて胸を反らした、庄九郎右の手をぬつ

と出して空を撫で、

「何のこつちや、いや、串戯ではごわせんぜ。先

生、貴下もし何か今度の事を、庄九郎が儲けづくで

も行ると勘ぐつてぢやごわへんかい。豪いこつちや、

途方もない。敵等またが苦しませに、どんなこと

謂はうも知れん、何ぞわきからお聞きなさはしま

せんかい。

えゝ先生、いや、洒落とばかりぢや氣が澄まんで

え、こりや恚ないしては居られん處ぢや。」

と、ひよいと又きちんと坐つて、

「もし、酔^よつて言^いふぢやござわへんぜ。」

十五

「庄九郎、酔つて言ふのぢやごわせんが、純金三百匁、大枚ぢや。敵めが方では業が沸へるものぢやに因つて、もしやまた恚うでもない。庄九郎が鞆に懸ける時に、あいやもし、懷中より眞鍮、銅の鑪粉を通はせて、正金をごまかしの、黄金を着服などと、いやさもし、お立會の衆がおつしやるまいものでもない、いやさ吐かすまいもんでもない。別嬪。」

とずらりと見渡して庄九郎、空笑ひをしたは洒落のつもり。一向に落が來ぬのを、爲有り顔に又から笑ひ。

「あい／＼、然よでも何でもない。其處は庄九郎ぢや、先生、酔つて言ふではごわせんが、そりや、無い。其處はない。はて、遠國に生れても、性は御當地の五十鈴川、澄んだもんぢや。分けて津田屋様のお仕事ぢや、恚やうに御懇意を蒙るぢやに、けちりんも、」

と据ゑ眼に、指二本で、

「爪の垢ほどもごわせんぜ。何ぢや（か）とねと

を欲ほしいさつさ。はて、お前まへ方も措おいて貰もらはう。
外ほかの事こととは違ちがふ、大だい事じのこつちや、面おも白しろうない、庄しや
九郎うくろう、おもしろからぬわい。」

「だから面おも白しろくしようぢやありませんか、」

とお時ときが松吉まつきちに目めくぼせして、

「御ご覧らんなさいな、お話はなしをして居ゐるのは此このお座敷ざしき

ばつかりでございませう。」

「此方こつちも騒さわげ、」

何事なにごとも負まけず嫌きらひの、高作かうさくが思おもふ壺つぼへ嵌はまつたので。

「誰だれがそんなことを思おもふもんか、さあ、おい、

(ほへとさつさ) でも何なんでも遣やれ。」

「へへへ、でもさ、庄々しやうしやうと、越中えつちゆうと、其そのかとねと

は御免ごめんですぢや。」

「矢張やっはり (はとにと) にしませうよ。」

「鳩はとより青鷗あをじの鳥とりがいへ、」

と松吉まつきちは足許あしもとから、

「さあへへ、喜きいちゃん、立たつたへへ、」

「あい、」

と雛妓が、重ねた施をするりと捌く。

「若ちやんも、お立ちノ、」

唐突に警婦を弾く。　チリノ、テツトン、チリ
トントンテン、ツンツンツン、トリツチ、
チヤン、チヤン、こらしよい、チヤンノ。

わしが憎い奴あ青鷗の鳥よエ、私が大事に
した大根の種拾つて食つて、憎い鳥めと棹さし追へ
ばエ、ちやうど向ひの櫻の枝にとまつて、

お時が火鉢をおして、づつとあとへ開いた時、座
敷は野になれ足拍子、二人は色気なしの大踊。

「おい、どうした。」

と傍なる其の無言の美人の、清らかな襟のあたり
を、丁と、叩いて、直ぐに懐へ、込らしたさうな撫
肩を、邪険にかはすと、はずみによるけて支かうと
する中を、藤色の衣の襖、愼ましく膝をずらして、
銚子に白魚の指を掛けた。

廊下の障子を細目にあけて、一人、禿が顔を出し、お時の背中に二言三言、口早に囁くと、でつぶりとした胸で答へて、

「お扇さん、ちよいと、
といった。」

清しい瞳で、賢しく答へて、高作の膝のわきから、結び雁金の紋しをらしく、袖を分つと竊と立つた、衣紋つき、褌はづれ、みどりの黒髪透く櫛も、此の紅の灯の中に、獨り月影さす風情。

避けて座を広く、隔ての襖に薄彩色、素絢の描いた梅の額に、島田の女仙映と見れば、踊子二人がさす手の蔭へ、藤紫の裾消えて、はら／＼とあとを散る梅ヶ香。

酒さけにのぼせた色いろさめて、障子しやうじの外そとに素顔すがほの雪ゆき、廊らう
下寒かさむさうにイみつゝ、

「千代ちよちゃん、何なに、」

と其その禿こゝろに低聲こゝろで聞きく。

優しい聲こわね音ねは

別人べつじんならず、裾すそも引ひいたり脊せも高たかく、容よう子すも二ふたつ三み
つ大人おとなびたるに、質し素みなつくりの紅べになし友禪いうぜん、包つづ
むだ膚はだも違ちがふやう、彼かの平兵衛へいべゑが横町よこちやうの暗くらまぎれの
姿すがたに較くらべて、其姉そのあねとしも見みえるけれども、お扇せんとい
ふは勤つとめの名な、まことは襟坊えいぼうのお襟えりであつた。

禿こゝろは突立つゝたつて、お襟えりの俯向うつむいた鼻筋はなすぢと、荅こたへのやう
な唇くちびるを瞻みつめながら、

「お客様おきやくさまでございます。」

いよ／＼しのび音ねに、

「お客様おきやくさまね？」

「いゝえ、あの、然しかうでないお客様おきやくさまなの。」

「然うでないつて、」

「店のお客様ぢやないんです。あの、あの、姉さんのお客様なの、お部屋へお通し申しましたんです。」

「私のかい。」

と小褌を引上げ、

「どんな方、」

「いゝ人でございますよ、」

と、莞爾したのは手があつたか、ばた／＼と跽音高く、駈けて遁げたは小兒である。

お扇のお襟は、内の客に氣を兼ねたか、竊と障子に身を寄せた。中は明るき紙一重、此方は白き雲の外。

松吉が青鴉の高聲。

（しいちしやつきり／＼、いけづく、瓢箪がりのしなび爺、根性骨の太さよ。

「こら／＼い、」

なぞと庄九郎、高作の笑聲。

袖を合せて鬢軽く、聞き済ましてお扇は莞爾、踊
子の足拍子トン／＼の間を拾つて、する／＼と廊下
を渡つた。

突當り曲り角、仄暗い中に倂白く、立侍つて見返
つた、長襦袢の淺黄櫻、谷を隔て、咲こぼるるを、
此方の二階の段階子、上り口の欄干の横木から、切
禿の、くる／＼とした目を斜に、千代が、からかひ
顔を傾けて、莞爾ついで視めて居る。

月は射通す硝子窓に、霜を包むで冴えた色、時々、
里心のつくといふ廓の時に魔がさして、座敷々々は、
寂然とする。高作の一一座ばかり、

丁ど向うの櫻の樹にとまつて、何を囁るか
と
立寄つて聞けば、

と追註文か、二度目の撥音、チリ／＼テツトンチ
リト／＼ツテン、ツン／＼／＼と響くのを、山の彼

方に聞くよしゝて、お扇は自分の部屋の前。かたへは連子で、片側の壁の此方に、門形の一枚襖。秋草の露の中に、扇の地紙をあしらつたは、萩桔梗の唄に似て、夜ごとにすだく蟲ながら、玉章を忍ばせて待つべき君もないものを。夜半の涙の友とした、蠶斯も今は鳴かぬが、蟲が知らすか、何となく、いそ／＼したのも戀の路、立淀んで廊下の辻占。

お扇は名に因んだ扇子の引手、疊んだ形を熟と視て、我身をじらすも心ゆかし。小袖の紋と同一な、結び雁金をすかし彫の銀の平打の簪を、鬚の根からすなほに取つて、さきをかへして、こと／＼と、引手に竊と音づれながら、

「御免なさいまし。」

と我が部屋へ、含る笑を包むだ袖の、優しく靡い
て見えたのは、轟く胸の餘波であらう。

内には何の返事も無かつた。

扇折あぶきををり

十七

「御免なさいませよ。」

お扇せんはなほ、**二**娜しなやかに小腰こししを屈かめるやうにして、壁かへの方ほうから覗のぞく姿すがたで、

「誰方どなた、」

と言いふと一緒いっしょであつた。向むかうから障子しやうじがすらり。

先方さきも此方こなたも對丈つゐたけに、入口いりぐちに、はつと出合であふと、もの言いはず左右さいうに分わかれた。お扇せんの裳もすそがはら／＼と廊らう下かを捌さばいて退すきる時とき、戛然かつぜんとして冴さえて響ひびいたは、手てにした簪かざを落おとしたのである。

部屋へやの口くちで仕切しきつて見みえる、簞笥たんすの前まへの火鉢ひばちのふちに、あたるでもなく兩手りやうてをかけ、横向よこむきの中腰ちゅうしで、急いそいで此方こなたを見迎みむかへて、

「僕ぼくです、僕ぼくです、」

と言い譯わけらしく口早くちばちにいつたのは、俵たはらの長子ちやうし兼次かねつぐである。

一目見て、お扇は情が切つたので、聲も出ないで、颯と目のふちに色を染めたが、やがて得も言はず、莞爾して、

「まあ、」

夢を見るやうに今度は恍惚。

「僕なんだよ、少しね、」

と兼次は未だ何かいひわけらしい。様子を見れば、唐突に襖をすらしも、驚かして遣らう洒落ではなく、御免なさいましたから誰方まで、聲を三度も聞き定めて、城の門を開けた次第、固くなつた籠城である。

「どうしてね。こんな處へ、」

と三足ばかりを駈け込むばかり。あとをうしろ手にぴたりと閉めたが、背向きに、なほ襖に靠れて、無造作には傍へも行かず、

「まあ、よく入らしてねえ、私、餘まり思ひがけないので、嘘のやうよ。」

其まゝ其處へ、何となく、危つかしさうな坐りやう。

「僕もね、はじめてだから、何だか眞個ぢやないやうだけれど、實はね、少し相談したい事があつて、まあ、此方へおいでよ。」

と火鉢をまはして身をずらした、羽織の袖にひかるゝやうに、小袖の袂を進めたが、さしむかひにはなりもせず、肩を並べた若い同士、打解けながら窮屈さう。

島田の鬢を傾けながら、肩をすなほに胸を引いて、兼次の顔を熟と見た、近優りする美しさ、目許の愛嬌滴るばかり。

「辻占が宜かつたわ、兄さん、」
懐しげに恚う言つたが、あらためて語るに及ばず、二人はもとより兄弟ではないのである。

兼次の母の千鳥といふのは、京都のうまれで、三條あたりの扇折りの娘であつた。兩親は早く失せて、鴨江といふ姉の手に稚い折から育てられた。同じ川邊の水鳥ながら、姉は羽がひも浮いた性、律義に稼ぐ婿のあつたを、阿漕が浦にあらねども、不義の名

所しょにあこがれて、女扇をんなあふぎのせめを切り、店みせのものとい
たづらして、得意とくいさきのあつたを便たよりに、伊勢路いせぢを
さして落おつる時とき、母はのない娘こは恩愛おんあいに、家いへも義理ぎりも分ぶん
別べつなく、野分のわけの風かぜにさそはれて、千鳥ちどりもともに渡わたり
鳥どり。塀ねぐちを定めぬ以前いぜんから、濱荻はまをぎの色いろに出でたのであつ
た。――

されば古市ふるいちの唯とある横町よこぢやう、丁ちやうど俵たはらの鄰家となりやに、不義ふぎ
の夫婦ふうふは假住居かりずまひ。こゝで扇子あふぎを拵こしらへて、表通りおもてどほの町まち
並なみに、小店こみせ一つ借設かりまうけ、千鳥ちどりにそれを商あきなはせると、
小机こつくゑの折帳をりちやうに、金銀きんぎょの箔はくをうつしながら、風かぜをいと
へる花はなの姿すがた、活人形いきにんぎやうの看板かんばんより人目ひとめを引ひくこと大方おほかた
ならず。鹿かの子このきれの結綿ゆひわたには、どんつくの懐中ふところ
をはだけで、美人びじんの手に扇あふぎを開ひらかせ、北風きたかぜのゾツと
身に染しむのも、ひやあ、神風かみかぜ、と難有ありがたがり、木賃きちんど
まりの道者だうしやまで、風邪かぜをひくのも厭いとはぬ繁昌はんじやう。

四五年ねん、市いちが榮さかえる間あひだに、姉あねの鴨江かもえは道みちならぬ子こ
寶から一人設ひとりもうけたのが、今いま、扇屋あうぎやの扇せんである。

お襟えりが恠かる境遇きやうぐでも、其その成行なりゆきは略知ぼくしれよう。

伊勢いせに隠かくれて住すむことは、演劇しはるの棧敷さじきで見みるやうに、
上のぼり下くだりの噂うわさで聞きいても、京きやうの本家ほんけは、おとなしく
目めを眠ねむつて堪かん忍にんしたが、流ながれは清きよし矣い、五い十す
鈴川すずがは。

水が性にあはなんだか、五月雨の半ばから、井戸の濁つたのがはじまりで、其の夏のはやり病に鴨江の不義の夫は失せる。續いて、土用あけまで早いふに、仇花植ゑた土がゆるんで、井戸側が崩れたので、袖の涙の露ばかりも汲むべき水がなくなつたのに、鄰家は幸ひ根を据ゑた岩清水の井戸溢るゝばかり、滾々として玉を砕けば、臺所から手桶を提げて、朝晩出入りをしたのが縁で、昔氣質の平兵衛が、其の年までもやもめで居た。三十歳の暮の事、千鳥は二十で祝言したが、兼次が出来てまでも、裁縫の際ある時は、鐵漿つけた口に地紙を含み、小兒に鶴を折りながら、扇子を疊んで手助けする。平兵衛親子もしんせつに、三度のものを分るくらゐ。質素にくらせば母娘三人何不自由も無いものを、店の招きを奪られたとて、妹の身體で無心する、然る惡黨ではないだけに、利かない性の山氣があつて、白粉つけた婦ども、一人か二人三人まで、千鳥のあとの町店へ旅鳥の囀をかけて、投扇興の催も、吹矢にはやる人心、玉ころがしの急しい當世の人氣にあはず。は

な散る里の點なしで、借金はする、損はする、とゞ
のつまりは妹夫婦の意見に耳を傾けないで、お襟が
九つになつた年、古市の扇屋に口があつて仲居に入
り、一緒にお襟を連込むだのを、無理な工面のかた
に棄てゝ、又しても！ 旅商人と遁たのは、千鳥が
歿する前の年、お襟は時に十二であつた。が、平兵
衛も、女房が世を辭した時分から、仕事も隙に、手
許が薄く、見す／＼泥水に沈むと知つて、姪を助け
る力がなく、それなりけりにお扇となつた。扇屋の
娘分。兼次とは従兄妹なのである。

お扇は親しげに、

「過日は上りまして、御馳走さまでした、祖母さ
んに、種々お手数をかけたわねえ。」

「何、御馳走どころぢやない。何にも無いのに引
留めて、襟さんが却つて迷惑したらうつて言つてだ
つたよ。」

「あんなことばつかり、」

と怨めしさうな目の色して、

「祖母さんはじめ、私を他人だと思つていらつし

やるんだもの。恚うやつて、親も兄弟も何にもないのぢやありませんか。それなのに、兄さん、あなたまでが然うなんだよ。過日の時も一緒に御飯が食べなかつたわ、貴下はお厭だつたのね、」

と此の場處だけにおのづから甘えて言ふのが口説になる。

兼次は不意を打たれたおもむきで、

「否、そんな、そんな、厭だなんて、そんな譯ぢやないんだけど、だつて、弟は小兒だから可いけれど、だつて、お取膳で二人してをかしいぢやないか。」

「人が見て居やしないんですもの、誰にあなた、をかしいのよ。」

「祖母さんの、弟だの、」

「あら、祖母さんの、次郎ちゃんは他人ぢやあるまいしさ。先の内遊びに行けば、いきなり二階へ上つたのに、此頃ぢや然うやつて、貴下が嫌ふから、何だか、私、氣が咎めるんですもの。私の聲が聞え

たつて急きふにおりて來きちや下くださらないし、あゝ、顔かほが見みられたと思おもへば、（近ちか頃は儲まづかるか。）なん
て、」

とさすがに微笑ほゝみ、

「あれは何なんと言いふ口くちですよ。そんな氣きにおな
なすつたもんだから、それだから厭いやなんですわ、先せん
には御飯ごはんも一緒いっしょにたべりや、一緒いっしょの火燵こたつで、」

といふ時とき、うら階子ばしこを上あがる音おと。不圖ふと火鉢ひばちのふちで、
男おとこの手てに、手てをかさねて居ゐたのを見みて、はつと擦すり
退のくと、襖ふすまの外そとから、小女こをんなの聲こゑで、

「姉ねえさん、」

「あゝ、千代ちいちゃん。」

「お火を持つて参りました、あの、あの、それから、」

と廊下で大分時間が取れる。

「早くお入んなさいよ。何だね、此の子は、」

お扇はやう／＼傍へ来た切禿に、優にらみといふのをして、上品に莞爾する。

「あら、お火がなくなつてよ、あの、それからあの、お部屋の前に、これが、」
と、差出したのは銀簪也。

お扇は颯とまた臉に紅、兼次にかくして、すらりと立つて、簞笥に据ゑた鏡臺へ、カチンと置く。

小女は火を繼いで、

「それから、あの、おかみさんが、これを、お客様に、」

と菓子皿を直して言つた。

お扇は對方へ居處をかへて、片膝つき、清らかに
頸の雪、炭を挟んでうつむきながら、まつげ濃く伏
目になりつゝ、

「眞個に火が無かつたのね。」

みづからたしなめるやうにいつて、瞳をかへして、
竊と見ると、あゝ、兼次の寒さうな。

「まあ、寒いんだよ、お千代さん何か出して。いゝ
え掻卷ぢや何だから、其處に私の、あゝ、それさ、
そりや不斷着の半纏だけれど、大好なんだから、」

「はい、」

と立つて、千代が手に、襟艶かに鳥羽玉の半纏の
地も夜ながら、心の絲のちら／＼と赤には染まぬ銀
鼠、裏は甲斐絹の濃い淺黄、戀の淵の色にや出づる。

「さあ、引かけていらつしやい。」

兼次は茫然たり。

「よく似合ふはね、千代ちゃん。」

火を吹いて居た小女は、其のまゝくる／＼と目を
やつて、

「お誂へなすつたやうよ。」

兼次は肩を揺つて、

「こんな俳優のやうなもの、不可いや。」と言
つたけれど、むざと振落す勇氣もあらず、法衣を絡
つた心持、五分刈あたまは、あはれである。

「でも似て居る癖に、」
と嬉しさうに、お扇は背後に見惚れて立つた。

フト其時振り向いて、
「襟ちゃんも着かへたら可いぢやないか。」
何心なくいつたのが、犇とお扇の身に沁みて、

「え、」
と驚いたやうだつて、派手な姿で打惚れた。今も
聞ゆる三味線は、伐木丁々として身にこたへる。

「兄さん、お恥かしいんですけれどね、まだ客が
歸りませんから、」
「然うかい、そりや大變だ。何ね、僕も直に何す
るけれど、一寸何なんだよ。」

「否、構ひはしませんよ、ゆつくりしていらつし
やいよ。向うはね、其内に歸して來ますが、貴下は
歸しやしないから、今夜はお泊りなさいましな。」

お扇は眞面目に言ふのであつた。

「串戯をいつちや不可い。」

「だつて、五年にも七年にも、私の處へ來て下す
つたのは、はじめてぢやありませんか。」

「姉さん、そして、あの、おかみさんが、御酒を
めしあがりますかつて、」

「御酒を、おかみさんが、
と怪しむが如く問ひ返して、其の菓子皿にも氣が
ついた。」

「一寸、おかみさんは此の方を誰だか御存じ、」
「あの／＼、姉さんの御親類の依様の若旦那です
つて。」

「まあ、どうして知れて、」

「よく、あの、姉さんが遁げてお歸んなすつたの

を、あの、此この方かたの母おつかさんが、おんぶをしちや、内ないし
證ようへ連つれて來きて下くださいました。あ、何ど
うも、美うつくしいお方かたでしたつてね。いつも目めについ
て居ゐるんだから、先さつき刻き店みせへ入いらした、此この方かたを一ひと
目め見みると、よく肖にておいでなさいますので、直すぐに、
あ、分わかつたつて、然さう言いつておいでした。」

二ふたり人は顔かほを見合みあはせたが、おもひ／＼に胸むね迫せまつて、
一いっしょ緒しょに兩方りやうほうへ打背うちそむける。

矢羽の簪、むし目金

二十

「それで、あの、おかみさんが、一寸御挨拶に参りますんでございますけれど、お見受け申しました處、それぢや却つてお氣がつまつて何だから、いづれ、後程。」

それから、あの、姉さんに、お座敷の方は、松吉姉さんに然う言つて置きますから、心配しないで、ゆつくりお話しなさいまし

「一ツしやくつて、息をついて、」

「それから、あの、何ぞお好きなものを、姉さんにお見繕ひなさいましたツて、」

「然うなの、まあ、嬉しいわねえ、叔母さんには、沁々厄介を掛けたんだから、」

しめやかに、

「丁ど千代ちゃん、いまお前さんが、私に世話をやかせるやうにさ。」

と打微笑み、

「眞個に兼さん、貴下おつかさんに肖ていらしつてよ。私も叔母さんに肖るとよかつたんだけれど、内のおつかさんに肖たもんだから、まつたくよ、痘痕のないだけが見つけものだわ。」

「否、姉さんだつて肖ていらつしつてよ。だから、あの、あの、いまに御夫婦にお成ぢやをかしいねつて、階下に居た光枝姉さんが、」

「あれ、何だねえ、兼さんあんなことを言ひますよ。」

と娘のやうに袂を捻つて、直ぐに氣をかへ、
「御馳走様ね。」
と棄てたる如く、凜々しく丁と向き直つた。
「御馳走と言へば何にしませうねえ。」

兼次は唯いとほしの人の、まぶしく燦然としてきらめく情に、射窺められた體で居た。

「御馳走處ぢやない。何うぞ、おかみさんに、よく禮をいつて下さい、どの方か分つたら御挨拶をす

るのでした。」

と小女に慇懃に、

「襟さん、最う僕はね、思ひ切つて店前へ入つたにや入つたけれど、隧道からパノラマへ入つたやうで、茫乎として途方に暮れたよ。」

「入らつしやい、なんて、店のお客様だと思つてよ、お民さんも、あとで極りが悪かつたつて、あの、」

「僕の方が餘程極が悪かつた。」

「此方にさ、お襟さんて方はおいでゞすかつて、あの、然うおつしやつたんですもの。あの、一寸は分りませんもの、誰方ですかつて、あの、お民さんが眞面目に然う言つてね。」

「何うしようかと思つたんだ。然うすると、さあ、何うぞツて、言つて呉れた人があつてね、」

「おかみさんよ、姉さん。」

「然うかい。」
と笑つて居る。

「それから此の子に連れられて、其處の裏階子が
ら上つたんだ、此處は襟さんの座敷かい、丁と一世
帯ある、立派だね。」

婦の身には晴がましく、四邊を見廻し、
「大きな招猫が載つかつてら。」

「澤山よう、兄さん、」
と振向きざまに手が届く、簞笥の端の招猫、ちよ
こなんと招いたのを、平手で拂つて突飛ばすと、隅
へころりと、横になつて、見當なしに矢張、招く。

「起上りだとおもしろいのに、」
と兼次は、はじめて莞爾。
「眞個にお前さん難有うございました。按摩の手
引のやうだつたね。」

あらためて小女に。――憎からず初心である。

禮いはれたのが嬉しいか、小女も他愛なく、
「姉さん、持つて來ませうか。」

「然うね、定金が可いね、あゝ、それも、
と目で教へて、」

「それからお銚子もね。可いのよ、私が頂くんだから、千代ちゃん何うぞ、」

「否、それも、あの何ですけれど、何處から持つて來ませうか。」

仔細ありげに傾くので、お扇も何か考へたが、思當らない顔色。

「何をさ、」

「あの 起上り小法師。」

「まあ、次郎さんぢやあるまいし、」

思はず、我を忘れて、兼次の袖を打つと其のまゝ、
淺黄 紅 二重ごし、玉の乳房のほのめくまで、ぐつと引いた兩袖で、顔をおさへて突俯して、およそ耐らないと言つたやうに、

「おほゝゝほゝ。」

「其節は、また弟に、いろ／＼お土産を難有う。
 何、遅くなつたつて、叱られる處ぢやないけれど、
 丁ど其の心配の最中だつた。――
 相談といつてね、襟さんに心配をさして可い事だ
 か、悪い事だか分らないが、家ぢや、其から以來、
 笑ひ顔一つするものも無いくらゐで、外に相談の仕
 手はなし。」

それもね、僕の一身上の事だといふと、政治家に
 なるの、海陸軍を志願するの、やあ、文學だの、何
 のつて、出来ない相談でも何でもいゝ、互に語り合
 つて氣霽しをする友達もないぢやないが、僕等學生
 には言つたつて分らない。時代違ひの父上の事なん
 だから、
 「と言ふ聲も、灰をつゝく火箸もともに、時々深く
 沈むのを、

「はあ、はあ、」
 と早いきせはしく、身に代へても、と思ふ人の、

ひとかた一方ならず苦勞の様子。驚破といへば死にもせう、と逸る身うちを震はしながら、一心に打仰ぎ、身體を捧げて聞くのであつた。

「比の間、先に頼んだ簪がまだ出来て居ないのなら、結び雁金の紋のにしないで、少し考へがあるから、三方黄金の羽にして、矢の根を鐵に、恚う突たら何處でも通るやうな眞個ものゝ矢の簪にして欲しい、こんな中に居るから、またどんな事がないでもない。お守に挿したいからつて

晩方来たね。」

聞くや否や、相手の兼次の話 工合に、一大事、と鋭くなつた神經に、一言で色をかへて、

「串戯よ、串戯よ。兄さん、こんな商賣をして居て、まゝに成らないのが口惜いつて、何も、そんな、そんな、何も、貴下の父上に矢の簪を拵へて、頂いて、それで咽喉について死なうなんて、そんなんぢや
と太く急き込み、

「唯ね、何ですつて。私のおとつさんは妙な穿鑿

をしたたり、人に聞いたりして、扇子の骨をね、こつ
／＼遣つちや考へたんですつて。内の紋が雁金だも
んだから、あの、あとの雁がさきになつたら筈取ら
しよ、といふ古い唄があるが、何の事たか分らない。
あれは、筈取らしよ、と言ふのぢやない。何でした
つけね、矢張筈のやうな名よ、其の侍が弓が上手で、
其の甲賀よ、貴下。

甲賀に射らりよ、といふのを間違へたんだつて、
何うでもいゝのにね。京都の人だわね。まはりくど
いぢやありませんか。

それだからつてね、嬰兒の時、私の名をね、弓を
射る、射とつけたんですとき。阿母さんがずつとあ
とで、弓を射るは、女には強すぎるつて、襟となほ
したといふんですよ。でもね、私ねえ、何だか小兒
の時がなつかしいから、其の名にあやからうと、可
いか、悪いか、存じませんが、おもひついたもんで
すから。

それに、此處らへ出入りをする、丈賀つて按摩さ

んがね。

此の間も祖母さんにお話をしましたけれど、誰の
でもね、簪を抜かして、觸つて見て、

（こりや不可ない。むらがある。仕事が強くて
金がいふことを聞かないで、無理に、毛筋を通るか
ら、目あきによ分らないが、手に障ると敵り曲つて、
ぶる／＼して妙でない。平兵衛さんの打たしつたの
ぢやござるまい、） ってね、せゝら笑ふの。私の
だけは、（いや、こりや兼長が打つた。） って、
莞爾ものなんですよ。

私、嬉しかったわ。

皆はね、比べて見ても何んにも分らないで、中に
や希代だつて、蟲目金なんか當がつた人があるけれ
ど、些とも何處がどうだか知れないもんですから、
按摩が可い加減な、と眞個にはしませんけれど。

私はねえ。

ですから眞個の處は、魔よけにもと思つて、矢の
簪を拵へて頂かうとしたんですの。何、貴下、そ
れが、お氣に障つたの、どうしませうねえ、何ぞ縁

起ぎが惡わるかつたんですか。
と
お
ろ
／＼
し
た。
「

餘りの事に兼次が、

「飛んだ

襟さん、」

叱るやうにいひ消して、

「魔よけた、と言つて矢の簪をこしらへさしてく
れるのか。扇屋の襟坊は、私が細工の氏神だ、と其
の心配の中へ、襟さん。」

ほつと一呼吸ついたくらゐ、其のね、按摩さんの
やうなのが、他に一人でもあつてくれりやこんな事
は起らないんだよ。

話の續きだから言つただけけれど、些とも襟さん
に、かゝりあつた事ぢやない。

唯ね、簪を詔へに來た、あの時、父上は留守だつ
たらう。三時ごろ妙見町の津田屋から呼

びに來てね、」

お扇は再び安からぬ色をした。が、最早座敷の三
味の音など、耳へは入らなかつたのである。

「知つてるだらう、旅籠屋さ。」
お扇は黙つて打領く。

「實は仕事が隙なんで、父上が困つて居る處だもんだから、いやしい料簡だがと、自分でも言ふんだよ。」

わざ／＼呼びに来るくらみだから、些とは實のあ
る註文でもあらうかと、喜んで行つて見るとね、
——大違ひさ。

勿論、何んだ、高作ね、今の主人の。其の部屋に
入つて見ると、
飾屋の庄九郎、

「え、」
女煙管を手にしたまゝで。

「大の仲悪の、あの男が、高作と斜つかひに控へ
て居たから、直ぐに、あゝ、こりや吉い話ではな
らうと、氣の小さい人だから、胸がドキリとしたん
だとさ。」

案の定！

（さあ、此方へおいで。） つて庄九郎が差出
ね。

（飾屋来たか。外ぢやないが、）

と高作も頭から馬鹿にして懸るんだ。銀で立濤の、
蒔繪ものゝ臺の上へ、鬱金の袱紗をかけて、其の上
へ香合をのせて、高作と庄九郎の中に置いてあつた
のを、ずっと押出して、

（そりや飾屋が拵へたんだな。） 高作が、俵と
も平兵衛とも言はない、といつて父上さんは口惜し
がるんだよ。そんな事は、まあ、可い。然うすると、
襟さん、其の香合といふのはね。 僕等の

母さんが、未だ内へ来ないで、扇子を商つて居た時
分

父上が、何んだツたつて、然う言ふんだがね。

あの 何んだつていふんだよ、

戀つてね、

と片袖、懐手で、ずっと火箸を向うの隅へ、思ひ
もかけず手と手が觸つた。

「だもんだからね、不思議に、丁ど津田屋の先の主人から、千鳥の香合を一箇、家の寶にするからつて、黄金無垢で、些とは象嵌に他の金も入つて居るさうだけれど、正味三百五十匁もかゝつたつて。父上が一生懸命になつて、それこそ精進までして拵へたんださうだがね。心ぢや、そんな女々しい、母さんの名を思ひ詰めて、爲た細工だけれど、出来上つたものは、立派に男性に成つたんだとね。

父上は何時でも言ふよ。下手でも仕事には念を入れる。随分舊の刀劍類の、目貫だの、縁頭に、自分でもこれならばと思ふものも、一つや二つ拵へたこともないぢやないが、皆むかうへ、志津なり、關の孫六なり、無銘なり、立派な男を置いて、それになかよくそふものだ。不殘女性で。出来のいゝのは別嬪と同一だ。

おれはぢゞむさくつても美人だわ、先づ、伊勢でいへば扇屋に居る襟的だと、否、嘘なら聞いて御覽。酒を飲みさへすりや、然ういつて、

(いや、どうも惚れ手が多くつて煩いやうだ。兼

なんざ、二十も越して意氣地はない。小情婦一つ出て来なからう、と、祖母さんが、苦笑をして、止せと云ふのも肯かないんだがね。

其晩は、酒を飲んでも酔はないで、眞蒼で居たんだのに、矢張其の別嬪を持出してね 其の話の次手にさ。

扇屋に居る襟坊が 否、眞個、それが證據にや、其時は最一人其の綺麗な女の、ひき合ひに出たのがある。襟さん、津田屋に娘があるつて？

高作の妹の。

「

「ありますとも。兄さんは御存じぢやないんですか。」

と不思議さうに聞き返した。

「些とも知らない。」

「まあ、貴下、評判な方ですよ。御容色は言ふまでもなし、眞個にお優しいんですつて、高作さんの方は、

と言ひかけて、少し低聲で、

「其の通り。失禮な、亂暴な、増長慢の酷いんですけれど、誰でもね、其の方の兄さんに、あの妹さんがあると思つて、腹の立つのも我慢するくらゐですつて。」

彼處でも、おかみさんがお亡くなすつてから、奉公人も居つかないで、まるで様子が、はりましたけれど、お嬢さんが臺所から、帳場から、すつかり世

帯を引うけていらつしやるさうですよ。

尤も何んとかで、總代だの、有志だの、演説會だのつて、高作は洋服を着て飛びあるいて、費はされればつかり居るもんですから、津田屋さんも此頃では、餘程左前なんですとさ。

それでね、お米さん　ー　えゝ、お嬢さんです。大層苦勞をなさるんですつてね。

めしものや何かも、親御はなし、一向お構ひなさらないで、お十九だといふのに、貴下、質素なつたら。大方母様のお少い時のを其まゝなんでせう。

つい、此の秋の中頃でしたつけ。一度ね、何處のか名のある代議士が、津田屋の西洋館へお泊んなすつて、お米さんでなくつては合點しないと、何とかね、酒の上でいひ出して、承知をしなかつたんださうでしてね。　ー　其のお客をお送んなすつて、扇屋へ入らしたことがありましたつけ。大廣間へ御案内すると、

(結構なお座敷でございますこと。)
つて、床の間なんぞ御覽なすつてさ。學校も大層お出來なすつたといふのに感心ぢやありませんか。襟のかゝつたお召を召して、古代紫に白絲で、梅の縫のある半襟でさ、其の癖お品の可いこと、洋服で胡坐かいたお客はね、まるでお供のやうぢやありませんか。

豫てお美しいと、こゝいらでも噂には聞いて居ましたけれど、沁々お顔を見るのはゝじめてだもんですから、餘りお綺麗なのに皆が見惚れて、碌々お客様のお對手もしなかつたの。

髯はがぶりノ、呷つちや、お嬢さんにからんでさ。紅いめりんすの紐でしめておいでなすつた、格子のお召縮緬の前垂の上へ手を乗せたもんだから、松吉つて姉さんが、勿體ないつて、それから腕によりをかけて、何うやら恚うやら盛潰してあげますとね。お米さんが眞個にお喜びなすつて、お歸りがけに、ちやんと手を支いて、

(皆様、お世話でございました。)
と唯それだけ仰有つたんですが、御容子の好い處へ、心から然

ういつて下すつたもんですから、皆が五兩づゝ頂いたより嬉しがつて、一座には十四五人も居たでせう。ぞろ／＼残らず送つて出ましたがね、帳場で提灯をお点けなすつて、

（恐がり坊で困ります。） つて、蝋燭の灯で、莞爾お笑ひ遊ばしたのが、今でも見えるやうで忘れません。

其の間、お客は大廣間に唯た一人、大の字形で横倒。髯むしやが飲さした麥酒の中に蟋蟀が、死んで居てよ。よく蟻が出て髯を銜へて神路山まで曳かなくつてね、兼さん、もう／＼代議士になんぞ成つて遊びつこなしよ。

さあ、樓中がお嬢さんに總岡惚れ、年があげたら津田屋へ行つて、一生奉公をされると言ふのがあるし、唯た一晚で可い、乳母になつてゞも寝て見たいと言ふ人もあるんですよ。

御覽なさい。

其の今

あなたが召した半纏はね、爾晩、

お嬢さんが着ていらした羽織とおんなじ柄ですよ。
紺地にね、銀鼠と紅の縦縞、好いでせう。お色の白
いのに、どんなにうつりがよく、眞個にほれ／＼
するほど、島田に肖合つて、お人がらで、しつとり
して、それで粹でおいでなすつたでせう。餘りすい
たらしかつたから、私もあやかつて拵へましたけれ
ど、

とうつむいて、頤を、衣紋正しい二枚襲、古代紫
の襟に埋めて、悄然として慎ましげに、

「私は、こんなですから、遠慮をして、半纏に拵
へたんですよ。」

兼次は仔細なく聞いて居たが、

「道理で、そんな口惜い中にも、父上の目に附いたんだ。」

何だとさ。奥の客だと思つたんだらう。其の娘さんが、茶をついで持つて来て、丁寧ていねいに挨拶あいさつをしたのをね。

もう六七年行かないんだから、然うだらうね、十九なら、十一二の時しか父上は知つて居ないんで、御新姐かと思つたんだつて。それにしちや、娘さんが馴染なじみらしく、

（暫くでございましたね、おとしよりはお障りもございませんか。）と、しんせつに、祖母おばあさんの事を尋ねてくれたんで、父上は吃驚びっくりするほど喜んださうだがね。もてなしぶりに傍へ坐らうとすると、

（米、あつちへおいで。）
と高作かうさくが追ひ立てたさうだ。

氣がつくと、十一二の堅い荅かたが忽ち盛りになつた

やうに、^{こがらし} 床の中の花一輪^なだつたつてね。あとは^{かれの} 枯野で、二人^{ふたり}とも。父上^{おとっさん}には牛頭馬頭^{ごづめづ}だらうではないか。

成程^{なるほど}、其^その娘^{むすめ}のことなんだ。あの晩^{ばん}は、例^{れい}の別嬪^{べつびん}の引合^{ひきあ}ひに、最^もう一人^{ひとり}殖^ひえたんだもの。先^まづ伊勢^{いせ}でいへば、扇屋^{あふぎや}の襟坊^{えいぼう}か、津田屋^{つたや}の娘^{むすめ}だつて、父上^{おとっさん}が、

お扇^{せん}が、

「勿體^{もつたい}ないではありませんか。」

然^さういふもの。迷惑^{めいわく}でも、まあ、父上^{おとっさん}のいふ別嬪^{べつびん}になつてお置^おき。「

と罪^{つみ}もなく言^いつて退^のけつゝ、

「それでね、其^{その}二人^{ふたり}のやうな容色^{きりやう}でも、皆^{みんな}、他^{ほか}の仕事^{しごと}は女性^{をんな}だつた。が、あの――香合^{かうがふ}ばかりは男性^{をとこ}に出来^{でき}た。かけがへのない一代^{だい}の細工^{さいく}だものを。」

それをね、襟^{えい}さん、高作^{かうさく}が鑄^{いっぶ}潰^{つぶ}して、時計^{とけい}の黄金^{きん}鎖^{くさり}にしようと言^いふんだよ。「

「まあ

、

」

と、お扇は聞いて呆れた顔。

「ざく／＼胸から帯へかけて、ぞろりと輝がさうといふんだらう。」

勿論、承りは庄九郎！ 大方、長崎で和蘭陀人から授かつた、鎖の製法とか何とかいつて、勧め込んだのに違ひはないんだよ。

それはね、純金で三百匁上もかゝつて居ようと言ふ、千鳥一筒。指環にも嵌められず、煙草入の緒にはならず、帽子の徽章につけて歩行かれるわけはなし、見得にもならず、藏ひ込むで置くのは惜い。新に黄金の三百匁も、鎖だけに買つては大變、一層潰して地金にして、と思はれりや其れまでなんだ。

實際の用に立てばつたつて、掛物を描いた畫工が、其繪で障子を繕はれて嬉しいかい。

寒さを防ぐには其の方が重寶かも知れないけれ

ど、

と兼次は深く歎息して、一寸言を途切らした。

慰めかねて打沈み、力なく垂れた手に、煙管を遣
瀬なく俯向けて、膝のあたりを叩いて居たが、憂慮
しげに拱いた、男の顔を竊と視て、

「まあ、何うしたと言ふんでせうね、酒を飲んぢ
や、自分の身體さへ、打棄るくらゐな料簡で、家さ
へかまはないやうな人ですもの。其のくらゐなこと
は、あの人には當然なんですよ。」

だつて、何ですか、其の用だけに叔父さんと呼び
つけたんですか。面當らしい、恥を搔かしたやうな
ものですわねえ、あの人は叔父さんに、何の怨があ
るんでせうね。」

兼次も沈んだ聲して、

「別に、怨も何もあるわけは無いんだからね、面
當といふわけでもなからうよ、呼びつけたのは我儘
なんだ。」

而して用と言ふのがね、襟さん、恚うだとさ。

(飾屋、父爺に聞いたが、こりや交ぜものなしの

極性で逃へたさうだ。ごまかしはあるまいな、念の
ために尋ねて置く。()
何處まで口惜いんだか知れやしない。
目に暗涙を湛へたのである。

二十五

「父上は胸が切つて、急には口も利けなかつたさ

うだ。

（飛んだことをおつしやります。たとひ一厘たりとも間違はござりませぬ。）と庄九郎に見られま
いと、涙を呑んで、然ういふとね。

（だが、飾屋純金にしちや、見た處色が白いが何
うだ。）

と言ふから、

（千鳥だからでござります。）と、目を見据え
て言つたんだつて。

内へ歸つて、僕たちに話すのにはね、黄色い千鳥
は飛んぢや居ない。羽を浮かして、毛彫を入れた鑿
の工夫で、地金の黄金が、白く透いて見えるんだ。
素人目にも見えたらしい。結綿に結つたお前たちの
母様がなくなつちや、あれだけのものは又出来まい。
それだから惜いんだつて、父上は泣いたんだよ。

其の（千鳥だから。）といふ返事を津田屋で
した時は、庄九郎が先に、高作が聲を合せて、一度
にくつ／＼と噴きだしたとさ。

(飾屋、隅へは置かれぬ、おとしばなしは旨い
ものだ、旨い隠藝があるぢやないか。)
(本職より増のやうぢや、) と、庄九郎が口を
合せていつたんだとさ。

(可、もう歸れ、一度口證據を取つたから、溶か
した上で、げつそり減勘がたつた時、彼是は言はせ
んぞ。) ー 其つ切。

押賣をするやうな、恥を忍んで、縋らうにも、取
つく島が無いのだから、蒼くなつて悄乎と歸りがけ
に、此方は夢中で氣が付かなかつた。帳場に居た其
の娘が送つて出て、

(あれ、お履物を。) といふと、女中が聞かぬ
顔をしたので、自分で式臺へ下りさうにしたもん
だから、慌てゝ飛んで来て直したのを、手を上げて
頂いた。其手を懐中へ入れたなり、まるで、冥土の
道でも迂路つくやうに内へ歸つたつて、父上は大病
人なんだよ。 ー 襟さん、そんな話の最中だつ
たから、弟が歸つて来て、

(唯今、)

と言つたが、拍子ぬけさ。

(次郎助、坐れ。) と父上は、まるで、遺言で

もするやうに、はじめから譯をいつて聞かすとね、

奴は唯目を圓くして、

(殺し了へ、切つ了へ、兄さん仇討に行かうぢや

ないか。) つて、無暗と襟さんに買つて貰つた空

氣銃を振廻すんだ。

(かたき討では後の祭、さし當つて千鳥の命が助

けたい。そりや母様の死にめに合つたおれだから、

二度其の思ひをするつもり、あの細工を打壊される

のを命日だといふ氣になつて、死んだと斷念める法

もあるが、それにしても庄九郎の手に掛けるのは殘

念だ。) つて、胸を搔筆つて言ふのぢやないか。

襟さんも、彼奴の事は内々で聞いて居よう、ねえ、

母様に何だつた とさ。

そんな事で、眞個に父上の心が察しられるんだか

らね、

(兎も角、信心をさつしやい。) と、祖母さんがなだめてさ。

あとは神頼みにして、あの晩は寝ただけけれど、何時増埒なんどきるつぼで沸にられるか分わからないもの。

まあ、父上おとっさんは活いてるやうな人ひとぢやない。

何なにね、量目めかたさへ其その千鳥ちどりだけの、三百何十なん刃めといふ純金じゆんきんを持もつて行いつて、引換ひきかへてくれる、と言いへば、何どうせはじめから細工さいくを無むにした仕事しごとなんだから、まさか先代せんたいが拂はらつた作料さくれうまで償つくうて返かへせともいふまいが、それだけの直段ねだんといつては、金かねにしる、品しなにしる、僕ぼくたちが今いまの境涯きやうがいぢや、殆ほとんど何なんだ、人間業にんげんわざぢやないんだから、のつけから考かんがへられずに。

打棄うつちやつて置おいた日ひにや、父上おとっさんは氣きが違ちがひもしかねないし、自分じぶんで自分じぶんの細工さいくが惜をしいといふわけであつて見みれば、他人たにんには話はなされず、勿論もちろんまた話はなすやうなものもなし、恚かういふわけだと、僕ぼくの朋友ともたちに話はなしたつて眞面目まじめに聞きいてくれようわけはない。後のちに政治せいぢ家かにならうの、外交ぐわいかうくわん官くわんにならうの、大將たいしやうにならう

の、師團長しだんちやうにならうの、

といふ景氣けいきの可いい話はなしぢやない。たつた一羽は
の水鳥みどりだ。千鳥ちどりをと言いへば可いいぢやないかゝつけ焼やき
にして掻食かっくらへと、對手あひてにも何なんにもなりやしない。」

兼次は一呼吸ついて言を継ぎ、

「襟さん、何も、こんな話をしたからつて、相談をしに来たつて、何うして欲しいの、恚うもして貰ひたいと言ふんぢやない。」

また頼んだつて、出来ようわけが無いくらゐは知つてるけれど、「

と聲もしめつて、

「然うかつて、そんなわけで、誰に話をするのも出来ないから 襟さん、決して心配をしておくれぢやないよ。ないけれど、僕は、他、他人とは思はない。他人ぢやないのだから、一緒に、心配しておくれ。」

父上と、祖母さんと、あの元氣のいゝ弟が、それから学校へも悄れて行く 其の中に立つ

て 僕一人

と、握り詰めた拳をひたと、肱をまげて額にあてたが、火鉢についた腕の筋の、抜けたる如くがつくりする。

お扇もほろりと一雫、まつげに露をとめかねたが、しかしこれは、兼次のそれには似ないで、濡色の美しく、幽ながら、最優しい望の星が宿つたのであつた。

「兄さん、」

と覗くやうにして呼びかけて、竊と其の面を蔽うて、すゝりなく兼次の、固くなつた布子の膝を揺りながら、

「兄さん、」

「えゝ、」

「よく、あなた、私のやうなものでも使りにして、相談をして下さつてね。よく、あの、他人とは思はないつておつしやつて下さつたわねえ。最うそれを聞いてはね、私の身體で間に合ふなら、直ぐにでも死にませうと、こんなに汗びつしよりになつたんです、今のやうなお話では、然うした處で何の效もござんせん。」

私の心を見て下さいつて死んで了へば、兄さんた

ちに心配をさして置いて、身脱けをして、遁げて行くやうなもんですから、自分では、どうにも出来ませんけれど、兄さん。貴下が然うやって、父上のおために心配をなさいますのは、眞個に、無益ではありませんせんよ。私は神様のお引合せだらうと思ふの。高作はね、庄九郎が取巻いて、今夜、此處の樓へ来て居ます。」

「高作が、此處へ、」

兼次は、夢を驚かされた状していった。

お扇は落着いて、

「来て居ます。ですからね、兎や角いつて居ようより、之から私が、一緒について行きますからね、貴下、高作に逢つて、よくわけを言つて、お頼みなすつて御覽なさい。」

としよつた方は、然うやって、あたまから呑んでかゝつても、貴下ぢや、父上とは、高作の方で面と向つた時に、心持が違ひます。

否、私が取次ぎましたんでは、はじめつから、婦
人が何をと、軽く考へますから不可ません。それに
また、せり詰めて面倒になれば、可いよ／＼、とば
かし、はぐらかされゝばそれまでゝすもの。

私の口から然ういつては、極りが悪いんですけれ
どね、兄さん、婦人が傍に居る時の、男の氣は、ま
た不斷とは違ひますから、其處はあの、ついて居て、
私が楫を取りませう。

どうもね、何となく様子が何んですよ。今、他か
ら其の香合だけの黄金の量を持つて行つて、まあ、
出来ない相談にしましてもよ。

そして、取かへて下さいたつて、庄九郎が中
入つて居ては、吃とそれも届きませんよ。

其の事ですわ、座敷でね。

頻にあの庄九郎が、酔つていふのやごわへんがつ
て、しつゝこく、何んですか、自分が承つて黄金を
溶かして、ませものをして、ごまかして、正味を盗
むなんて、傍からいふまいものでもないが、其處は

庄九郎だなんて言つて居ましたから、屹と然うな
よ。自分でいかさまをして儲ける積りに違ひない、
問ふに落ちず語るに落ちるつて言ふんでせう。

ですから、直接にぶつかつて　　ー　　高作に、然
うなさいよ。ね、然うなさい。男はあつて何とか
ですもの。」

と勇みたつて、早や片膝立てつゝ、立處に納得さ
したが、　　ー　　あゝ、二人は料簡が若かつた。男
はあがつて碎けるは、其れは東の事である。

神路山、神の森、千歳の杉の緑濃く、五十鈴川の
 水上に、森嚴の氣の、紫立ちつゝ、清く流れて灌ぐ
 空の、伊勢の海なる淺緑、一目小春の日本晴。残ん
 の蝶のひら／＼と、扇をつかふ暖かな、うら枯野の
 尾花道。半町ばかり奥深く、茅葺の寺の名の、無憂
 寺と言ふ名高きが、――園中に一樹あり。

神泉の汀、其の樹蔭に、世尊降誕したまひたる、
 波羅叉――即ち無憂樹は、其樹安住、上下正等、
 枝と葉と布き垂れて、翠紫相暉き、孔雀の
 頂の粧あり。花咲くや、花妙に、薫香四方に聞ゆ、
 といへば、姿も色も似たらずや、寺に久しき花桐一
 本。

いづれのおゝん時なりけむ、いみじく美しき、姫
 上の、生れさせ給ひしあとにして、ふるさとなれば
 記念にとて、やがて此の寺建立あり。母君の供養の
 ために、摩耶夫人を祭らせたまふが、今につたへて
 おはします。

奥庭なる菖蒲の池、龍頭の清水滴りて、深山の篔
の音を通はせ、近き人里の塵を拂へば、境内晝も寂
として、階の前なる常夜燈、長に明星の光を放ち、
浮世の闇を照すが如き、暗き本堂の夜を鄰りに、金
欄の翠の雲、合天井に颯と輝き、月、物蔭に氣勢す
る、御姿の美しさ、水百合の花に似て、御心の清ら
かなる、白蓮に異らず、と外國人も讚へけむ。雪よ
り白き御膚に、瓔珞五綵の星を飾りて、彼樹下にお
はする御風情。左手を胸に合掌して、衝と右の手を
上げさせ給へる、花の霞の天衣ひらけて、戸張を射
通す虹の色の、月の前に鬢鬚く状に、御袖の端幽に
こぼれて見え給ふ。

摩耶夫人の御像から、斜めにさがつて、御堂の入
口。此方の本堂の階段に、草鞋のまゝ腰をかけて、
うしろむきに、裾引上げた膝の上へ、竹の子の皮づゝ
み、木賃泊りの晝辨當。胡麻の斑のある名も知れぬ
大鳥の卵のやうな、握飯をつかひながら、ほく／＼
と日のあたる、尾花の中の寺の徑、四邊の人なき折
からを、悠悠として視め居る、長旅に薄汚れた行衣
を纏うた一人の六部がある。

やがて済ますと、手甲かけた大きな手の、掌を當て、口を拭ひ、息を長く内へ引いて、一つ緩かな咳したが、竹の皮を小さく疊んで、端を裂いて一結び。

おなじ階段、腰の傍に下し据ゑた、古びた笈摺にならべてあつた、圓盆に、土瓶と煎茶一々碗、小皿に菜漬をてんこ装で、塗箸の附いたのは、思ふに辨當を使ひまするで、白湯一つ、と無心したのに、方丈が心添へをしたのであらう。

盆の端へ、殻竹皮をさし置くと、其の手で茶碗を取つて、つぎ冷しになつた奴を、猶何處までも枯野の上に見渡される快よき蒼空を仰ぎつゝ、落着いてぐつと一口、心ゆきさうに飲んだのを、其まゝ舊へ、底をかへしてカチリと伏せた。

さて笈摺の荷ひ綱にわがねて掛けた、煮染めたやうな豆絞りを、解いて取つて行衣の懷中。

横から掬ふ如く肩を入れて、御佛を負ひ奉る、と居直つて、しやんと立つた。白の脚絆もしつくりと、

一六十 餘州遍歴の足拵へ、穿きふるしたがきりゝ
とした、切草鞋を踏揃へると、報拾の澁茶の盆を据
ゑて、向うざまに、本堂なる板敷の上へづいと直し
た。

「お造作になりました、御方丈、御方丈、」
と錆びた聲を些と高めたが、寺は無人で唯一人の
方丈殿、はて、裏の畠へござつたさうな。

然せる事には馴れた體で、六部は繰返して呼もせず。向うの壁に押つけた、蜘蛛の巣だらけの梯子の際に、奉納したやうに、又忘れたらしく脱いであつた、昔の小笠を軽く取り、根附の見得で引附けると、斜つかひに小腰を屈めて、彼處に翠の帳の内に、其の影宿る御氣勢の、人丈ばかりにおはします、世にも妙に美しき、迦毘羅城の後の宮、摩耶夫人の立像を、竊と仰ぎ、默拜して、本堂を通して、方丈の襖の方へ目を遣つたが、さて、

「皆様、お世話様になりました。」

と、をかしき六部よ。眞顔に、御佛たちに會釋をしたが、其まゝ敷居を軽く出る。つくりつけた笈も揺れず、やがて枯野の後姿。

尾花を分けて、一四五間が程こそありけれ。古物怪を爲すやらむ、大切な忘れものが、持主を追つかけて、慌しく飛んで来たかと、夫人の御前を鼠の蹠音。

階段の上の板敷暗きに、常燈明の光をうひて、
きらりと輝く猿眼、毬栗天窓を推据ゑて、末黒の枯
穂に散り交る、伊勢の濱荻、蘆の綿、霜の飛び敷く
眺さへ、暖かさうに日をうけて、物憂げもなき行衣
の袂、樺色に染めて行く六部を、上から熟と見透し
たが、有草生庭、階三段ばかりを一飛び
に、紺足袋の足を空。

敷居際に丁と踞むだ、機勢に腰を引立てると、造
作なしに尾花を飛んで、瞬く間に、六部の背後、

「小父さん、小父さん、」

と呼びかけて、脊丈もちやうど、六部の腰へすり
寄つた。其大眼球の毬栗で、紺の筒袖に縞の襯衣、
小倉の袴の處々、繼があるやら、裂けたやら、合曳
から膝小僧、くろぼしまで襦が下つて、和光の玉の
塵まみれ、淺草海苔かと輝くを、引上げた股立ち高
く、淺黄の風呂敷を西行背負ひ、結び目を胸に大き
く、腰に手拭を引挟んで、小鳥打の空氣銃、鐵の色
新らしきを、臺尻細く引掴んだ、歩兵、工兵、仇討、
狩人も、狐も、庄屋も、小さな身體に引纏めて、五

節句でこねたやうな、此の腕白を誰とかする、俵の次男次郎助である。

「呀、おれか、」

と六部は振返つて、じろりと見て、吹出しさうな柔和な顔。

「うむ、小父さん、」

此のくらゐな運動では、呼吸もはずまず樂なもの、ト六部の額に目をつけて、下からぐつと見据ゑながら、

「小父さん、何處へ行くえ。」

「何處といつて當なしよ。」

六部は、顔もいふことも、故とか知らず茫乎答へる。

「然いう、當なしか、」

言ひながら猶瞻り、

「嘘だらう、小父さん、當なしだなんて、そんなことを言つて、丁と行く處が極つてやしないかい。」

「一通りは極つて居るわさ。まづ、山から出て、町を流れて、野を越えて海へ行くよ。水の流れと人の身ぢや。けれどもな、海からさきは分らない、己にも何うするか知れはせんよ。」
と此の時は微笑んだ。

次郎助の目は和らいで、

「ぢや、ぢや、あの警察へ行くんぢやないんだ

ね。」

言の下に、

「は、妙なこと

をいふ兒たぜ。恚う、己は六部ぢや。寺々と木賃宿、御報捨下さる檀那衆のお門にこそ用はあるが、とんと警察に行くわけはないな。」

「眞個かい、小父さん、」「六部ぢや、と言ふ

のによ。」

と判然とした調子であつた。

「小父さん、」

と次郎助は又呼びかけつゝ、

「六部つて、六部つて何だね。」

「はあ？ 六部が何ぢや

といふ

のかな。」

其時まで、生え抜きものゝやうに見えたのが、菅笠を取つて、俯向けにして、胸へあてゝ其の下で手を拱きながら、次郎助の状をつく／＼と、

「待てよ、」

といつて空を仰ぐと、恰もこゝに花桐の見上ぐばかり幹高きが、葉こそ花こそ今はなけれ、古の宮の宮柱、すつくとばかり空をさして、梢に晝の月をかけ、枝にまばゆき日の光。御堂の中には摩耶夫人。六部は額に手を加へ、頭を下げ、頂いて、其花桐の蔭を行くと、傍に、石塔の臺石ばかり残つたの

に、芒を敷いて腰を掛けたが、菅笠を取直して、ポ
ンと次郎助の足許へ。

「まあ、坐れ。然うだ／＼。赤土ぢやから直接に
遣つては臺なしよ。それ足袋を見な、泥だらけぢや、
履物は、」

「草鞋が彼處に脱いであるよ。」
とばかり、見返りもせず、塵も拂はず、ちよこな
んと笠にとまつて、偏に答を待つのである。

「待てよ、六部つて何だ、と聞くか。

然うよなあ　ー

まづ、何さ、別なことは無しよ。坊主の形の變つ
たのぢや。矢張それ、世捨人さな。恚う其の見た處
は、目鼻も揃つて、手も足も満足でありながら、人
間で居て人間でない。然うかといつて、狐　狸で
もない奴ぢや。おなじあかりでも、日や月は言ふま
でもない、電燈よ、瓦斯よ、洋燈よ、そんな結構な
光ぢやない。ぶらり／＼と歩行く處は小田原に似て
居るが、提灯の役にも立たぬ、人魂のやうなものよ。

雑ざつと人間にんげんのひとだま親おやぢ仁にが、見みなさい、比この、笈おひ摺ずるを背しよ負よつて歩あ行るいて居あると思おもつたら、大たい概がい可よからう。

「わかつたか、と六ろくぶ部ぶは自分じぶんで頷うなづいた。

次じろすけ郎すけ助けの目めは尚なほ圓まるく、笠かさに坐すわつて、笈おひを狙ねらひ、

「そりや、何なんなの、笈おひ摺ずるつて？」

「是これか、」

と膝ひざに兩りやうて手をしやんと、胸むねを前まへへ乗のり出だすと、笈おひ摺ずるが揺ゆれたのである。

「こりや、何なによ、戀こひの重おも荷によ。」

六ろくぶ部ぶは胸むねがすいたやいうに、恚いかう言いつて莞にっこり爾りとしたり。次じろすけ郎すけ助けには合あ点てんゆかず。

「なぜ、何なにうしてそんな六ろくぶ部ぶになつたの、」

と別べつの方ほうから裏うら問とひかける。

「む、何か、己おれが其そのひとだまに成なつたわけか。

いや、些ちつとをかしいが、色いろ戀こひから起おこつたよ。」

次じろすけ郎すけ助けの目めは益ます圓つばらで、

「色　　―　　色　　―　　戀つて、何だ、そりや。」

此時軽く膝を叩き、

「ほい、先方は小兒ぢやわ、」

と大口を開いて、呵々と獨りで笑ひ、

「成程、分るまい。色戀といつて、然ればさな。」

莞爾々しながら、樂しげに打案じた、六部は次郎

助が引きつけた件の得物に目をつけて、

「おほ、素ばらしいものを持つて居るな。」

「扇屋の姉さんに強請つたんだ。」

と、さすが少年のあどけなく、然も得意らしく捻

くり廻す。空氣銃でも飛道具、知らず、是あるがた

めか。四邊に雀の聲もせず、遠くの方で烏が見て居

る。

六部は深く打頷き、

「何、別に大した仔細はない、恚うなつたらよく

分らう、」

尚ほ空氣銃に瞳を注ぎ、

「己が、其のために、こんな六部になつた

色戀は、」

「うむ、色戀つて？」

「知るまい、學校では教へません。色戀といふの

は、ぢや、其の鐵砲のやうなものよ。」

と六部は又哄然として高笑。

「はゝはゝ、何の事はない鐵砲彈よ。言ふまでもない事ぢやが、それ雀な、四十雀な、其鐵砲なら山鳩も打てるぢやらう。」

まづ、それ狙を極めるわ、喃、打つてこましょ、と恚う、

六部は腕を狙の構へで、片目瞑つて眉を寄せ、
「一つ、的へ向つた時は、一心不亂ぢや。鹿を追ふ獵師山を見ずとやらで、身も世も忘れて狙うてな。どんと遣るわ、よしか、當れば占めたり。」

外れたが最後、的も彈丸も行方知れずよ。中には其處らの樹の枝へぶつかつて、啄木鳥の玩弄物に成るのもあれば、小笹原へまざれ込んで、兎の糞と間違へられる奴もある。

ボンと度外れにすつ飛んで、方圖なしに外れた彈丸は蒼空の中を、

と仰いだ、花桐の梢が高矣。

「天上へすつこ抜けて、星になるて。」

たゞし星の中でも、氣の利かない、夜這星といふ
奴よ。な、夏向すい／＼と怪し飛ぶ連中、それ、宙
ぶらりに其處等をまごつて歩いて歩くのよ、分つた
か。

と顔を見ると、次郎助の目は瞳られて、話の星も
映りさうな。

「其癖消てもなくならず、太陽に、月がついてあ
るくやうに、今日は伊勢、翌日は伊賀と、六十餘州
ぐる／＼とまはつて、上りなしに、賽ころは又もと
の振出しへおもどりよ。」

こんな理窟は己よりは、お前の方が、學校で知つ
て居よう。色戀にそれた弾丸は、軌道をはづれた、
惑星ぢや。

六部もまた其の通り。此の世の中には居りながら、
往來はづれをうるつき歩行くわ。まづ／＼人間で居
て人間でなし、それ獣にも身體は肖ずよ、妖物と言
ふわけでもなからう。提灯ほどの用もせぬが、恚う

やつて晝日中、お前さんの目につくからには、ひとだまと言ふでもなしか。疾い處が、其の行方の知れないそれ弾丸が、ひよいと流星になつて見えたのぢや、と思へば可からう。

おなじ月日の下に居ても、まるで曆が違ふのぢや。不思議な夜這星があらはれた、と天文臺では口を利いても、警察や巡查には用のある己ぢやない。

何うぢや、分つたかな。」
と膝を臺に、頤杖ついて、閑々としたもの也。

略其の意を得たらしい、次郎助身構を崩すとゝもに、懐しさうな顔色で、

「ぢや可いや。小父さん、お前、あすこで、あの、僕がした事を見て居たらう。」

と肩をなだらかにして擦寄つた。

六部は平然として、「何をな、」

「うゝむ、あれよ、彼處の、あの、摩耶夫人様の、恚うやつて、右の手を舉げておいでの、手の中へ隠

したもののさ。

「どんな奴が搜したつて氣はつくまいと思つたけれど、チヨツ、」 高慢に舌打して、

「仕様がないうやないか。すぐに見附かつたんだもの。僕はあの、横手の薄原から窓に飛込んで、一生懸命で隠したんだ。目が眩んで外のものは些とも分らない。唯、摩耶夫人様の顔ばかり見て居たもんだから、氣が付かなかつた。」

「誰も居ないと思つたら、小父さんが飯を食つてたんだぜ、僕は何うしようかと思つた、」

「はじめて空氣銃を放した手の、握りつめて汗になつたが、袴でこすつて、」

「可いや、」
「嬉しさうに莞爾笑ひ、」

「構はないや、そんなお星様なら見られたつて構やしない。僕は盗んで來たんだぜ、盗坊なんだ、小父さん。」

「然うか。いや、お釋迦様の母様に大びらで預け

るくらみぢや、夜這星に見られたつて、仔細はない。
心配は些とも要らんが、幾歳だ、ふウ、十三か。

名は、次郎助、俵といふ白銀師の次男だと、俵

と口の裏に言つた時、夢のやうな顔を支へて、六
部の右手はぶる／＼とした。

しかと左の拳を握つて、

「盗んだものは、一體何かい。」

「父上のね、」

次郎助は顔を寄せて、低聲になり、

「父上のこしらへた、黄金の千鳥の香合なんだ

よ。」

「―― それからね、それからね、小父さん。」

「―― 扇屋の姉さんが、丁ど其の晩遊びに来て居た、其の津田屋の高作といふ、持主の奴に頼んで、是非、あの千鳥の香合を、壊さないやうにして貰はう、と思つて、一緒に其の座敷へ行つたんだつて。」

高作の奴はね、太く酔つて居たさうだけれど、姉さんが、私の従兄だつて然う言つたら、厭にきちん
と行儀をよくして、眞四角に坐つて、あの、
（俵君か、はじめまして。） 其の庄九郎といふ
奴が、（いや、俵の少いのおいで、まあ、お杯
を、）と矢張極つてね。杯洗にすゝいだりなんか
して、杯を獻すんだつて。兄さんはね、小父さん、
些とも飲めない。」

「はあ、いかなか、兄さんは幾歳だね。」と六部は懇な問ひぶりである。

「二十一なんだ。」

「二十一、いや、少ないな、これからぢや。酒なぞあがらん方が結構。何かね、同じく父上のお職をしてか。」

「否、大工を遣るんだつて。父上は細い仕事をし、恚うやつて馬鹿にされるから、口惜いからそんな掌で掴まれたり、袂へ入つたりするやうなものでなしに、戦争でなけりや壊れない、戦争だつて、日本だから大丈夫な仕事をといふの。」

精出して勉強して大工になつてね。今に其の願が叶ふと、此のあの伊勢の宇治山田を、まじりのない神様の土地にするんだつて。女郎屋や旅籠屋なんか、皆停車場の外へ拗り出して、お宮様ばかりにして、あとをね、綺麗に、可厭な奴の塵埃一つないやうな花園にして、五十鈴川の兩方へ一面に、美しい花を栽ゑるの。

そして園へ、雪の山のやうな大理石の、素ばらし

い大きな御殿を建て、
神路山、宇治橋邊の常磐樹は、お月様の中を透過
つて、月桂樹が見える様な工合にして、其の大建築
物の上へ、百萬燭ぐらゐな電燈をつけて、山田中蟲
の這ふのも分るほどな月夜にする。

あんな、網をふつてお錢を投げて貰ふ、見世もの、
木戸錢を取るやうなものだの、それからね、古市邊
の兩側はね、女郎屋の硝子でも、赤福餅、諸白の徳
利、残らず、色氣工合が安繪具を塗こくつた、手品
の看板見るやうで厭だから、津の方へ掃き出して
ひたいつて。

夢を見たやうな目的なんだ。

それもね、其の晩、高作に散々おびやかされて、
熱病にかゝつたやうになつて、酒の酔も苦しいし、
うつら／＼しながら、窓から月影の射すのを見て、
そんな事を考へてね、このあひだ、一緒に此のお寺
へ摩耶夫人様拜みに来た時、あのお堂で、僕に沁い
つた。

あゝ、矢張父上の事について願がけに来たんだ

よ。

「と早口ながら刻むが如く、次郎助は確乎語つた。」

「むゝ、癩に障つたまざれに、希代なことをもくろんだわ、はゝはゝ。」

いや、例のそれ、鐵砲彈丸がポンと飛びの、夜這星になる一件ぢやと、鼠木綿の半反も引絡めて、笈摺を背負つて出りや立處に間に合ふが、山田を其のまゝ、月宮殿にしようといふのは、些と凄い。

しかし、可い 月だけに始末が可いわ。

おなじ事でも夜這星を心懸けると、六部になつて了ふ處ぢや、少い人がそれでは大變。

また、そんなに口惜いおもひをしたのか。」

「兄さんは話す時、ほろ／＼泣いたぜ。」

袂に縋つて、頼まうと思ふ、此方に弱身があるもんだから、あの、言ふことに逆つちや悪いだらうと、飲めない酒を毒藥のやうに、身いぶるひして嘗めるのを、姉さんは高作の傍に坐つて、はら／＼して見て居たつて。」

「然うやつて、どうか、恚うか、杯を下に置くと、今度は、一つ頂きませう、色男あやりたいなんて、庄九郎までがちよつかいを出したつて言ふぢやないか。」

可加減に呼吸が苦しくなつたのに、はあ／＼いつて、それから、あらためて手を支いて、其の父上の香合のことをいひ出すとね。」

「然うすると . . .」

「野暮な、そんな事は、まあ、あとだ、一つうかゞひませう。」

（是非ひとつ、いや隠されるだけ、なほ聞きた

い。）と、二人でね。

小父さん、兄さんに唄へといふんだ。

兄の奴あ、からつきし出来ないや。シノメノストライキどころか、何なの、學校でも唱歌には弱つたつて、零點なんだ。

斷つて出来ないと言ふと、突放して出て行きさうにするから、姉さんがね、一杯涙をためた目で教へて、三味線を取つて、横を向いて、而して竊と泣くんだつて。

うたつたさうだ。遣つたつて僕に話したがね、何を怒鳴つたか、僕それを聞いたけれど、思ひ出しても冷汗が出て、極が悪いつて話さないよ。

あゝ、大方、松山かゞみ照らさばやといふ、女の子の遣る、情ない聲の唱歌でも饒舌たらう。時口の内で言つて居るんだから、意氣地はないぜ、伯父さん。

でもね、可哀相だ。

蚯蚓のやうに一聲引張ると、可い工合に姉さんの、三味線がフツゝり切れた。

―― あはれ玉の緒も絶ゆる思ひの、絲は其の時切れたのであつた――

「お庇で唱歌は止すことが出来たけれど、其のかはり、姉さんがみじめぢやないか。

（せつかく俵先生が、） あの、最う杯の遣りとの時分から、先生、先生と言つておひやかしかしはじめたつてさ

（せつかく、あの俵先生が、隠藝をお遣んなさるのに、如何に拙だからつて、愛想を盡かして、故と糸を切る法があるか、失敬な！）

（あれ、） と立たうとするのを、裾をつかまへて引張り寄せて、斜つかひに、あの反る處を、

（あやまれ、）
といつて腰を突き飛ばしたんだつて、姉さんは、兄貴の傍へ倒れてそれなり、」

ー お扇は、ものうき身だしなみ、又其の座敷へさして出て、此時落した簪を、前に平兵衛に頼んで置いた、矢のそれならば、と思ひしならむ。戀しき男の羽織の袖を、雪の頸に打ちかけて、婀娜な姿を投伏しつゝ、

（堪忍して下さい、） と其まゝ、兼次の足のおや指に、しつかり食ひついて泣いたのを、どんなに

果敢なく喜んだらう　――

「それなり、あの、姉さんは泣いたつて、兄きに
空気銃を貸せば可かつた。

そんな時は目をねらつて、ズドンだい。

何んでもね、高作の奴はやきもちを焼いたんださ
うだからね、尚不可い。

それでも他に為やうがないから、兄きはまたあら
ためて、千鳥の事を頼み出す、と今度はあたまから
刎ねつけるんだ。

おもしろづくに刎ねつけるんだ。

（せめて、二三日貸して欲しい、もう一目父上に
見せたいから、）

とまで言つたけれど、それさへ肯きさうな顔もし
ないで、庄九郎の奴がまた、然も其の黄金を、何う
かごまかしてもするやうに盗坊あつかひにしたもん
だから、弱兄も眞赤になると、姉さんがね、目で留
めちや、竊と袂を引張つたつて。

其時にはね、姉さんが、今突飛されたのを幸にし
て、此方の火鉢に坐つて居たつてよ。高作が、

（おもしろくない／＼、餘處の樓へ行つて飲み直
さう、さあ、貴様來。） つて、うる／＼する、姉
さんの腕を、もげさうに、

（あいつ／＼、） といふのを引張つて、よろけな
がら、廊下へ出て、階子段の上の處で、

（こん、畜類め、） とうしる抱きに、咽喉へ腕
をまはして、あの、搦みついて締めた處を、庄九郎
の奴が、横合から、

（いゝ加減に轉びやがれ。） つて、姉さんの
裾をね、足を舉げて棗に掛けたから耐らないや、仰
向に倒れると、高作も酔つて居るから、ともだふれ
に横倒。

ー ー 亂るゝ裳に、かつ散る白脛、柳に雪のち
らめくばかり、階子にこぼれた友禪の、淺黄忌はし
水小袖、棺の上にほの見えて、駕籠を洩るゝに似た
りしが ー ー

ひとり寝

三十三

白き頸を捻るばかり、お扇は切なさうに差伸して、高作に緊られた肩を揺つて、身を顫はし、障子の際に凍りついた、兼次を一目熟と見たが、其まゝ地獄へ落つるやう、階子を下へ沈むたのである。――

「座敷にはね、姉さんが、兄さんに會つて居る内、一生懸命にごまかして居た、他の藝妓も持餘して、其の亂暴を遣つた時は、誰も傍にや居なかつたつて。

其のまんま身體が消えて、なくなつてくれゝば可い。兄きは廊下の障子にしがみついて立つて居たんだ。氣がついて、跣足で飛出して、家へ歸らうと思つた處へ、松吉といふ年紀上の藝妓が來たの。

そして、あの、抱留めるやうにして、（お扇さん、）―― あゝ、姉さんの、ことづけがあつた。どんなにもして、あの事、其の香合の事を高作に肯

いて貰つて、いゝ返事をする。直きに歸るから待つて居ておくんない。此方へ来て、此方へ来て、と先のまた姉さんの部屋へ連れて行つたさうだけれど、方々の障子から、銀杏がへしだの、島田だの、中には此頃はやる束髪のだの、いろ／＼な顔を出して覗いて見たんで、どんなにか極りが悪かつたつて。

次郎助は物語りに氣が入るか、袴腰に搔敷いた六部の小笠をずり出して、腕白な胡坐になり、枯野に（桔梗）のゆかりはなきも、破れ袴にまつはる草を、其の口にした鬚の數ほど、筆つては棄て／＼、

「高作の座敷へ頼みに行く、出がけに禿が持込んだ御馳走は、酒も何も冷え切つて、凍りついて居たもんだから、其の松吉といふのがね、小父さん。

手を叩いて、禿を呼んだのを、下戸兄は薬ほどもいけない、と蒼い顔をしたなり、吃驚するやうに留めたもんだから、それでは無理には勧めませんと、来た禿にいひつけて、長煙管を取り寄せて、一服やつて、

（寂しくとも我慢なさい。お扇さんだつて、あの、

一度そこいら、わがまゝをして、座敷を斷つても可
いわけだけれど、主婦が思ひやりのある、分つた人
だけに、自分たちも、つとめは投げ遣りに出来ない
から、どんなに辛かつたか知れないのに、可哀相に
お扇さんは他樓へ連れられて行つたんです。ほんと
にこれが、あの、苦界とかいふんだ、） つて、話
をしい／＼箸を持つて含めないばかりに、御馳走を
勧めてくれたつて。

僕なら遣ツつけるけれど、弱兄だからね、小父さ
ん、恚うはいかないや。」

「應、然うはゆくまい。」

六部は半眼に目を据ゑて、打傾きつゝ聞くのであ
つた。

「其處どころなもんですか。うま煮の中の慈姑だ
つて嚙込さうにもないんだから、松吉が、

（それでは床をのべませう。横になつてお待ちな
さい。お扇さんは本を読むのが好きだから、何處か
抽斗を搜したら、敵討の講談ぐらゐりませう。

用があつたら、遠慮なしに、何時でも手を鳴らしてお呼びなさいよ。私は又これからわきの座で唸ります。月は凄し、霜枯なり、狼の遠吠だと思つて、奥山の辻堂に泊つたやうに、心細がつては不可ません、夜のもはお扇さんの移香がしますよ。)

小父さん、其の松吉が串戯をいつて去つたとさ。

それから死んだやうに倒れたが、後で、恚う、あの、幾つも上り下りのあるやうな、廣い一二階の遠くの方で、松吉だらう、夜が更けてから唯た一人、佳い聲で唄つたつて、撥の音が枕を引切るやうに響いて、何ともいへない氣がしたつてよ、小父さん、兄きがいふんだ。二時打つて、しばらくするまで知つて居たさうだけれど、掛けてる夜具が重くなつて、あの、胸を壓すやうで、呼吸が苦しい。肩が寒いのに汗が出る。あたまはづん／＼痛んで来るし、おとつさんの蒼ざめた顔が見えるし、祖母さんの白髪が見えるし、犬の長哭が聞えるし、家はどうなつたかも知れないと、むつくり起上ると、廊下に聲音も聞えないから、何處をどうして歸る方角も分らなければ、もう門も閉つた頃だし、門が閉るくらゐでは、

姉^{ねえ}さん^もも^{かへ}歸^りは^しま^いし[。]
「

「然うかといつて、夜のあけるまで、待つて居られるか、それも尋常の家ではない。祖母さんだけは、内々含んで居るものゝ、こんな處へ来た事は、父上にも秘密なら、自分たちの友達にも氣取られては大變なわけだのに、お扇もお扇だと、何だか怨めしくもあり、腹も立つ。口惜い、といへば座敷で唄を唄つたと、うつむけになつて、自分で耳をおさへたり、横になつて、姉さんの事を考へたり、あをむけになつて、内の事を案じたり。

手も足も引斷つて、方へ投げ飛ばしたいやうな氣がする處へ、千鳥の聲が聞えたつて、

伯父さん、遠くの川の音がしてね。

や、千鳥が鳴くと、思ふと、其の聲が父上になつて、兼や、兼やと、そこいら駈け歩行いて居るやうに思はれて、又飛起きたり。

獨りで、アツといつて見たり、目をぱつちり開いたり、長い／＼溜息したり。頭を引つかんで寝よう

とするやら、枕を裏がへしにして押つけるやら、あせり切つて、悶え抜いて、了ひにや最う是つ切で、父上にも祖母さんにも逢へなくなりはしなからうかと頼邊つたはつて涙が出たつて　ー

家ぢやあね、小父さん。

兄きが、其の留守の晩、昔から内にある、眞鍮ぶちの柱時計を盗まれた。

安ものだけれど、些とも狂はないのを父上が自慢にして居たのを、すぽんと奪られたんだよ。まだ宵の口だけれど、父上は、兼は何處へ行つたらう、未だかノノと心配する。
祖母さんは、藝妓屋へとは言はないで、案じさつしやるなど言ふばかり。父上が氣を揉むほど、歸りが遅いもんだから、長火鉢にむかひあつて、黙つて二人とも俯向いて居たんだ。此の節は毎晩然うなんだ。

僕はね、納戸の床に入つて、此の、あの、空氣銃を持つて、ズドンなんて口眞似をするけれど、叱りもしなければ、笑ひもしないから、張合がなくて、茫乎して居た内に、祖母さんが、何時だらうと、時

計を見つると、小父さん、すぐ傍の柱にかゝつたのが
無いだらうぢやないか。

また其晩に限つて、洋燈をつけたあとで、祖母さ
んが、ぜんまいを巻いたんです。

今の間に、ちよろまかされた。頬被をした奴かな
んか、土足でのそ／＼と入つたもんだ。あゝ、恚う
まで變になつては、壽命もたんとあるまい、と父上
は情ないことを言ふし、祖母さんまで、何だか急に
時計がないので、家内ぽかんとして、何處も世界に
取ツつき端がないやうぢやと言ふし、兄きは歸らず、
どんなに弱つたか知れやしない。考へて貰ひたいや
ツて、兄きにも言つたけれど、小父さんにも考へて
貰ひたいや。」

次郎助は、突掛るやうなものいひ。

「察しるともな、いや、散哉。」

「兄きは一晚の内に瘡つこけて、大病人のやうな
顔をして、あくる朝歸つたけれど、其つ切、家ぢや、
時間が分らない。僕も學校を休んじまつた、まる

で方なしだ、あゝ、」

と、うつむいて、けろりとして、

「おみくじやら、何やら、内で騒いで居るうちに、兄きは、然うやつて、姉さんの夜具の中で、のつゝ、そつゝ。其のうちに疲れ切つて、うつとりとなつた處、戸外が、冴えた月夜のやうな氣がして、何だか、ちら／＼千鳥の影が見えたから、それで、あの、山田中公園にして大理石の建築をして、自分が大工になつて、と考へて居る枕許へ、すつと襖を開けて、婦人が入つて、膝を支いた。

黙つて居ると、煙草入を手にとつて、三服ばかり吸つて、トン／＼と靜かに拂いて、あゝ、寝よう／＼と言つて、長煙管を提げて、裾をずる／＼と引いて、出て行つたつて
松吉だつたつて。

あとで、了つた。此の人に、然う言つて、歸して貰ふんだつけ、と氣が付いたが、最う遅い。――
寝よう／＼で寐たんだらう。

寂として、何處にも物音一つきこえなくなると、

又^{また}目^めが^さ冴^さえて^き來^きて、さあ、今^{こん}度^{んど}は^{また}、胸^{むね}を、針^{はり}の
尖^{さき}で^{きり}／＼突^つつ^かれるやうで、じり／＼して、ぶ
る／＼ふるへて、あぶら汗^{あせ}を^か搔^かいて、耳^{みみ}が^ぐわら／
＼と鳴^なつて、動^{どう}悸^きが^{ひど}酷^くくなつて、ドン／＼突^{つき}上^あげら
れる様^{やう}で、嚇^{くわつ}とのぼせて、恍^{うつ}惚^と氣^きが^{とほ}遠^{とほ}くなつて、は
つと氣^きが^ひついた拍^ひ子^しに、悄^し乎^んと^{ぼり}簞^{たん}笥^すに^も凭^たれて、髮^{かみ}ば
かり黒^{くろ}く、顔^{かほ}ばかり白^{しろ}く、薄^{うす}ら蒼^{あを}く立^たつて居^ゐる姉^{ねえ}さ
んの姿^{すがた}を^みた時^{とき}は、ちやんと、恚^かういふ約^{やく}束^{そく}で、此^こ
の時^{とき}、歸^{かへ}つて來^きたのが前^{まへ}の世^よから、極^{きま}つて居^ゐた事^{こと}の
やうに思^{おも}はれたつてよ。」

「姉さんの歸りの遅かつたのを、別に、怒つて居たといふ譯でもないんだけれど、氣が苛々して、耐らなかつた處だもんだから、突然、

（僕は歸る、） つて、兄きは寢床から匆起きたさうだ。

姉さんが、涙聲で、（あゝ、お内でどんなにか御心配なすつて被在やるでせう。まだ夜が明け切りませんから、戸外のお寒さつたらありませんけれど、）と言つて、あの、背後から羽織を着せて、片袖通すと、通さない左の袖を、緊乎掴へて顫へたんだつて。爾時手が觸つたら、姉さんの身體は、着物に霜が下りて居て、氷のやうに、こたつたとね。

それこそ、どんな目に逢つて、どんな寒い思ひをして歸つて来たか分らない。可哀相だつたつて。そして大地震か、戦争で、離れ／＼になつたのが、死んだあとで、六道の辻か何かで、めぐりあつたやうな氣がした、と兄きが言ふんだ。

(高作が承知をしてくれたのなら、それを手柄に最う些と引留めたいんだけど、どうしても肯いてくれません。)

せつかく相談して下すつたのに、此のまゝ歸して了つては、叔父さんが、何うなさいませう。第一貴方は何うなるの。私は死にたい。) と姉さんが、恚う言つて泣いて居たさうだがね。

(他に詮方がありませんから、あの、高作の妹さんの、お米さんに頼んで御覽なさいまし。)

貴方が直接に逢つて、よくお話をなさいますと、屹と、しんみになりませう。

そして、其の千鳥の香合は、貴方の父上が、母上の事をおもつて、一生懸命にお拵へなすつたと謂ふことゝ、私の叔母さんのお名が、其の千鳥だつて事と、鞆にかけて今其の香合をこはさうとする庄九郎は、母上に、不都合をしようとした畜生だと言ふことを、よく言つてお話しなさい。

作のよしあしやなんか、分らないでも、女は氣の

弱い、胸の狭いもの、死ぬも生きるも情ばかり。

貴方の口から、お米さんが、それを聞いては、屹と命がけになりませうから、其事を、其の事を、

ツて、

「お扇は繰返して、其時、遺言する如く言つ

たのであつた。――

「小父さん、女つて、そんなものかい。」

聞き惚れて乗り出して居た、石碑の臺石の上なる

六部は、急に問ひ返されて、

「む、」

と言つて、胸を引いた。刮と目を開き、

「先づ、そんなものだらう。む、處で、」

「それから、あの長い廊下を一里ばかりも、黙つて手を曳いて、送つて出て、門口で、（御機嫌よ。）」と、島田鬚を、ひつくり返して、伸上つて、

明星の落ちさうな處へ、顔を出して見送つたんだつて。兄きは方角も分らない處へ、何處からか急に産れて出たやうに、茫乎して、しばらく立つて居たさうだがね。黙りで、こんがらかつて、よろけた奴が

二人來たから、高作徒輩ぢやあ、大變だと思つて、
すた／＼急いで歸つて來たつさ。

内は時計なしの、がらんとして、それから此方、
夜だか晝たか分りやしない。揃つてお飯を食へたこ
とも無いんだもの。

祖母さんがね、小父さん。

逆も一人ぢや遣り切れない。亡なつた母さんに相
談をして來るんだと言つて、前掛だけ、新しいのを
しめかへて、僕たち兄弟を連れて、お墓へ、參詣を
したんだよ。

墓はね、土堤が低くなつて、川とすれ／＼な野中
にあるの。其處で祖母さんが僕たちに言つたんだ。

(此の川について、小一里ばかり、津の方へ行く
裏街道で、少し路から入つた處に、無憂、寺つて、
摩耶夫人様のお寺がある。此のお寺だせ、小父さん。
母上が信心で、お産に怪我のないやうに、お前た
ち二人の時に、月々缺かさず。お禮まゐりには、
父上、私たち一緒に瓢箪を提げて行つたこともある。

津田屋の先の女房も、矢張摩耶夫人様が信心で、今のお嬢さんがお腹の時、一緒の日傘で、田圃道で、道伴になつた縁もある。忘れたらう、次郎助は飛んで歩行いて、お寺の庭の、菖蒲の池へ倒に落つこちて、危く死なうとした。淺黄のつけ紐が岸の躑躅にからまつて助かつた。他ならぬ几帳様、二人して行つて、よく父上のことを願ひ申してくれ。

一緒に行きたいが、此頃の父上、長く一人で置くのは憂慮だから。ツて、それから、梅干の苜を入れた、祖母さんが手拵への海苔巻をね、お墓へ一つそなへたあとを、僕が懷中へ捻込んで。――

と言ふ

忤りしほどに兄弟は

「祖母さんが、お墓の松に小さくなつて、それに別れて僕たちは、合歡の樹の澤山ある、暗い川邊を通つたんだ。」と次郎助が語り次いだ。

「それから、山吹の葉の落ち切らない、田舎屋の背戸を通つたり、菖蒲の返り花が一つ咲いた、土橋を渡つたり、つい此間の事なんだがね。お寺へ來ると、まだ蝶々が此處等を飛んで居たつけ、矢張良いお天氣の日でね。」

御殿の階へあがるやうな心持だつて、兄貴は言つたよ。三段ばかりだけれど、遠く土を離れた工合に高かつた。」
次郎助が本堂を左に見返るにつれて、六部も胸を伸ばしながら、靜に其方を見遣つたのである。

「彼處を入つて、それから、眞蒼な夏木立の几帳

の中に、明いやうな摩耶様の姿を拜むで、二人で竊と顔を見たの、何だか生きて居て母様を見るやうだつけ。

兄きは何か思ひ出して、悄乎として居たけれども、僕は大好きな海苔巻があるからね。

何んだつて愚圖々々言や、鐵砲でズドンなんだ。

構はず大胡坐搔き込んで、むしやり／＼食べて居たんだ。

其内に姉さんの事なんか、兄きが、一生懸命に話してね、そして鬱ぐから、僕も鬱いで、極りが悪くつて、鮨をよして、指を噛んだの。爾時ね、兄きが言ふにや、(も、う一つ姉さんが言つてくれた通り、津田屋の妹に頼みたいけれど、さきがお嬢さんだから、何うして、何處で逢つて可いか。二三度、津田屋の前あたりまで、出かけて行つて見たけれど、何だか、城があつて、櫓があつて、外濠があるやうで、何うする事も出来はしない。其癖、一度なんざ、帳場に坐つて居て、莞爾して、奥へ駈込むだのを見ただけれど、) なんてつてね。

目を塞いで溜息をするから、僕も黙つて目を塞いで、其處等眞暗になつたんだ。

「あ、鳥影がさしたやうだから、ふつと、恚う顔を上げる時、兄きがね、見まい聞くまいの、猿は居ないけれど、いろ／＼ある額の中から見つけ出して、（おい、次郎。）と言ふから、見るとね小父さん。縮緬の押繪で、桐の葉の大きなのと、珠数なりに紫の花を綺麗に造つた繪馬があつた、生れた年月六日と日を入れて誕生日を書いてね、」願主、津田よね。」としてあるの。傍へ行つて見るとね、あゝいふ處にあるんだから、どれにもこれにも人の氣が籠るのか、皆活きて居るやうな繪馬の中にも、それは、眞物の桐の薫がしたよ。

兄きは近頃にない嬉しさうな顔をして、それから方丈へ行つて、障子の外へ手をついて、住職に、（あの、津田屋から、誰ぞ摩耶夫人様にお詣をする方がございますか。）つて聞くと、お爺さんの坊様が、

（あゝ、見えます。お米様といふ嬢さんが、

時々、また誕生日には、毎歳缺かさず拜みにござる。
然れば今日は其の日ぢや。()
と、指を折つて、急に待ちかま、へた顔をしたつ
け。

や、兄が勇むまいことか。(次郎来い！ 途
中まで出迎へて逢はう。) と言つて、手を引いて
駈出したんだ。

一筋路を山田の方へ、無憂寺十五町、と書いて芒
の中^{なか}に立つて居る、石碑の蔭^{かげ}へ二人で入つて、日脚^{ひあし}
を見て待つて居ると、日當りが、はづれた頃、向う^{むか}
の橋を渡つて、二人連で、少し急いで、來たのが其^そ
れなの。大分遅かつたものね。

僕は錦繪が歩行いて來るかと思つた。裾だの、袂^{たもと}
だので、枯草へ、ちら／＼花が咲いて、すつと僕^{ぼく}た
ちの前を通つたけれど、兄きは、聲も掛けなければ、
出もしない、僕の口を壓へるぢやないか。

行過ぎて了つたらうぢやないか。段々遠くなるぢ
やないか。えゝ、小父さん！。

其の時分に、漸々路へ出たつて爲やうがないぢや
ないか。そして、脊伸びをして、椿の花を取つちや
川へ流したつて何になるものか。

僕にも手つだへ、大きな花束にして、而して、流
さう。此の何んにも無い枯野の水へ、火の燃えるや
うな花が、路傍を流れたら、屹と目をつけて足を留
めよう。

其處へ行つて頼むつて言ふから、まだるつこいと
思つたけれど、兄きの言ふことだから、手傳つて、
燃え上るやうにして水ん中へ放したんだ。

松明のやうに枯草へ映るほど、ちら／＼と流れた
からね、むかうぢや遠くから立停つて、眺めて待つ
て居たよ。」

「おまけに、圓鬚に結つた、其のお供の方が、涼傘の柄で、花束をうまく水から掬つて、桃太郎の昔
 啞だ 小父さん。」

花で飾つた赤坊を抱いたやうに、嬢さんが手に据ゑたぢやないか。それだのに、兄きはまだ遠慮をして、遠く此方で見居るから、じれつたいつぢやないからね。」

耐へぬ次郎助！

「僕は此の空氣銃をもつて飛出して、二人を向うへ駈け抜けると、榛の樹にちゆつちゆ、ちゆつちゆ、雀が轉つて居たからね。（おい、一羽打落して見せようか、姉さん。）と、突然だしぬけに然う言つて遣つた。）」

彼が其の目を圓らかにして、お米の顔を斜めに見上げた事はいふまでもない——

お杉といふ年増の女中は、驚いた顔をしたが、お米は爪紅の透通る、花を捧げた美しい濡手を胸に、

薄紫の涼傘の、高島田に觸るゝばかり、つゝ愼ま
しやかに、物優しく、

(坊ちゃんぼつは雀すずめを打うつて召食めしあがるの。)

(否うん、食くふんぢやない。)

(それでは堪忍かんにんしておやんなさいまし。私わたしは、こ
れから摩耶夫人まやふじん様へおまゐりをするんですから、ね、
後生ごしやうですから、)

(何なに、其方そつちで欲ほしくなきや打うたないんだ。兄にいさんは、
姉ねえさんに其その花束はなたばを上げたから僕ぼくは雀すずめを打うつて遣やら
うと思おもつてよ。)

(此この花はなを、兄にいさん！ 貴下あなたの兄にいさんが、)

と思おもはず振返ふりがへると其その背後うしろに近ちかづいて居あた兼次かねつぐと
顔かほを合あわせた。椿つばきの花はなの紅くれなゐは、二人ふたりの中なかに燃もえたので
ある ー

「僕ぼくは、屹きつと、頼たのむことを肯きいてくれる人ひとだと思おも
つた。

だば鯨はせを釣つつて居あても、殺生せつしやうといへば見みたがるの

に、雀を打つて遣らうと言ふのを、留めたもの。そして堪忍して下さいつて、雀のはりにあやまるんだもの。まるで雀の神様のやうだから、僕は最う雀だけは打つまいと思ふんだ。

兄きがね、帽子を脱いで、引んまるめながら、一心に頼んだよ。

よく聞いて居てね。

花束を一寸戴いて、女中に渡して、涼傘を疊んでね。

（然ういふ内にも庄九郎が溶かして了ひますと取返しがつきません。あとのことはあとのこと、兎も角も庄さんの手から取つて貴下の方へ差上げませう。

お前行つて、かはりにおまゐりをして来ておく

れ。）と女中に話して、

（俵様のお兄様と、お前とは、腹のなかで、お寺へ行く野の途中、御一緒に成つたことがあると、私の母さんもおつしやつた。丁ど此の邊であらうも知れぬ。）とお嬢さんは、頻に其處等ニしたつけ。

僕たちも、何だか夢を見るやうだった。

（其のお方の御心配、今日は此處で失禮して、すぐには香合を借りに参ります、とお前、摩耶夫人様に申上げて、しるしに、其の花束を納めて来ておくれ。）と一寸目を瞑つて其方を拜んで、

（さあ、御一緒に。）と深切に言つてくれると、兄きがねえ。

（それではお言にあまえてお願い申しますが、お寺へは女中さんと一緒に私が代参に参りませう。次郎、お嬢さんのおともをして行け、お預り申したら、大切の品だ。氣をつけて。）といふから、錢砲を肩へかけて、僕は両手で握つて歸るつもりにした。

兄きは其處で、其の女中と行つた。僕はお嬢さんと、町の方へ引返したんだ。道々ね、何がお好きだの、何のつて種々兄きの事を聞いたよ。

お嬢さんが、金銀ぴか／＼の、庄九郎の店の硝子窓を覗いた時の騒ぎつたら。

家中總立ちだ。

庄九郎なんざ、がらりと開けて中戸から飛出しま
したぜ。

僕はね、ちよろりと向う横町へ隠れて居たんだ。

而してね、店の蒲團の上へ、お嬢さんが坐つた姿
を、遠くから硝子越しに透かして見た時は、何だか、
内の姉さんが、他家へお客に行つてるやうだった。

小父さん、眞個に良い人だぜ。

「

「ぞろ／＼送おくつて出でやあがつたから、僕ぼくは最もう些ちうと隠かくれて居ゐて、姉ねえさんが一人ひとりになつてから、ひよいと飛とびだ出して前まへへ廻まはつて、お辭じ儀ぎをしたんだ。

吃びつくり驚おどろしたやうに莞にっこり爾りして、（待まつたでせうねえ、思おもつたよりむづかしかつたの、姉ねえさん、喧けんくわ嘩わするやうにして預あづかつて來きたんです。

さあ、兎とも角かくもお持もちなさい。）と袱ふく紗さに包つむだまゝ渡わたしてくれた。僕ぼくは引ひ抱つかへたが、づツしりと重おもかつた。

（遊あそびに入いらつしやいよ、屹きつとですよ。

兄にいさん 兄にいさんに 自分じぶんの兄にいさん
にまたよく頼たのむと言いふのか、僕ぼくの兄あにきに宜よろしくといふのか、そんな事ことはかまはない。疾はやく父おとう上さんに見みせよ
うと思おもつて、すつ飛とんで歸かへたんだ。

其その晚ばん、父おとう上さんはね、小父おとうさん。

兄あにきと僕ぼくとを、二人ふたり並ならべて坐すわらせて、丁ちやんと膝ひざに手て

を置いて、

（よくしてくれた、おれの兒だ。いや、小兒に禮を言ふではない。こんな奴を産むでくれた、阿母に禮をいふのだ。）つて、喜んでほろりとしたの。急に元氣が出て、其の晩のうちに、扇屋の姉さんの詔へた、矢の簪が出来上る騒ぎだつた。

内へ持つて来て見たばかりで、そんなに嬉しがつた、千鳥の、其の、香合がね、それぢや壊されないで済むかつたら、然うは行かないぢやないか、小父さん。」

「いかにも、な。」

「翌日の午過にや、もう、庄九郎の處から、使のものが取りに来るんだ。兄きがね、

（父上が型を取つて置きたいと言ひますから、もうしばらく、晩ほどは此方から持て上ります、）つて歸したがね、いゝ加減なことを言つて、津田屋のお嬢さんの、とりなしを心待に待つたんださうなの。

むかうでもね、打棄つちや置かないんです。

暮あひに、昨日の、丸鬚に結った女中が来てね、門口で何か兄きに、ひそ／＼言つて歸つたつけ。高作の方が、旨くゆかないんだつて。何、大事の妹だから、そんなに叱られはしないんだと言ふんだけれども、千鳥を溶かして黄金鎖にする事は、どうしても止めようと言はないさ。

夜があける、すぐに又取りに来る、其の日はね、午頃また女中が来て、兄きに逢つて歸つたつけ。晩方に最う一度来て、今度は兄きを呼び出して、路地を抜けた田圃の處へ連れて行つた。月夜でね、小父さん、――其時はお嬢さんが来て居たんだ、頭巾を被つてよ。

否、僕は逢やしないけれども、兄きが土産をことづかつて来てくれたの。

そんなものは要らないんだ。（香合の話は、）
つて聞くとね、矢張、（不可い。）
おなじくらゐな黄金を買つて取りかへたらば、と言つてくれたさうだけれど、金子にして千圓上だと言

ふので、お嬢さんも弱つたと言つて鬱いたつけ。

其の夜よ。庄九郎の奴が、自分で、怒鳴り込みやあがつて、すつた、もんだ、汝、居候の弟子の癖に、父上を泣かせて祖母さんに手をつかせて、畜生、僕は幾度刀を引つこ抜いて、たゝつ斬つてくれようと思つたか知れやしない。

(あすの朝まで待つて遣らう、抱くとも嘗るともしやあがれ、あとはおいらが、自由にする。)
と疊を蹴飛ばして歸りやがった。

畜生め、面倒だ！

兄きや、婦人の手ぢや不可いや。薄鼻毛抜いて遣る、態あ見やがれ。其の晩は寝ないで置いて、冷飯で握飯を拵へてよ、丁と支度をして、學校へ行くふりをして、縁の下に突込んだいた過日遠足をした時の、草鞋まで持つて出た。嵩ぼるから箱は置いて、黄金の千鳥の香合だけ、引攪つて懷中へ入れて出たね。

此のさきの石碑のよ、椿の花を流した處で、下駄
ア脱いで突放した。なあ、小父さん、
と顔を見て

「盗坊だ。僕は盗坊を遣つたんだから、家へは最
う歸られないや。何處かへ、すつ飛んで行くんだけ
れど、大事なものを、また無くしちや不可いから、
しつかり摩耶夫人様に預けたんだよ、小父さん。」

「だつて口惜いもの。千鳥は母さんの名だし、父
 上さんが、然うやつて、一生懸命に拵へたものを
 打壊されるのは癪だからね。――扇屋の姉さん
 だつて、津田屋のお嬢さんだつて、命がけで心配し
 てくれるんだ。僕が盗坊になるなんざ、何でもあり
 やしない。」

よくね、わけを言つて、預つておくんないツた
 らね、摩耶夫人様、莞爾したの。あの、あの、右手
 がふつと動いたから、大丈夫だね、小父さん。小父
 さんに見つかつて大變だと思つたら、小父さんも、
 影法師のやうなもので、居るんだか居ないんだか知
 れないんだつて言ふから安心だ。黙つてゝおくれよ。
 然ういふわけなんだから、頼むぜ、小父さん。」

六部は深く物思ふ面色しつゝ、

「ものをも不言、ものをも不言、ものをも不言、

くなりけり。」

次郎助はついと立つて、尾花の中に包まれた、西日の色を、行方遙に打見遣つて、

「や、過日津田屋のお嬢さんと家の方へ歸つた時分だ。」

と不圖呟いたが、思はず、

「あゝ、祖母さんが待つて居やしないか知ら、
と我を忘れた風情で言つた。」

何とかしけむ、肩ふるはして六部は眼をしばたき、

「いや、よく分つたが、これ、」

と草鞋を擦らし、向き直つて、

「嚙、祖母さんが待つぢやらうな。」

「世話ばかり焼かすからね。僕なんざ、居ない方が可いくらゐなものだ。」

でもね、さしこみが持病だからね。其時は兄きより僕の方がおさへるのが上手なんだ。薬も何だ、僕がよく知つてゝ駈け出すんだがね、兄きは尻が重いから、

と言つて額を擦つて、

「また何だ。可いや、僕が居なけりや何うかすら。
小父さん、何だせ。これから路は遠くつても家へ歸
るんだと思ふと急ぐけれど、然うでないんだから張
合がありやしないや。暗くなつても内へ入るんなら
可いけれど、餘處ぢや何だか分らなからうなあ。や
あ、寒くなつて來やあがつた。」
と色氣なしに肩を揺つた、袴をもれた脚の状も見
るからに覺束ない。

「餘處つて、何か、旅籠屋か。」

「小父さん、」

と氣もない額をして、

「旅籠屋ぢや錢が要ら。」

「旅籠屋で錢が要れば、要らぬ處は何處にある

な。

「山中の辻堂か、お宮様よ、何處にでも、たゞ

で寝らあな。」

「御飯は何うするよ。」

「あの、本堂へ残して置いた、四ツ拵へて來た握
飯が未だ二箇残つて居るんだ、」

「翌朝は、」

「何處かで貰はあ、」

「乞食だな。」

「構はないよ。」

「はて、」

「盗坊をしたくらみぢやないか。最う人間の夥間ぢやない。なあ、小父さん。矢張、僕も、小父さんの其のすつ飛んだ鐵砲玉になつちやつたんだ。變てこな鐵砲玉だ、口利く鐵砲玉だ、はゝゝゝゝ、」

と投げ出した苦笑で、

「同じ鐵砲玉だから、一緒に連れて行つて貰ひたいけれど、山田の方へ行くんぢや駄目だ。僕は最家の方へは行けないから、」

「待て、己も先づ安心した。辻堂や宮で寝て、食ふものは盗むとでも言ひはせんかと、冷汗を流したに。どうせ人間の夥間ぢやない、乞食をするは嬉しいな、」

と手甲かけた掌を上げて、頂く如く賞歎し、會心

の笑、莞爾やかに、

「が、待てよ。家の方へ歸らないは分つたが、家の方から追つかけて來たらば何いうする。いや、それも親御や、兄妹でない、それ巡査がよ、警察からぢや。」

「遁げらい。」

「遁げる、はゝはゝ、遁がすものか。」

「然うすりや捕まつ了はあ。」

「掴つて、」

「懲役に行く分だ。何も僕は遁げかくれなんぞするんぢやない、すたゝ歩行くんだから勝手に掴へるが可いんだぜ。」

拳で尾花を拂つたのである。

「潔矣。」

いや、天晴覚悟ぢや、が、お前さんがつかまれば、其の肝心な純金の香合も、またそれなりに取返されよう。」

「そりや小父さん大丈夫だ。ちやんと摩耶夫人様に預けてあるもの。」

「しかし、しかしおかみでは唯措かぬぞ、厳しく詮議をしようではないか。」

「言ふものか、どんな事をしたつて僕が、それを、言ふものか。」

と決然として繰返していった、「言ふものか！」

六部は更めて合點して、

「いふな。己がそれ、鐵砲彈で、お前さんが言はんとなれば、他に知つたものは誰もない。また此の秘した處がよ。警察総が、りで搜した處で、五年や

十年で知れるわけのものではない。

就いてぢや、いくらほど路銀がある。」

「路銀、お錢か、小父さん、」

「第一番の事よ。」

「お錢は扇屋の姉さんに、いつか貰った、二十錢銀貨が一つあつたけれど、他に何にもないからね、先刻お賽錢に上げ了つた。」

「うむ、然うだ、其の扇屋の姉さんと言ふのは、それから何うしたな。」

「簪が出来たのをね、祖母さんが届けに行つて遣つたらね。病氣で寝て居たが、其の扇屋の別荘の方が静で可いから出養生に遣つたつて。幾らも次手があるから届ける、と言ふから、ことづけて歸つて来てね、其のうち見舞に行くといふんだけれど、こんな騒ぎだから、それなりなんだよ。」

「あゝ、氣の毒だな、煩つたか。」

と六部は太く動かされた色見えて、

「氣疾ぢや。鐵砲弾にならなければ可い。自分の思つてる男に頼まれた事が届かんで、おまけに今の話ぢや、お前の兄さんの居る前で、其の高作といふ奴に、抱き倒されるなぞといふ、チヨツ、可哀相

に、
と舌打した。

「一番、己が世話焼いて、此の葛籠の中へお前を入れてよ、まづ、譬ぢや。是なりに千鳥と一緒に神隠しもおもしろからうが、第一其の扇屋のから縛られるぞ。

兄御も親御も免れはせん。疑がかゝつては、面倒で、なか／＼霽れまい。

こりや、坊よ。

すつ飛ぶべき處でない。すぐに歸つて、名告つて出る。

これ、分つたか、親兄がたゞでは濟まん。其の高作とか言ふのばかりなら、妹さんがござるに困つて、

何とか方が附かうけれど、庄九郎といふ野郎め、まうけづくぢやから見遁すまい。な、唯品物が紛失した、預りものが失くなつたでは、しかも大枚大金目ぢや、申譯が立ちはせんわ。

名告つて出る、引返して名告つて出る、また、盜坊をしたものが、遁れおほせるわけではない。其處はお前さんも覺悟がある、分つて居るのぢや。

これから直ぐによ、よしか。

途中で巡禮の六部に逢つて、教へられたなぞと言ふまいぞ、何處までも一料簡よ。確りしろ、分つたか。

親兄が縛られる、と一言聞かや、顔の色を颯と變へて、足許から突上げるやう、目も身體も大ゆりに揺つて居た次郎助は聲も上づり、

「大變だ。警察といふだけだつて大嫌ひな父上だ。巡查が來ちや死んじまはあ、小父さん、分つた、むゝ分つた。」

と慌てる足に引からまる、枯草を蹂躪つて、拳を胸へ、早や駈足の構へをして、呼吸をはずませ、迂路々々する。

「何うした、」

「草鞋よ。」

「打棄つて置け、」

とすつくと立つた、六部は荷ひ綱を、づゝと右左、胸を割つて扱きながら、笈摺高く揺りかけたり。

「後始末はして遣るぞ。」

「おつ、」

といふと、靡く尾花を刎ね越ばかり、花桐の影のやゝ濃くなつた、月の下を衝と離れて、西日に赫と面も觸らず、野路を駈足、一二、一二い。

噫！ 可い處へ

次郎助。

俵の家は果せる哉。此の世の事とは思はれず。牛頭馬頭の刑事巡査、二人まで踏込で、人心地もない平兵衛を引立てようとする處、兄は庄九郎に捻ぢ伏

せられ、
お米よねは高作かうさくに引据ひきすゑられ、
祖母そぼは疊たみにひれ
伏ふして、
戸外おもては黒山くろやまのやうに人ひとだかり。

「いけ強情な小僧、まだ吐かさんか、猿松め。」
 刑事が一名、中折を冠つたまゝ、石持の黒の紋付
 で突立つた。足許に、次郎助は水浸。丸裸の手足を
 捕縄でぐる／＼と括り猿、ころりと板敷に轉がした
 は、
 町警察署の夜十時過の刑事部屋。

裏の空地に引出して、井戸端で水くらはし、引摺
 つて歸つた處。もう一人は茶の外套の腰痛で、薄汚
 れた手拭でまだ雫の切れぬ指の股を、擴げて、ぐい
 ／＼と拭きながら、

「頭を殴りや石頭、土性骨の太さつたらありやせ
 ん。盗賊をしたものが、盗賊をしたといふんぢやか
 ら、こんな確な事はないと、勝手な熱を吹きやあが
 る。」

「盗んだものを隠した處を、白状すりや取上げる

たらうと、我々に向つて問ふに至つては、狂氣の沙汰だ。」

「自分が欲くつて盗んだものを、誰が返すものか
に至つては、ほざいたりな」

「どんなことをされたつて自分からは言はんから、
聞く隙に伊勢中捜せ。あけ方に盗んだものぢや、一日に百里は飛ばれん。小兒の足で歩行かれる。ぐるりとまはつた環の中にあるぢやらう、と天狗に教はつたやうな事を吐す、小僧々々、」
と怒鳴つて、

「何しろ、汝一人の料簡で無いことだけは確かだな、屹と入智慧をした奴があらう、うむ、小僧。」

「親仁か、兄哥か、それだけでも言へ。些とは樂をさせて遣る。これなり強情を張りやがると、緊め上げて血反吐をはかすぞ、何うだ、小僧、何うだ。」

と水だらけの肩を揺ると、揺られたまゝ頭を掉つた。が、餘りの苦しさに聲も出ず。我家の店の格子さきを、黒山に蔽ひ包むだ、人立を、空氣銃で攪廻

して、泥足で躍り込み、平兵衛の腕を捉へた、此の
刑事を突き放して、盗つた／＼盗つた／＼、御用を
反対に繩にかゝり、引立てられた横町の曲角で、人
目も厭はず足袋跳で縋つて出た、津田屋のお米が、
心弱く、顔に袖を當てたのを、見返りながら、何う
だ、といつて煙草屋の店看板、學校の行きかへり、
遊びの出入り、母親の懷中から伸上つた、朝晩馴染
の金時に、ぐつと突出して見せた腕つ節も、繩目に
晴れて意氣地はない。

突立つたのが一段と荒らかに、

「頭を掉るな、頭を掉るな、頭を掉るな。まだ、
此の業坊。き、き様、握飯、握飯を持つて出をつた
といふが、誰がこさへた、うむ、祖母か、祖母か
よ。」

「應とでもいつて見る。直ぐにぴしりとお手當で、
祖母を連累のつもりであらう。」

次郎助はかすれた聲で、
「獨りで、獨りで拵へたんだい。」
と口惜しさうに呻いていふ。

「馬鹿を吐せ！ 汝、何一人で出来るものか。」

次郎助は倒れながら、痛さと寒さと、切なさに、
眉も口も、一緒に縁でかぶりつけたやうな澁面を、
物凄き世の終の如き、陰々とした燈に打仰向き、

「お前達ア、お前達ア母上があるのか、伯父さん、
母上を持つてるかい。」

「何だと、」

「何を。」

「持つてりや可いな、持つてりや可いな。母上が
亡つて見い、祖母、祖母さんがさしこみの時なんか、
僕がお飯だつて炊くんだい、お、握飯ぐらゐ出来な
くつて、出来なくつてよ、」

と聲が消えて、がつくり板敷へ俯伏した。

上からじろりと是を視め、

「餓鬼め、餘程草臥れたらしい。」

「最う一呼吸だ、此處を突込め、」

「こら！何處だと思ふ、寝ちや成らん。」

と立蹴たちげにハタと蹴けると、向むかうへ轉ころんで、あつと言い
つた、悲鳴ひめいも終をはらず、絲いとのやうな聲こゑを絞しぼつて、是こは
什そ麼も、媚なまめしい婦人をんなの姿すがた。狭せまい中なかにも暗くらい灯ともしび、明あかりの屈とゞ
かぬ片隅かたすみに、長襦袢ながじゆばんの裾すそを長ながく、崩くづるゝ脛はぎを包つゝまう
と、羽目はめにこらへた、島田しまだが亂みだれ、うむと反そつた弓ゆみ
形なりの、乳ちのふくらかな胸むねを絞しぼつて、床ゆかに亂みだれた緋ひの
扱ししぎ帯おび。

刑事けいじ二人ふたり「驚おどろいて、

「や、別嬪べつびんが目めを廻まはした。」

「何どうしたんだ、何どうしたんだ。」

まぼろし

四十二

「はい、お扇も、飛んだ災難でござんしてね。

否、此間から、つけが悪いでございますよ。些とね、鹽梅が悪くつて一二三日一寝たもんですから、こんな處では、まあ、貴女お上んなさいまし、」

染めた齒の美しく、愛想の可い、扇屋の女房は、胸より高き火鉢の前、粹な半纏のうしろに巻いた、扇ぢらしの暖簾を透く、中庭に花はないが、青々とした眉の痕、色の白にくつきりと水際の立つた婦人である。

門から通庭の横帳場。京間の十疊から一段低い、磨き上げた櫺の框に、斜めにお太鼓の腰をかけて、空色縮緬の背負上げ、ふつくりした圓鬘の、品の可い中年増は、津田屋の女中頭お杉であつた。

「さあ、まあ、此方へ貴女、」

それと流眊をのみ込んで、小さな手で先刻から女房の肩を叩いて居たが、客が来たので傍に差控へた、禿の千代が心得て火鉢の向うへ、すつと直して、

「何うぞ、お敷き遊ばして、」と針線を鳴らすに似た、芝居の子役の聲を放つ。

「あゝ、何うぞ最う、」

と慇懃に、膝で身を廻して上へ上ると、女房が膝を落した緋の胴拔、傍に針箱などあるのを見て、

「お仕事でいらつしやいますか。」

「否、六十の手習でございます。」

と白やかな腕を肩へ、物指で軽く背のあたりを叩いて見せ、

「朝からこんなぢや仕方がござんせん。」

「結構でございます。」

と先づ挨拶する。

「だもんですからね、」

と舊へ返つて、

「こんな處ぢや、あの妓が、おち／＼寐る事も出
来まいと思ひましてね、寮と言ふでもないんですが、

些と離れた處がございますもんですから、閑靜な方がよからうと、其處で、お扇を出したのでございます。

もう、私も薄氣味が悪うござんすから、豫々番のものに斷つて置くんですけれど、否、初中終なんださうで。ついね、あなた、町家離れた處で、さしまひが無いもんですから、御近處の方が可い寄場にして、賭博をなさいます。

番のものも知つたお顔なり、然、う阿漕にも言へないと見えまして、其の晩、宵から、十四五人で、何だつたさうですよ。

つけられたと見えまして、あの通り、お手當があつたんでせう。

嵐に木の葉で、あなた、各自が、ばら／＼大騒ぎをして逃げようとなさる。お一人がね、慌て、何ですつて、逃げ場に困つて、奥の小座敷へ駈け込んで、お扇が寐て居ました夜具の中へ潜り込んで、緊

乎抱付いたんでございますとさ。まあ
。

と口許を蔽うて俯向き、

「お扇が吃驚して、あなた、厭ですよ、かなんかで、だらしない姿でずり抜けて出た處を、蹈込んでおいでなすつたから耐りません。娼賣をしたと間違へられて、可哀相に、すぐに、ぞろ／＼拘かれたんでございますつて。」

何、一檢べで、わけが分りましたもんですから、何は措いて、つかひがみや何かさし入ものをと思つて、駈けつけました。直ぐ其の車で、其の夜、明けない中に歸つては來ましたけれど、長襦袢一つで、多勢に見られたつて、恥かしがつて、また病いんでございます。

矢張、浅黄のを着て居ましたんですがね、一體、あの色は恐ろしく、あの娘に肖合ひますけれど、性に合はないと見えまして、いつぞやも、親類の從兄の方がお見えなさいました晩も、無理に亂暴なお客

様に連れられて行つて、

と言ひかけて、思はず、口をつぐんだが、そらさ
ず微笑み、

「誰方も御酒の上は然うですがね、當人が優しい
んですから、些との事にもおびえるんですもの、酷
い目に逢つて歸つて來ますし、
また今度
でせう。」

三度目がないやうに、と思つて、寢衣にね、此の
燃えるやうなのを、私の少い時のを、薄綿を入れて
着せて遣りませうと思つて。」

「えゝ、居ますとも。最う寮の方は厭だと言つて、警察から直ぐに此方へ戻りましたの。泣いてばつかり居ましたがね、寂しい、心細いつて、甘えますから、昨夜は一晚、私が母様になつて、抱いて寝て這りました。

夜中、何か話をして居て、あけ方ね、やう／＼笑顔を見せて、それなりすや／＼寐ましたがね、朝起な妓なんですが、碌に此の中眠りませんから、まだ就寢で居ますかも知れません。

何の、貴女、ずん／＼いらつしやつても構ひませんが、お化粧が何うの、髪が何うのと、きちやうめんな人ですから、一寸然う申して遣りませう。千代や、

「はい、」と直傍で、高調子。

「一寸、姉さんの許へ行つておいで。否、もう目が覚めて居るにや覺めて居ますよ。お客様だつて、

津田屋様の女中さん

「と言の中に、横手の段階子を鍵の手に、ちよろ／＼と千代は駈上る。」

「お杉さんでいらつしやいましたね。お杉さんだ

よ。」

追駈けて女房艶麗に指揮する。

「はい、」と引張る。

旅館 津田屋の女中頭が、

「杉ではお分りになりませんかも知れませんよ、

お嬢さんからお使とおつしやつて下さいまし。」

早や階子段には返事がなかつた。

女房が心得て、

「可うございますよ、分りますとも、毎度御鼻屑に難有う存じます。」

「此方こそ、お女房さん、お互様でございます。」

「また、唯今は、結構なお土産を、お扇が嘸喜びますでございます。」

と女結びにしをらしく、水引をかけたのを、床し
さうに一寸戴き、茶棚の上にさし置いた上包を、仄
かに透くは眞綿なるべし、薄紅。

「お嬢様は、御機嫌でいらつしやいますか。」

「唯、否、別にお身體は、何ういふこともおあんなさいませんけれど、此頃なんでございますか、眞に心配事がお出来なさいまして、矢張ね、碌々お寐りませんのでございます。それで心がお弱りなすつたんでございませう。今朝ほど、あなた、お佛壇へ、御自分で御明をお上げなさいまして、拜むでいらつしやいましたのは、私が存じて居りますんでございませう。」

しばらくして、お廊下を通りかゝりに見ますとね、傍にございました針箱に袖をかけて、窮屈さうに轉寐をなすつていらつしやるやうですから、お搔卷を、と思つて密と入りますと、

（お杉かい、）とおつしやいましてね。

其處そこいら御覽ごらんなさりながら、

（誰方どなたか、お客様きやくさまが、今其處いまそこをお通りとほりなさはしなかつたかい、美しいお女中ぢよぢゆうの。）

（否いゝえ、誰方どなたも、）と申しまをますとね。

（あら、彼處あそこへ居ゐらつしやるぢやないか。）

と、ふら／＼と立たつて、廊下らうかを駈かけ出して、戸外おもての方ほうへおいでなさいましたんでございますよ。

其處そこへ何なんでございます、から／＼と車くるまをつけて、若旦那わかだんなの高作様かうさくさまが、可いい御酒機嫌ごしゆきげんでお歸りかへでございましてたんですが。

お縁側えんがはから、恚いかう佛間ぶつまを斜はすつかひにお通りとほりなすつて、廊下らうかの外そとの方ほうへね、お下召しためしなんでせう、ちら／＼淺黄あさぎが見みえましたつて。」

「へい、」といつて女房にようぼうは、つぎさした急須きふすの手てを忘わすれて聞きいた。

「確たしかに、扇屋あふぎやさんの、お扇せんさんだつた、と仰有おつしやるのは、豫かねて寫真しやしんなども見みて御存ごぞんじですし、それに、何なんでございます。丁どお扇せんさんが其その飛とんだ濡衣ぬれぎぬ

をお着なさいました晩、些と様子がございましたね、御心配と申しますのも詰り其の事なんです、あのお役所のまはりを、貴女、うろ／＼していらして、霜のやうな月あかりに、此方のお扇さんが、車に召して無事にお歸んなさる處を、お見受け申した、と言つて、着ていらしたもので、色合なんぞ、よくお覚えなすつていらしたもので、大方、それがちら／＼したんでございませうが。

お佛壇の前ですし。

「屹と、あの今度の心配事を、お扇さんに相談するやうにと言ふおしらせかも知れないから、私直ぐに行きたいけれど、兄さんがお歸りだから、此處でゞもつかまへなけりや、また何時お歸りだか分らないから、兎も角も、直ぐに、私に、伺つて来いと言ふ、おつしやりつけでございました。」

四十四

「原はと申しますと、其の若旦那のお心一つで、何うにも納つたんでございますけれど、お嬢さんが、あなた、何んなにかねえ、それは、お可哀相なやうにお縋りなさいましたか知れませんが、どうしてもお肯きなきらないもんですから、はい、お扇さんは無事にお歸りなさいましたけれど、お嬢さんが然うやつて、夜通し氣をお揉みなさいました方のお兒は」

「ですつてねえ。」
と女房は頷いて口を入れた。

お杉は、思はず膝を動かさし、
「あなたも御存じで、」

「知つて居りますとも。大した金目のものだから言つて、大層な評判でございますもの。お扇は身内の事ではあり、知らないことはないんでせうが、何んにも申しませんから、私もね、機を見て居るんで

すがね、何ですつてね、到頭送られたんですつてね。」

「え、まあ、どうしませう。眞個に手後れになつたんですよ。若旦那さへ納得して下されば、何うにかなつたんでござんせうのに、何しろ滅多に内へはお歸んなさらないほどですから、仕やいうがないのでございますよ。」

おかみさん、

不圖心づいた状で、

「それでは、お扇さんに申して可いか、何うか、分りませんねえ。」

「否、

「でも貴女さへ控へていらつしやるほどですもの、御身體に障りませう。然ういたしましたら、唯お見舞だけにしても宜しいのでございます。」

「否、親は泣寄りです。お扇も考へがありませんが、義理を立てて私へは遠慮をしますから、――ちやうど可うございます。お嬢さんから御相談な

すつて下さると、私も筋道がつきますから、及ばずながら、また何うにかお夥間にして頂きます、まあ、兎も角もお逢ひなすつて下さいまし。

然ういへば、何うしたらう、千代や、」

と言ひかけて、火鉢の縁に凭れかゝつて、打仰いで覗くやうにすると、着ものゝ端。話に氣を取られて心付かなかつた、廣い階子の眞上の段に、千代は搦みついたやうになつて、熟として居るのである。

女房は吃驚して、

「千代や、千代や、」と調子を上げた。

「はい、」

と言ふと向直つて、一段づゝ傳ふが如く、片足伸ばしに落着いて、平氣な顔で下りて来る。

「どうしたんだね、」

「あの」

「姉さんは、」

「えゝ、あの、」と目を瞠つて、裾へ

棒をつけた形也。

「行つて来たのかい。」

「否、」

「あら、此人は、」

お杉も振向いて不審な顔。

禿の千代は唾を飲んで、

「あの、もう起きていらつしやいます。」

「何うしてさ。」

「私、然う言はうと思つて、二階へ上りますと、あの、ずっと向うの奥の方の、廊下の曲角の處に立つていらつしやるんですもの。」

「お扇がね、」

「え、松吉姉さんのお部屋の前の許に、此方へ向いて、そして、あの、此方へ歩行いていらつしやりさうなんですもの。」

「ぢや、誰だか、」

と女房は氣もなくいふ。「然うですよ、違ひま

せんわ。」

ちよこんと膝を支いて、呼吸をして、

「いつもの淺黄の、あの、長襦袢で、暗い處に、」

「えゝ、」

と言ふと、お杉は思はず天井を仰いだのである。

女房も、齊く二階を高く、暗いのがうつゝたか、
陰気な顔して、火鉢に手を支き、がらんとした店の
格子さき、違つた浮世を歩行くやうな、戸外の人通
を急に熟と透かしながら、

「それで、黙つて見て居たの。こんな商賣の階子
段にや立留まるものではないと言ふのに、厭な兒だ
よ、悪いお前の癖なんだよ。」

四十五

とばかりで、言葉が途切れて、寂とする。襖がす
れても響きさうなに、二階をかけて、何處にも何ん
の氣勢もなかつた。

お杉が、

「廣いお住居でございますねえ。」

と要らぬことを思はずいふと、

「先刻から誰も來はしませんでしたか。」

女房が行違ひに問ふのであつた。

「魚屋さんが一人、ずっと奥へ通りましたよ。」

「あゝ、然、うですか、もうそんな時分、」

と言ひかけて、今見つけたやうに慌しく、

「千代、見て來ないのかねえ、お客さまが待つて

いらつしやるぢやないか。」

「ようございますよ。」

「さあ、何をして居るんだね。」

「あら／＼、」

暖簾のれんから中庭なかに越しに透すかした千代ちよが、
「裏階うらばしこ子から降りて入いらしつてよ。」

「何處どこへ、」

と振返ふりかへると、何なんにも見みえず。

「嘘うそだよ、誰だれも来きやしないぢやないか。」

禿こも妙めうな顔かほをした。

「だつて、今いま淺黄あさぎの褌つまが、ちら／＼して見みえたん
ですもの、廁はやくりでせうか知しら。」

「何をなにいふのだね。」

「私わたしも些ちつとも見みかけませんよ。」

とお杉すぎは頻しきりに四邊あたりを二みまはす。

「此この兒こは、近視眼ちかめなんですよ。」

解とき得えたり、とはじめて笑わらつて、

「近視眼ちかめの癖くせに遠見とほみをするんです。さあ、行いつて

おいで、疾はやく、」

「だつて、」

と疊たぐみに指ゆびでまる／＼をする。

「恐こはいんですもの、私わたし、」

「何がなに恐こはいのさ？」

「私、私、いつかもお扇姉さんが彼處に立つていらつしやるのを見たんですもの。」

「當前さね、お前、一つ内に居るんだもの、何處にだつて立つて居るのを見ようぢやないか。疾く、さあ、」

禿は漸々納得して、むず／＼しつ／＼、立ちは立つたが、此方を盗むやうに見い／＼、何を忍ぶか、拔足で、そろ／＼と段の下。行つたと思ふと、莞爾して、

「そら御覽なさいまし、姉さんが入らつしつたではありませんか。」

「何處へ、」

「一寸、お佛壇の前へ、」

「え、」

「あら、暖簾の下に立つてよ、横向きに、あれ、女房さんを熟と見て、」

二人は頭から慄然とした。

「あれ、莞爾してさ、人の悪い、お扇姉さん！」

と金切聲でばた／＼と駈け戻つて、引掬へる勢で、
確と暖簾につかまつたが、何にもないので、トボン
として、くる／＼と二つ廻る。二人はハツと身を開
いた。

途端にトンと幽な音、裏階子の下、廁の前へ、女
の姿が膝を支いたが、これは紫の矢絰で、白粉の濃
い若代である。

「あなた、」
と言つてすつと立つた、女房の聲はかはつて居た。

「さあ、御一緒に、」
半纏をはらり脱ぐと、ずり落ちる引つかけの縷子
の帯を、うしろ手に引上げながら、

「千代、松ちゃんにすぐ来ておくれと、いつとく
れ。」

言ひすてゝ、暖簾から佛間を突切る、裾はら／＼、
足も空でお杉が續いた。裏階子の下で、其の若代の、
色の蒼ざめて震へて膝行るのを一目見たまゝ、つか

ノ、と走り上つた、上り口で一寸覗いた時、下なる若代は、手水鉢に身體で縋つて、仰向けに柄杓を被つて、ぐつと飲むと悲鳴を上げた。

「大變ですよ！」

既に遅矣。前に音信れたのはそれであらう、秋草の一枚襖が、左に開いて、懐しいお扇の姿は、島田の根をがつくりと、廊下へ半身背を見せて、うしろ向きになつて居た。香の煙の立迷ふ、柱にかけた姿見に、恍惚とした笑顔が寫つて、きらりと咽喉に矢の簪、唯見ると、ぱつちりと目を開いた、と思つたのは氣の迷、結へた膝を柔かに、臆て女房に抱かれたのである。

「夢ですなえ。」

と倒れ込んだ。松吉の手に一通それは主婦へあてたので、別にお杉の手に一通、お米様としたのがあつた。

四十六

一通のふみを今読み果て、
地方裁判
所豫審判事、東條六郎氏は、無言で、それを、座の
傍に侍した令夫人松子の手に渡したのである。

「もとの通りに、」

と言靜に。

「はい。」

と夫人は心得て、優しくする／＼と巻き戻した。

細く美しき女文字の、此の書院のやうな大廣間、
書齋と居間とを兼ねた一室に、新しく炭の薰る中を、
唯絲遊の如くすら／＼と浮出で、處々あはれに墨
の染んだあとには、幻の蝶の立迷ふ状に、しばらく賢
夫人と明判官の、袖に、袂に、縋るのであつた。

巻きながら、夫人は竊と主人の顔を伺ふと、常の
如く沈着に、常の如く森嚴に、はた常の如く、こゝ

に其の日の新聞を視て餘念がない。

衣服は不斷に着換へたばかり。法廷を退けて此處に端坐して、恣く新聞紙を一讀するが例なのである。

巻き果てるのを直ぐに認めて、新聞を傍へ。片手を膝に、黙つて長く差出した右手の掌へ、夫人が其の一通を捧げたのを、座右の唐机の上に置いた、薄紅色の状袋に衝と通して、再びもとの机の上。

火桶に片手をかけた時、夫人は——熟と——ものいひたげな目で主人を見た。

冷靜な音調で、

「松、」

「はい。」

「小兒が欲しいな。」

「」

餘り唐突であつたので、夫人は何んにも言はなかつた。

「あれば、苦勞だ。」

「といつて、静に腕を拱きつゝ、

「お前は、讀むだか。」

「うかゞひましてございます。そして直接にまた
委しい話も聞きました。實に、可哀相でございます。

旦那様、

「と何か言はうとするのを、遮つて、

「誰が来た、誰が此のふみを持つて来たかね。」

「旅館の娘でございます。」

「津田屋といふのか。」

「唯、然やうでございます。」

「差置いて歸つたか。」

「否、」

「此の（否）に力を入れて、

「お歸りをお待ち申して居ります。お叱りを蒙り
ますか存じませんが、御免なさいまし、待たせて置
きました。」

「と思はず頭を下げらるゝ。」

「此方へ、」

「呼ぶが可い。」
とばかりで、再び新聞を取り上げた。

人をも呼ばず、夫人みづから、急いで立つて、やがて襖を。

敷居際で猶豫ふのを、背後に夫人が附添つて、押進めて入るゝなりに、おのづから力が入つたので、おろ／＼しながらお米は、薄お納戸地に、白茶でこぼれ梅の小紋縮緬、對の下がさねに、藤紫の半襟、黒繻子の紅の、もみぢを織つた繻珍の帯お太鼓に、紅入友染の背負上きりゝとした、細腰をなよやかに三指をちゃんと支いて、座につくとゝもにひれ伏した。

恐怖と、羞恥と、悲哀と、はた唯一條の願ひの絲に、取継りてぞ打震へる、島田の丈長ひら／＼と、鬢の緑の色深き頬のかゝりの白粉も、偏に身躰のやうであはれである。

判官は無造作に、

「さあ、ずつと、」

「あなた、お進みなさいまし、」と言ひながら、
二人の間を結ぶやうに、座を引緊めて、よき處へ。

「何か、貴女は親類か。」

と突然つかぬことを問はるのである。

直ぐには聲も出でざりし、お米のうつむいたまゝ
なのに、繰返してまた、

「俵の親類か。」

「はい、咎人の姉でございます。」

お米は内端ながら正しくいつた、
揺めく銀のうしろざしは、お扇の記念の結び雁金。

四十七

最愛いときかな、あるがまゝかきすに昇据あがゑて、五十鈴川いすずがはの水清みづきよき、神かみの緑みどりの樹この間まにも移うつし植うゑま欲ほしき美うつくしく氣高けだかき花はなの、自みづから、（咎人とがにんの姉あね）と名告なるにこそ、心こころの裏うらちの推量おしはかられて、豫あらかじめ其その情なさけを知しつた令夫人れいふじんは、座ざの後うしろに物澄ものすんだ、縁えんなる鉢植はちうゑの蘭らんの香かの、そゞろに身みに染しむ思おもひがして、背そむいて涙なみださしくまるゝ。

其その、一言ひとこと、太いたく、判官はんくわんの胸むねにも響ひびいたらしい氣け振りであつたが、しばらくして、火桶ひをけを手許てもとに引繞ひきめぐらしつゝ、

「幾歳いくつか。」

「はい？」

と物怖ものおぢしながら、誰たれの年としか、問とひ返かへす風情ふせいして、纜わづかに其顔そのかほを上げたが、襟可懐えりなつかしき紫むらさきの照添てりそふ雙さうの瞳ひとみの露つゆは、清きよらかに且かつ涼すずしく、人ひとを動うごかすものであつた。

夫人ふじん傍たはらより、

「誰たれの

「なんでございます。」

と取次いで尋ねられた。

「其の、」

「貴女、幾歳におんななさいます。」

と夫人はしとやかに向き直つて、

「十九になります。」

と又差俯向く。

「兼次は、」

「二十でございます。」

いざ／＼、聲の低からば、取り次いで參らせむ。

聞くと眼射を令夫人に、

「支干は？」

「辰に

卯

ですか、

然やうでございます。」

「年紀ごろも似合ひぢや。」
「と幽に笑を含みた

まひ、

「其は可し。何か、貴女、此の遺言状の通り、死
體は其の願のやうに、叔母
といふ人の墓

へ、一緒に葬るやうに計らつたかね。」

「あの 何より先へと存じまして、夢見
て居りますやうな中を、其ればかりは、直ぐに、
と、切々に言ふのであつた。」

判官は言正しく、

「其ばかりぢや。何處へ行つても誰が何うしても、
此の遺言の中に、叔母、其の千鳥といふものゝ墓に、
一緒に埋めて、といふほかに、出来る事は一つもな
い。」

だから、よく考へて、よく考へて、

と言はるゝ下に、お米は唯其の手を内へ支へかへ
たるばかり、身動きさへもしないのである。

「最う恚ういふことを言うて来てはならんよ。そ
れから、貴女が其の咎人の姉ならぢや、兼次といふ
のとゝもに、平兵衛は親ぢや。」

昨日も其の平兵衛が、自身にかへて、被告の少
年が赦して欲しいというて、私が勝手口へ来て、ど
う諭しても立去らん。其内姿が見えなくなつたのを、

歸つたと思つて居ると、夜中にまた書生が見かけた、裏門の地に手を支いて泣いて居るのぢや。

奥が見兼ねて、内へ連れて入つて、泥などを拭いて遣つて、車夫に申しつけて送らせたが、些と取逆上て居るかのやうに見受けられる。

如何にも不便ぢや、が、法は枉げられん。いたしやうがないではないか。

其のくらの事は分るぢや。よう心得て、其の兼次と一緒に、氣をつけてあげるが可い。ふら／＼歩行いてまた怪我なぞをさしてはなるまい。

歸つて心得ちがひのないやうにするのぢや。

遺言状は預り置く。」

いふだけの事をいひ果て、頼の綱を切つて棄てた光景に、お米は耐らず激したか、両手を支へた肩のあたり烈しく震へると、颯と血の上つた面を擡げて、

「旦那様

といふ一聲も、舌の強るを、令夫人がいひ添へて、

「貴下。」

「不可ん。」

と嚴として、夫人にいはれたを聞くと齊しく、お米ははつと泣き伏した。

「連れて行け、連れて行け。」

口早に、

「松、お前から、よういへ。」

殆ど命令的に言ひ切られたので、止むなく立上つた夫人さへ力なげな状であつた。お米は肩を抱かるゝばかり夫人の手に縋つたのである。

しるしの松

四十八

黄金の香合、千鳥の作人、無慙也、俵平兵衛。
廣き額の皺深く、房やかな眉の顰んだ、顔の色尋
常ならず、紋羽の襟巻胸に解けて、羽織も着ず、跣
足なる、風采も物狂はしく、生れて以來、一處に鑿
を凝視めて、据れる瞳の、何事ぞ、きよろ／＼と、
淺黄の色の果敢なく消えた、お扇の亡骸横はれる、
土の色こそ新らしけれ、幾千代かけて契りけむ、千
歳の苔の處々、塚の俤埋もれ果てぬ、千鳥の墓を、
松を潜つて、うろ／＼幾めぐりするのである。

「慈母、慈母、申譯がない、どうするぞ、どうす
るぞい、次郎坊は縛られた、縛られた、慈母。
何んで死んだぞ。何んで先へ死んでくれた。

主が居たら、息災で居たらばな、こんなことには
ならんのぢや。

どうにもならんわ、どうかしてくれんのかなう、
慈母よ、次郎坊主は縛られた。

巡查じゆんさがの、腰繩こしなはをつけたわい。牢らうに入はいつて居ゐて懲ちやう役えきに行くゆといふわ、何なんのこつちやい、何なんのこつちや、何なんのこつちや。

申譯まをしわけがない、あゝ申譯まをしわけがない、平兵衛へいへゑが心得こころえちがひぢや。

心得こころえ違ちがひぢやない、心得こころえ違ちがひぢや、矢張やつぱり心得こころえ違ちがひかい、うんにや心得こころえ違ちがひでないわい。

侍むかしは義ぎのためぢや、女房にようばう兒ごも忘わすれるわ。職人しやくにんは職しやくのため、女房にようばう兒ごも忘わすれるわ、義ぎのためぢや、職しやくのためぢや、次男じなん小僧こそう惜をしうない、惜をしうない。――
然さうは行ゆかん、可愛かはいいわい。

これ、私わしがやうな、私わしがやうな、平兵衛へいへゑのやうな意氣地いくぢなしに、あんな兒ごは出で來きんのぢや。慈母おつか、主ぬしが兒ごぢや、慈母おつか、主ぬしが兒ごぢや。

主ぬしが兒ごを、主ぬしが兒ごを、盜坊どろぼうにして、濟すまんのぢや、申譯まをしわけがないのぢや、堪忍かんにんさつしやい、堪忍かんにんさつしやいよ、堪忍かんにんしてくれ。くれるか、くれる。くれるといふかい。くれてもなんにもならんわい、次郎坊主じろぼうず

は牢から出んわい、暗い處を出ては來ん。

兒を暗い處へ遣つて、私が日を拜んで何んになる。

はあ、お月様か。」

うろ／＼と定まらぬ、瞳に仰ぐ墓の夕月、しるしの松に淡き影、烏の色の黄昏に見えずなり行く點灯頃、里遠ければ、螢かと思ふばかりの燈も見えず、低く流るゝ傍の小川、やがては星が映るであらう。

「あゝ月か、世は暗ぢや。私が暗ぢや、暗へ行くのぢや。慈母、主も輝け、死んだらば、私も光つて、鬼火合はせた明でな、次郎坊が暗を照らして遣るのぢや。」

「もし。」

とばかりで、左右なくは絶りもならず、留めも得せず、おろ／＼、平兵衛が塚の上を兩手で筆る背後の松に、月の羽衣かけたる状に、姿を見せたはお米であつた。

平兵衛が土を掻い掴む、力餘つてよるめくまゝに、

腕かひなの下から差覗さしのぞくやうにして、

「もし、何を、何をなさいますの。」

と、いたく急せいた風情ふぜいがある。

それでも夢中むちゆうな袖そでを引ひいて、二三度竊どそつと引ひき動うごかすと、忽たちまち愕然がくぜんとして兼長かねなが、手てを空そらさまに釣つつて、

「はあ、これは。」

と、又またきよと／＼。

「どう遊あそばしたので、どうなすつたの。」と容體ようだいを豫かねて知しれば、病人びやうにんに齊眉かしづくやう、幼兒をさなこをすかすやう、深切しんせつに且かつ物優ものやさしく、平兵衛へいべゑは以もつての外見ほかみわけ分けがついたか、慇懃いんぎんに、

「はい／＼、これは何處どこのお嬢様ぢやうさまか姫様ひいさまか存ぞんぜぬ。あゝ、お美しい。何なんと、お嫁入前よめいりまへ、出世前しゅつせまへのお身體からだで、我等われら如ごとき、我等われらづれ、恚かやうに下り果はてた人間にんげんに、勿體もつたいない、怪我けがにも手てを觸さはるぢやござらぬ。」

と、これも小兒こどもを諭さとすやう、おのづから眞情まごころの籠こもつた言ことばも、思おもふ男をとこの親おやならずや、お米よねは直すぐに胸むね一杯いっぱい。

四十九

片手を袂に縋りながら、お米は右の襦袢の袖、見えないうやうに涙を拭ひ、

「何をおつしやいます、勿體ないとおつしやつては、私に罰が當りますよ。貴父、あなたは兼さんの父上ではありませんか、ねえ父上。」

月の下なる其の姿、月の都に召さるべき、月恥かしき身を以て、前にみづから咎人の姉と名告つて憚らなかつた娘の、此のあはれなる平兵衛を、父と呼ぶに何かあらむ。一心に思ひの籠つた、含み聲の内端なものも、骨髓に入つたのと覺しく、平兵衛はじめて瞳を定め、危みながら差向けた、お米の顔を熟と見て、

「父爺とおつしやる、父様と、や、氣が違はれたか、飛んでもない、私がやうなものに、そんな、そんな娘のあるわけはござらぬがの。」

「貴下こそ。」

おん心狂へるを、とお米は思はず聲曇らし、
「氣が違ひも何んにもいたしません、父上、あなた
の娘ですよ、米ですよ、嫁でございます。」
と言ひさして、顔の色は蒼うなつた。

兼長は、据ゑ眼で傍目も觸らず、

「嫁？ 嫁ぢや、誰方のぢや。」

「あなたの、父上、兼次さんの。」

「兼次の。」

「はい。」

「誰が媒約人をしたのぢやらう。」
と本心らしく、不審さうな。

「津田屋の米でござんすよ。」

と、はじめて言つて面を伏せた、此時まで津田屋
と言ふのを憚つた、お米は高作の妹である。仇の末
と思はれよう。振離されよう、突退けられよう、と
しつかと縋つて、

「お扇さんが、あの、此の土の下にいらつしやい
ます、扇屋の姉さんが、かきおきをなすつて、お媒

約人をして下さいました。」

平兵衛は狂へる耳に、聞き澄まして、

「や、それでは津田屋のお嬢様か。」

「はい。」

「おほ。」

と言ふと手を取つて、

「お手を頂く、お手を頂く。あなたには何とも申しやうもござりませぬ。此、此の度の御心配、えらい御恩を受けました、勿體ない、お手を頂く、あゝ、頂きます。平兵衛頂くでござります。」

勿體ないが、嫁ぢや。」

「父上。」

と縋りつけば、搔抱き、

「慈母、此の嫁御見さつしやい、私が娶つた花嫁ぢや、お扇めが媒約よ、兼次の嫁ぢや、見さつしやい、見たか慈母、見ゆるか、むゝ、主は天上が。」

と言つて月を仰ぐと、お米を抱いた手を離れた。

川千鳥が啼いたのである。ちり／＼と二聲三聲、
枯野に冷き絹をのべた、川面かけて、松の梢に、ち
ら／＼、ちら／＼、虚空に白き氣勢であつた。

平兵衛は恍惚として、しばらく松影を見入つたが、
慌しく其の調子が變つて、

「えゝ、枝が折れた、一枝ない、折りをつたな、
誰ぢや。

巡查か、高作めか、あゝ、氣にかゝる。

石塔立てる心願も、家が左前で手が届かず、可哀
や旅をかけた女房を、知らぬ土地の伊勢の土で、土
饅頭にして置くわ。

幹は枯れても枝は榮えい、葉は繁れと、右へ左へ
未廣がり、主が記念の扇の松ぢや。

左の枝が一枝無い、無い、無い。折れた、折られ
たぞ。むゝ、次郎助は助からぬか、一生涯盜賊の
名は消えぬか、埋木ぢやな、埋木ぢやな、枝はない
かい、ひと枝ないわ。

と八々と縫つた松の幹に、染み入る月の冷き影を、

むずと掴むで、目を射す緑を差覗く。

「父上。」

涙ながら袂を曳いても最う分らず、こゝに白銀師
の星墜ちて、松の樹の間に彷徨へり。

お米は見るに身も世もあられず、胸をせめて、繻
珍の帯の、もみぢの色彩散り敷くばかり、

「お扇さん。」

と泣聲で、塚に其の身を摺りつけた。

「お扇さん、貴女はお羨しい。

あなたは疾く死んで了つて、こんな、こんな悲しい思ひは、なさらないで済みました。

直々お目にかゝつたことのない私を、優しい、深切な女だ、とおつしやつて下すつて、兼さんや、

弟さん、皆様のことを頼むつて 然うい

つて、お扇さん、私や、私や、身にかへて心配をしましたけれど、不可いんですもの、出来ないんですもの。

貴女、貴女でさへ、おもふやうにおんなさませんものを、こんな、私にどうなります、どうなりませう。

御覽なさいな。

御覽なさいな、私が行届きませんばかりに、

弟さんはお可哀相に、牢へ入れられてお了ひなすつたではありませんか。

父上さんは、御覽なさいな、姉さん。

こんなで入らつしやるんですもの、私、私。」

と咽入りながら、

「私、兼さんに、いひわけがないんです。

私の、私の顔を、御覽なすつちや、嬉しさうに莞爾々々なすつた、祖母さんに、どうしてお目にかゝられませう。

先刻も私、もうあなた、殺されても歸らない氣で、東條様へ、駈込んで、お頼して、お頼して、それで、しかたがないんですもの。いゝ返事を聞かうと言つて、一緒に車を飛ばして来て、近所の茶店で、氣張つて居て下すつた、扇屋のおかみさん、松吉さん、其の方にだつて、おめ／＼顔が合はされないから、わき路から、遁げるやうにして、あなたの、あなたの御墓へ恚うやつて來たんですよ。お扇さん、私どうして、どういふ氣で、此處へ來たか御存じですか。私は、あなたが羨しい。

恚うと知つたら、兄さんが、香合の、香合のことを肯いて下さらなかつた時、すぐに、あなたの、あなたのさきへ、死んで了へばよかつたのに。

お扇さん、お羨しい、お扇さん。

兼さんはどんなにか、あなたのことを、泣いてばかりおいでせう。

あなた、私が、私が可愛くつて、兼さんに添はして下さいます、お心だつたら、なぜ、早く媒的して、何事もないさきに、お世話なすつて下さいません。

母さんは、お亡くなんなさらうつてか、早くからお嫁入りの着ものだけは拵へておいて下さつた、こんな私でも、せめて、あの、振袖きて嫁きませうのに。

妹が縁づいた、お舅の、お拵へなすつたものと思つたら、いくら、あの、兄さんだつて、庄さんの言ふこと肯いて、千鳥をこはして、黄金鎖をこしらへようとはしないんですよ。

私、おとしよりを何うしよう。父上を御覧なさいまし、お扇さん、御自分ばかり、いゝ事して、私や、ほんとに辛うございますよ。」

と、餘りのことに端なく、墳を抱いて姿を曲つた、

揺ぶるやうに身悶えすれば、墓も齊しく打揺らいで、
松影颯と啼き落す、月の空の、千鳥を聞け、静な月
夜も動くのである。

思ひ直して涙を拂ひ、

「あゝ、愚痴です。餘りだから、つい、私、堪忍
して下さいまし。父上にも母上にも、お許しを受け
ないで、兼さんの許へ嫁くんですもの、お叱りなす
つて、もう見ちや下さらないかも知れません。冥土
ぢや、あなたが便り。そして一緒においでなさいま
す、兼さんの母さんにも、あなたが、よくね、お執
成して、ふつゝかな處は、どんなにもお叱りなすつ
て、可愛がつて下さいますやうに、目をかけて下さ
います。

お扇さん、私もう死ぬより他に、届きやうはない
んですから、御一緒になるんです。

死效もないけれど。」

と、覺悟に澄んだ瞳にも、思はず又ほろりとして、
「死ぬのが唯一、情だわねえ。」

澄まして扱帯を解きかけた、わがねる心の松の枝。

「あ？」

と唐突に呼ぶと、お米は、飛びついて、

「あれ、父上。」

平兵衛が流を望むで、一文字に駆け出さうとした

のである。

継り留めても狂へる力、浮草ならぬ根をたへて、
 月あかりにさそはれて、ともに引摺られさうなのを、
 片手に松を抱きながら、帯際をしかと壓へ、玉の腕
 のしびるゝばかり。

「私、どうしたら可からうね。」

「此處に。父上、」

矢庭に男が、けたゝましい聲。

涙にくらんだ瞳にも、戀は明き月の顔。

「あゝ、兼さん。」

「お米さん。」

と兼次も、目は血走つて居るのであつた。

「あゝ、あゝ嬉しい。兼さん、好い處へ来て下さ
 いました。押切つて駈け出さうと遊ばすから、私、
 留めても力がない。危なかつた、危なかつた、兼次
 さん、」

と取継りたき男に忍んで、舅のうしろを庇へるなり。

「然うですか、お庇です。父上、確乎して下さいよ、氣を落着けて下さいよ、僕です、父上、兼次です。」

と涙をかぶつて見せた顔、偏に熟と見たばかり、ものいふ脣も動かなかつたが、其まゝ力が抜けたのである。

「まあ、可かつた、」
とお米はホツと呼吸をする。

「助りました、難有う。一晚中駈け廻つて、どんなに搜したか知れないのです。眞個にあなたのお庇だ。」

目前父が救はれた嬉しさに、酔へるが如き面色だつたが、氣が静まると、心付いたか、
「お嬢さん、」
と屹と見ると、怨めしさうな目をそらして、

「あなた、
だつて、そんな事を、おつ
しやるものぢやございません。」

「私は死ぬんぢやありませんか。」

と両手に握つて掌を溢るゝ、背負上の紅絞りに、
眉を隠して崩折るゝ。

兼次も色が變つて、

「貴女、それでは其の帯で、あゝ、弟の事に
就いて、御心勞下さいました事も、よく知つて居る、
弟は不可ません、父上は恚うなんです。」

僕も父を捜し／＼、死ぬ氣で此處へ來たんです
よ。

「えゝ！」

「僕はよく分つて居ます。僕等の、僕等のこんな
有様を、生きて見て居るに忍びない、何ともいへな
いお心でせう。――あなたさへ既にそれだ。」

何うして僕が生きて居られるもんですか。」

「まあ、そして、貴下が然うして、祖母さんは何うなりますねえ。父上」
とまた優しい手で、呼吸つき荒き平兵衛の背を擦つてお米が問うた。

「父上」

兼次も、其の胸を撫でながら、

「老人は氣丈な方です、氣丈な方なればこそ、此の混雑の中にも、朝もちやんとお汁を拵へて下さるくらゐだ。死にはしません、弟、弟が牢を出るまで無事でせう。」
僕は、思ふ仔細があつて、此の時節に、俵の家は一旦滅びて、次郎助と祖母さんとで、再び興る運命なんだと、悟りました。

お扇も犠牲になりました。僕もこゝで、犠牲になつて、父上、祖母さんの壽命萬々歳、弟の幸福を祈ります。僕は實に意氣地はない、男子たる價値はない、此の悲哀を突き抜けて生きて通る路が見附りません。

が、お嬢さん、

「お嬢さん。」

「存じません。そんな、水臭い事をおつしやるなら、お返事はしないで、さきへ死んで了ひますよ。」

「兼次さん、私がもう死なゝいでも、あなたは思ひ留つちや下さいますまいねえ。」

「僕はだらしがないんです、未来で禮がいひたいんです。」

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
52

しろほのほ
白き炎、
げつりはふてい
月裏法廷

「否、いひ置くことも、心残りも、貴下と一緒に死ぬんですもの、何が此の世にあるものですか。兼さんこそ、お老人があるけれど、私は何んにもありません。

唯ねえ、

恚うなれば、貴下の許へ嫁く時に、着て参ります、あの、お嫁入りの衣ものをね、おつかさんが拵へ置いて下すつた。惜いとは思ひませんが、一度あなたに見て頂きたう存じます。

ですけれども、かういふ事を、蟲が知らせたのでございませう。

今日、次郎さんの事をお願いに行きますのに、そればかりが頼みですから、神様の前へでも出ます氣で、何んぞ綺麗な、手を通しませんものと思つたものですから、長襦袢だけ、其の、あの、お支度のを着て出たのでございます。

見て下さいな。

これですよ。」

手なる扱帯の玉の緒かけて、振を返して颯となれば、牡丹を崩す緋縮緬、霜に落した影にこそ留南木の香こぼれたれ。果敢なき雪の膚を包めば、月さし染みて薄紅梅、着たる小袖も白ずむで、髪艶のみ冴ゆるのである。

兼次のわななく手の、竊と其の端を取るともに、思はず姿は重つたが、よろめき分るゝ平兵衛の影を追うて、前後に亂れて、はつと分れた。

「はゝはゝ、何處の人か若い方たち、なかの好いは結構ぢやが、」

洵や、何の見分けもつかず。

「遊びほうけて、日が暮れたぞ。道が危い、歸らつしやい。あゝ千鳥が鳴く、あゝ、鳴くわ、其の鳴いて行く方は死出の路ぢや、除けさつしやい。私が方へ来てはならんぞ、どれ、行かう、や、然らば。」

「あれ、」

「父上確りして下さい、確りなさいよ。どうしよう、お米さん。」

「兼さん。」

「父上が気が入りだね。」

「然うしてお置き申しては屹とお怪我をなさいますよ。」

「待つて下さい。」

兼次は頷いて、

「死ぬものは外にある。」

と懐から取出したのは、黄金の征矢の、お扇が咽喉を射たりし簪、黄金は月に然はなくて、鐵の矢竹のみ、血のあと蒼く、ニと燃えて、薄光りに輝いた。

「其の、背負上げをお貸しなさい。あゝ、成程、

摩耶夫人様のお守護が入つたまゝ、丁どいゝ。

父上を、お墓の松へ。」

「勿體なうございますね。」

「さあ、其方から其の端を、」

「堪忍して下さいませよ。」
お米は手繰つて目を瞑つた。

「はゝはゝ、」
もの寂しく打笑つて、平兵衛は松を抱いた、梢に
居つらむ風情して、ちり／＼や、亂るゝ千鳥。

「はゝはゝは、兎にも角にも宗近が、兎にも角にも
も完近が、御劍の刃の亂るゝ心」

恚りける處に

恚りける處に。

靴の音を間近に刻むで、川添を月の人。四五人、
脚の影を入交へて流るゝ如く衝と寄ると、眞直に此
方へ折れたが、ニ々と此の塚の前。

二人は平兵衛を抱くが如く、背後へ廻つて、身を
潜めた。白張提灯、手向の花、お米の袖も得隠れた
り。

階子の如く大きく背負つた、長方形の卓子を、墓

の前へ昇き据ゑると、一團の霧は月の前に翻へつた、
白き布を、引伸ばして、左右から、其の卓子を蔽う
たのである。

別に二人で一脚づゝ、二脚の椅子を、一方へ竝べ
て据ゑると、立かゝつて位置を見て、置直して、四
五人の影は其まゝちら／＼と月に枯野の蝶と消えぬ。
神人來れり焉。

冠かんむりして、装束しやうそくして、脊高せたかき二人ふたり、肅しゆくとして、對つゝに
 竝ならんで月下げつがに立たつて、やがて其その椅子いすにかゝつたの
 である。

佩劍はいけんの音鏘おとしやうぜん然ぜんとして、一條ひとすぢ、松まつの幹みきと入違いりちがひに、
 地上ちじやうに横よこたわると見程みほどに、一名めいの警官けいくわんあり。他たに尚なほ二
 三さんの人の影かげ、あるが中なかに小ちひさきが、一足前ひとあしまへへ出でて留と
 まつた、誰たれかは是これを見紛みまがふべき、囊やつれ果はてたる次郎じろす
 助けである。

婀呀あなやと見遣みやる、お米よねの目めに、其その判官はんくわんの冠かんむりした、
 右みぎなるは、東條とうてう六郎ろくらう。

左ひだりの椅子いすは、法學士はふがくしの檢事けんじにして、尾形をがた維明これあきと云
 ふのである。

夜よは早初夜はやしよやを過すぎたであらう。冬枯ふゆがれの月中空つきなかぞらに、
 樹きの幹みき、小せ草くさの裏透うら透くばかり、川かはの面もも浮うき出い
 でゝ、野のよりも蒼あせく佛立おほかげたち、神路山かみじやまかけて伊勢いせの海うみ
 まで、一い點ってんの隈くまあらず。

恚る時、美しきも醜きも、世にあるほどの形骸は
皆眠り死して、清き曇りなき靈魂は、凝つて一輪の
月となつて、其の氣嘯々として天に満ち、醜く邪
なる魂魄は、散つて、尾なき頭なき蛇と化して、
暗く、朦朧として地に潛む。

さて其の、月と、影とは、見よ、神路山の緑に由
つて、明かに分たるゝを。其の森林の裏にこそ、高
等法院は籠れるならずや。

されば一叢の杉の樹立も、神の都は尋常ならず、
薄紫の霧に似て、こゝに搖曳して、目前審判の
廷を開きたるものゝ如く、人の姿は、いづれ、清冷
なる五十鈴川の水を束ねたるに似ざるなく、就中、
兩個神聖なる法官は、神か鬼かを辨へず、其面貌其
風采、骨髓凡て玲瓏として、姿にひだある月の色は、
のり放つたる雲の名残の、なほ其の衣にかゝれるば
かり。一場の光景は、月に人影あるにあらず、月の
影である、月それ自身の影なのである。

但足許に枯れ臥した、萱薄の一葉一本、明らさま

に亂れたのは、此の囚はれたる少年のために、縦横、
刃を植ゑたる如く、弓を伏せたる如く、わなを掛け
たる如く、針を敷いたやうに凄じい。

こゝに、此の異様なる月の法廷は、濃き霜となつ
て凍らむか、はた白き風に化して飛び去るにあらざ
るよりは、長に大水 晶裏の一幅の墨繪となつて、
世の終を待つべき寂寞、毛一筋も動かなかつた。

時に、すつくと右の椅子より、正しく身を起した
のは東條判事、森嚴にして犯すべからざる音調以て、

「三重縣 町、平民、俵 平兵衛次男、次

郎助、更めて尋問する、」

と聊か其の身を斜になり、

「其の方は何歳ぢや、」

「十四年、」

と幽に答へた。

「此處は何處ぢや、存じ居るか。」

「はい、」

「それで可し。其の方、如何にしても贓品を隠し

た處を申さんが、今晚は、別に其の方に尋問せん。
本官から申聞かせる事がある、其の方、母親の墓の
前ぢや、謹んでよく聞け、
とて、懷中より、衝と一通の文を取出すと、心得
て差寄つた、一名、蝋燭を點ずる人影があつた。

見向きもせず、其の蝋の火と、月の方に、さら／＼と繰披げ、轟然として立つて、
「しるしばかりに候へども、彼の世に參る道しる
べに、線香の煙も細く見え候。

最早、思ひ置くこともなく候まゝ、心靜に一
筆かき残し。不束にはかなき水莖のあとに候へ
ば、御前様、優しきおん心におん判じお読み遊ばし
下されたく、申上げ候も、まことに身のほどを
存せず、我は顔の女よと、おんさげすみのほどお恥
かしく候へども、妾もの心覺え候てより、寐ぬる間
も兼次さんの事、忘れ申し候隙とては候はず。

固よりいやしき身に候へば、行末かけて、二世か
けて、と其のやうなる深き願ひはなく候ひしかど、

夏の一夜のおん情にも、惜からぬ命と思ひつめ申候に、香合の千鳥の事にて、此のたびの御相談、他人とは思はず、とおん申し下され候 お言葉胸に徹り、身に染みて、お嬉しく、命にかへても思ひさだめ候ひしが、おん察し下されたく、死ぬより辛き思ひして、其の願ひかなひ申さず、とても妾にてはと存じ候 につけ、ひとへにお継り申候 はおん前様おん事に候。

世の人のうはさにこそ、おん前様み心のほども漏れ承り候ひし、お姿もさる折に、物蔭より垣間見参らせ候 ばかりに候へども、一目おん顔を拜し候てより、妾、身にも命にもかへ難き、なつかしく戀しき御方は、何とやらむ、おんまへ様と過世の御縁おはしまし候 やうに思ひ迷ひ。

何故とは妾も知らず、神様とてもおんわきまへ候はじ。

然は妾いやしき心に、兼次さんを戀ひおもひ候ほど、おん前さまを思ひ染めニニゆゑに侍り。

わけもなく胸せまり、勿體なき事ながら、ひとり、おん前様お羨しく、果は嫉ましようも存じニニ寐覺の

折も候ひき。物狂はしう候。然やうに、おん前
さまと、なつかしき御方とは、過世の縁おはしまし
候やう思ひ込み候を、妾の口より、おん前さ
ま、おん名、申し聞え、何心なき兼次さんをお逢
せ申候やう申すゝめ候時の心の内、いくへにも
御推量下されたく、いかに、その外に千鳥を便る道
なき事とは申せ、蔭ながら兼次さんを、おん前様に
おひきあはせ申候時より、最早目は暗く、冥土
を辿り申候。

すぐにもお暇乞と存じ候へども、おん心を騒が
せ参らせ候罪おそろしく、そればかりに、浮世
をおもひ棄て、たゞ尼法師にもあひなり候心に
て、惜しからぬ露の命を、葉末の風に打ちまかせ、
弱々と煩ひをり候うち、情なや、また淺ましき
姿を、道ゆく夜の人目にさらし候事出来いたし、
殿方のみ大勢とて、別に、押籠めおかれ候處に
て、おもひかけず次郎ちゃんにお目にかゝり候が、
其の時のありさま申上ぐるにさへ、胸いたく、腕も
しびれ申候。

夢か現か、地獄の状、此の世にあらうとは思ひ
候はず、人目の隙に、繩目のまゝ、涙の袖にお抱
き申し、膚にてあたゝめ候ひつゝ、顔に顔さし寄せ
て、いたはり候へども、妾とは御存じながら、
人心地もなう、たゞ寒い、痛むとて、うつら／＼膝
枕のいぢらしさ。ひとへに摩耶夫人様のお名を唱へ
ながら、介抱いたし候うち、間もなく妾はおん
しらべにとて引立てられ、あかりはすぐに立ち候
。それさへ果敢なく存じ候ばかり、迎ひ車にて
歸り候をりから、お前さま、兼次様霜夜の辻に
お立ち遊ばし候をおなつかしく拜しニニ。弟
ごのおん事にて、御心配のほども察し入り候へども、
なか／＼無事にお歸りのほどは難かるべきやう、人
も申し、妾も存じ候を、さればとて此まゝに見
過され申すべきか。

惜しからぬ命を棄て候は、此の時と存じ候
まゝ、身にかへて次郎ちゃんを罪をあがなひ申
候。

其の後の新聞にて、おかゝり、おしらべの旦那様

は、東條六郎様と申し候。名高きおん方にておは
しまし候。よし、見まゐらせ候。まゝ、おん前
さま、おいで遊ばし、妾が願ひおつたへ下され、な
にとぞ何卒、次郎ちゃんをお助け下され候。やう、
御頼上。〓〓。

心のうちの十がひとつ、筆にはつくしがたく候へ
ども、眞實こめてかきのこし候へば、東條旦那様に
も、此のふみおん目にかけて下されたく、何事もおも
ひ候はねど、たゞ／＼涙はふり落ちて、筆の運びも
覺束なく候。あひだ、おん前様のお口添のみひと
へに願ひあげ。〓〓。

おなじ命を棄つるとて、世にあるほどの人ならば、
なほ効はあり候はむ、數ならぬ身の口惜や。

それも浮世に候べし。たゞ頼みなき戀のため
に、どうでも死ぬる命なるを、次郎ちゃんの事にま
で、兩路をかくるよ、と慾のやうに思召さば、いかゞ
せむ。そののみ心残りに候。

なほおん前さまと、兼次さん御事は、其の月の夜
のお姿にても、妾の迷ひの、迷ならで、實や二世の
御契と存じ候へども、此の後とても變らせなく、な
かよく御栄え遊ばし候やう、神かけ祈り

妾かほどにおもひ參らせ候兼次さん、おん前さま
のほか心うつり候やうの事あらば、七生まで
御怨み申候。

なほ妾なきのちは、たんと御恩になり候、叔
母上、千鳥様おん墓に、一つに遊ばし下されたく、
いちばん、我まゝが申しよく候まゝ、これは
祖母さまに、おねだり申。

繰言のやうに候へども、いつぞやの、お別れに、
兼次さん御機嫌のわるう候ひし事、いくへにいくへ
にもお道理ながら、ひとへによみぢのさはりとあひ
なり、死行き候身にも、情なく候まゝ、やがて、
おん前様御一緒に、叔母様の御墓へ、御披露の折か
ら、一度、あのお口許に莞爾といつも遊ばし候
お顔、かげながらお拜み申したく、それも東條の旦

那樣、おん情によらずしては、何とて御笑顔の
見られ候うべき。いまはの思ひは、思ふ人
にうつるとかや。妾も莞爾して、さらば、さらば。
御佛のおん名とゝもに、おん前様、兼次さん、
叔父上、祖母さま、次郎ちゃん、東條様、
おん名を唱へ、念じあげ

「読み果つるや、判官の聲はやゝ變つて、
扇屋うち、襟より。津田屋およね様さま」

咳 だにするものもなく、人の呼吸の氣勢して、
彼方此方にすゝり泣く、霜枯の蟲の下音。

千鳥はしば鳴き、鳴きかはして、読み去るもとに
灯に、読み進む末の、高々と、月の面に照されたる
中を、此巻紙の地に、其透模様ある如く、ちら／＼
と飛めぐつて、幻に翼をかはす趣であつた。扇
屋襟、といふ時、灯がふつと消えた。冷たき川風一
陣、繰りx披げた文を巻いて、ぶるぶると震へて、
端が靡いて、空さまに吹いて取らうとするのを、判
官が確と取る手に、ひら／＼とからんで吹いた、白

き炎の状なる中に、ちり／＼と鳴く聲して、燦然として、掌に、光を放つは何等のものぞ。

鑿の牙に、黄金の羽の、霜に月置く細工ぞ、と平兵衛が拳を握つた、三千金の黄金の千鳥、毛筋に月の光を宿して、數ふるばかり薄あかるく、髣髴として留まつたのである。

「わあ、千鳥が、」

と平兵衛は、塚の蔭にぬつくと立つ。

「父上、」

お米がいとも細い聲で、

「お白洲でございますよ。」

はつと四邊を一目見て、眞蒼になつて、かくるゝ平兵衛。さては人心に返つたり。

千鳥が来て、何處よりか、翼を翻して判官の掌に留まつた時、椅子を並べた尾形検事の、かき置のなかばを聞きさしてより、胸を反らして、うしろざまに、椅子のかゝりに仰ぎ凭つて、寂然として死灰の如く、眠れる状に、否、時々こつくりと額を垂れては、また、がつくりと月を仰ぎて、事實坐睡りつゝあつたのが、屹と鋭い目で一目見た。が、其まゝ再

び眼を閉ぢた。

「三重縣古市町平民旅宿 業津田屋高作。」

「は、」

と背後から出て頭を下げたは、證人として差控へた、高作であつた。判官は卓子に差置いて、

「此は、其の方の香合か、」

「はつ、」

「手に取つて差支へん。」

「相違ございません。」

「次郎助、」

「」

「有體に申せ。其の方香合を盗んだと申すは、親兄にかゝる嫌疑を身にかへた偽であらう。母の墓前ぢや、偽を申すな。入らざる手数を――」

不埒ものめ。」

次郎助、泣きじやくりして唸りながら、
「眞個に、眞、眞個に取つたんです。」

「控へろ。其の方の盗んだものが、空を飛んで本官の手に入るか。」

「そ、それだつて、」

引被せて、

「黙れ！」

「は、はい。」

「千鳥は母の名ぢやと申す。細工に魂があつて、焼かるゝを厭うゝて、こりや自然から飛んだのであらう。高作。」

「は——つ。」

「人情を辨まへよ。雛の首を捻切るものがあらば、残酷ぢやと思はんか。」

千鳥は、生きて居る如き作ぢや。細工人平兵衛の戀女房の名ぢや、と申す。分つたか。

追つて下げ取らず、手續をして受取れ。

次郎助、次郎助。」

「證據なし、當豫審廷に於て免訴を申渡す。」

「下れ、」

と傍から動かして、ぞろ／＼と月明りに、小草に影が入り亂れて、川添の道へ引くのであった。

お米は、我を忘れて飛び立つて、裳も、袖も、はら／＼と走り寄つて、何んにもいはず次郎助の肩を抱いた。

思ひやつて、警官が、傍に退いた時、二人は此方を向直つて、遙に判官の座を拜した。

免訴の宣告をなすと、もに、東條六郎は八々と椅子に腰を落して、これは又、前のめりに、頭を垂れて眠つたのである。

月は玲瓏として約五分時、神々しいばかり二人を照らした。

殆ど同時に、衝とニく、明かなる瞳、鋭き眼光、屹と見合はせ、言ひあはせたやうに、淺笑し且つ微笑した。

東條判官はやゝ起きかけつゝ、

「いや、急にお招きした、今夜催す夢見の會と言ふのはこれぢや。」

「思ひつきぢやが、私は寒かつたよ。」

と衣兜に兩手をさし入れて、見栄もなく、肩を動かして、法學士検事尾形維明は又莞爾とした。

時過ぎて、椅子もまた卓子も掃去られた如く消え失せて、月の風に、草騷がしいほどであつた。

さわ立ち靡く、枯野の中に、千鳥の塚の前に立ちあらはれ、尾花が本に笈を啓けて、扇を出して、さりと開いて、霜にのせて、やがて其の前に跪いた、怪しいものが、月に唯一人ある。六部の修行者。――
香合は、豫め此の六部の手から、東條に手渡して置いたに相違ない。――

合掌すると、帯につけた鉦を下腹に、撞木を片手に、悠々と胡坐になり、

「千鳥さん、其時の旅客です。扇を賣つてござつたのを、お見染め申して、人の妻となられたに就い

て、此體になつたが、あゝ、彼是一昔。久しぶりでお懐しい。が、今は、あなたが冥土の障になるやうな、妄執はないのぢやから、薩張と逢つて下さい。いや、それにつけても慕はしい、夜とゝもに昔の戀を語らうよ。」

日と月の、軌道の外にありといへる、世の一個の客星は、明星とゝもに、曠々たる月の枯野に宿つて、夜もすがら、千鳥の鳴く音に和して、鉦打鳴らし、通夜したが、東雲の頃であつた。

差置いた扇を拾ふと、

「おもしろい、おもしろい。」
と疊みかけたを半開きに、枯尾花に立交り、風に狂ずる風情して、笈荷へるまゝ舞ふが如く、ふら／＼と野を横に、やがて川霧に行方知れず。

二日経つた午過には、四日市の渡に見えた。

お扇が黄金の矢の簪は、額にして、摩耶夫人に参らすか、それとも津田屋が補助をして兼次が學成り

志を遂げた時、お米が祝言の髪に挿すか、それは未だ分らぬ。

津田屋は千鳥軒と屋號をかへた。音に響いて、萬金をかけて香合を望むものがあつたが、以つての外顔をして、高作は肯ぜぬ。――或は影を追ひ、あとを慕て、六部の修行者が思ふ旨にまかすのであらうといふ。

【完】